

序云。一日訪石松翁。翁出。扇示予謂曰。昔在有馬之役。所與子更屬主公者也。子記之乎。因憶彼時予年十六。在東武。患小瘡。腫痛甚矣。淹在牀。弱。強乘馬。自東武。從君行。倍道兼行。既至。有馬。痛不可堪。膿血潰爛。手足不得屈伸。二十日夜。家父兄加先陣。在

つて曰く、昔在有馬の役に、子と更、主公を扇ぎし所の者なり。子之を記するかと。因て憶ふ、彼の時予年十六。東武に在りて小瘡を患ふ。腫痛甚だし。淹しく牀褥に在り。病を強ひて馬に乗り、東武より君の行に従ひ、道を倍して兼行し既に有馬に至れば、瘡痛堪ふ可からず。膿血潰爛し、手足屈伸するを得ず。二十日夜、家父兄先陣に加はりて竹橋下に在り。君の營を去ること三十餘弓なるべし。家父數、使を遣して予を戒めて曰く、今夜將に城を攻めんとす。汝既に微且つ瘡。又蹶整に苦み、手、刀を執るを得ず、足、路を行くことを得ず。強ひて君の行に従はば、則ち跣歩にして倒れん。人其病を言はずして其怯を笑はん。我れ而の死を愛むに非ず、而の名を愛むなりと。又執友安東内藏助を倩ひて堅く制して予を止む。予甲冑を着け兩奴に扶けられて君の營に至り、當事池邊氏を招き、手足を出し之を示して曰く、予本麾下の列に在り。然れども瘡痛此の如く、君の行に従ふことを得ず。將に馬に乗つて先陣

竹橋下。去。君營可三十餘弓。家父數遣使戒予曰。今夜將攻城。汝既微且瘡。又苦蹶整。手不得執刀。足不得行。路強從君行。則跣步而倒。人不言其病。而笑其怯矣。我非愛而死。愛而名也。又倩執友安東内藏助。堅制止予。予著甲冑。扶兩奴。至君營。招當事池邊氏。

に赴かんとす。以て軍法に背くと爲すこと勿れと。既にして竹橋下に至る。家父喜んで曰く、汝を止めし所以は、其の來らざるを慮ればなり。今能く來る。其志必死に在らずんば底に縁つてか此に至らんと。夜將に參半ならんとし、衆と同じく進む。果して蹶き倒る。甲冑を踏んで行く者數を知らず。兩奴扶起して進む。烏銃雨集して左右死多し。血予が左腕に濺ぐ。黎明衆と同じく退き麾下を過ぐ。小原氏弓を横へ君傍に有り。左腕の朱般を見て以爲らく、戰つて創を被ると。謂つて曰く、丈夫なるかなと。予爲すこと無しと雖も、而も幼にして病を強ひて先陣の數に加はる。亦郷人の共に知る所なり。明年二月二十八日、城將に拔けんとす。主公兵を麾き直に登る。銃飛んで電の如く、死傷甚だ多し。熱堪ふべからず。翁、此扇を以て主公を扇ぐ。渴甚だし。十時攝津、橋子を擊いて之を奉る。渴猶ほ止まず。翁、扇を予に授け、下つて飲を取る。遂に諸軍と與に其巢穴を屠り、噍類無し。指を屈す

出_二手足_一示_レ之曰。予本在_二麾下_一。然痛如此。不得_レ從_二君行_一。將_三乘_レ馬_二赴_レ先陣_一。勿_レ以爲_レ背_二軍法_一也。既而至_二竹橋_一。下_二家父_一喜曰。所以止_レ汝者。慮_二其不_レ來也。今能來。其志不在_二必死_一。緣_レ底至_レ此。夜將_二參_レ半_一。與_レ衆同_レ進。果而_レ倒。踏_二甲冑_一。行者不知_レ數。兩奴扶起而進。鳥銃雨集。左右死多。血濺_二予之左腕_一。黎明與_レ衆同退。過_二麾下_一。小原氏橫_レ弓。在_二君傍_一。見_レ左腕

れば今に二十二年。而も扇新なるが如し。翁の君を愛する知るべし。古人は功有るも仇らさず。況や予の功無きをや。然れども翁の求_レ辭_二可_レからず_一。遂に之が銘を爲す。銘に曰く、柄は掌握に在り、動いて功を樹つ。君に難に従ひ、誠に威風を輔くと。嗟省菴文事を以て一世に表見す。今此編を讀む。則ち其少年の勇壯豈に毅然たる大丈夫に非ずや。即し省菴をして戎馬の際に生れしめば、則ち其爲す所亦廻かに羣を出でん。古云ふ、文事有る者は必ず武備有り。と。省菴焉れ有り。

- 鳥原の風 ● 江戸 ● うら血くづれたれ手足の神羅自由ならず ● 竹東の柄のかげ ● 一弓は八尺
- 脚腰の腫物 ● 脚のはれ上ると ● 足うち反戻して歩行すべからず ● 半歩 ● 父の友 ● 膝下
- 汝の來らざるやう止めしは來るまじきを心配すればなり ● 夜半 ● 銃丸雨の如く飛びくる ●
- 夜明方 ● あか黒き血の色 ● 賢哲 ● 根據地を攻め落して屠殺す ● 生類無し ● 扇の柄は手のひらに握られ、動いて功を立つ ● 一時代記あるはる ● 戦国時代 ● 孔子の言 ●

朱股_二以爲_レ戰_一而被_レ創。謂_レ曰。丈夫哉。予雖_レ無_レ爲。而幼而強。病加_二先陣_一之數。亦郷人之所共知也。明年二月二十八日。城將_レ拔。主公應_レ兵直登。銃飛_レ如_レ電。死傷甚多。熱不可_レ堪。翁以_二此扇_一。扇_二主公_一。湯甚。十時。攝津學_二橋子_一。奉_レ之。湯猶_レ不止。翁授_二扇_一於_レ予。下而取_レ飲。遂與_二諸軍_一。展_二其巢穴_一。無_レ唯類_二矣。風指_二二十二年_一。予今而扇_レ如_レ新。翁之愛_レ君。可知_レ焉。古人有功不_レ伐。況予之無_レ功哉。然翁之求_レ不可_レ辭。遂爲_二之銘_一。銘曰。柄在_二掌握_一。動而樹_レ功。從_二君於_レ難。隨_レ輔_二威風_一。嗟省菴之際。則其所爲亦廻_レ出羣矣。古云。有_二文事_一者。必有_二武備_一。省菴有_レ焉。

省菴、高義、世絶えて無し。其學亦世に多く有らざる所なり。而も性謙讓なり。男守直に告ぐる遺訓に曰く、我れ才無く徳無し、汝、諸生と、年譜行狀行實碑銘墓銘及び文集の序等を撰ぶことなかれと。

- 義の高きこと世に絶えてなし ● 行事の實、實は狀と相對していふ語

省菴高義世絶無_レ其學亦世所_レ不多有_レ也。而性謙讓。告_二男守直_一遺訓曰。我無_レ才無_レ徳。汝與_二諸生_一。勿_レ撰_二年譜_一行狀行實碑銘墓銘。及文集序等。

二山義長

二山義長、字は伯養、小字は彌三郎、時習堂と號す。石見の人。

二山義長。字伯養。小字彌三郎。號時習堂。石見人。伯養年少時來江戶。及壯仕中川侯。亡何辭去。乃露藥隱于郭北駒籠。伯養素嗜學。致仕後。致政以求道爲事。初好釋老。又奉王陽明說。既而有疑焉。終歸朱紫陽。於是著朱王學辨。仲郵惕齋序之。曰。二山老丈

伯養、年少の時江戸に來り、壯に及び中川侯に仕ふ。何も亡く辭し去る。乃ち藥を隠きて郭北の駒籠に隱る。伯養素學を嗜む。致仕の後、致政として道を求むるを以て事となす。初め釋老を好み、又王陽明の説を奉ず。既にして疑有り。終に朱紫陽に歸す。是に於て朱王學辨を著す。仲郵惕齋之に序して曰く、二山老丈蚤く王氏の心學を修む。後來洛閩の正學を聞き、幡然として之に服從す。今や其己に懲る者を以て人を誡め、其己に獲る者を以て人に共にせしむ。豈に忠に非ずやと。

● 城北駒籠 ● 佛學と老莊學と ● 朱學を指す ● 長者に對する尊稱 ● 王陽明の心を主とする學風 ● 酒は酒闔にして二程子の生知、同は同申にして朱子の生知、同じて程朱の學 ● 自分の懲りたる佛老及び王學を以て人を戒め、自分の受る所ありたる朱學を人に勧む

蚤修王氏心學。後來開洛閩正學。幡然服從之。今也以下其意於己者上誦乎人。以下其獲於己者上共乎人。豈非忠耶。

伯養、篤學慎行、當世之中江藤樹に比すと云ふ。室鳩巢が遊佐次郎左衛門に答ふる書に曰く、谷氏・二山氏に至つては、未だ其人を見ずと雖も、耳之を聞き熱す。蓋し燥軒・惕齋の亞なり。足下以て篤行の君子と爲すは之を得たりと。

● 學問に熱心に行つ、しむ ● 土佐の谷一齋 ● 米川氏、名は一貞、京都の服夫にして三宅吾齋に學ぶ ● 中村惕齋

耳聞之熱。蓋採軒惕齋之亞也。足下以爲篤行君子者得之。

伯養妻を娶る。其儀一に文公家禮に遵ふ。家禮に壻乘馬の文有り。伯養、家に馬を畜はず。乃ち之を人に借りて其事を行ふ。

● 朱子家禮

伯養娶妻。其儀一遵文公家禮。家禮有壻乘馬文。伯養家不畜馬。乃借之入而行其事。

伯養居家平生著上下。上下禮服也。居本鄉弓街一時。其家無井。常料之鄰家。鄰家一日濬井。養當出役。夫以助之。適伯養僕有疾。伯養乃出躬自執。屢分力。尙不脫。上下云。

伯養家に居て平生上下を著く。上下は禮服なり。本郷弓街に居せし時、其家に井なし。常に之を鄰家に料む。鄰家一日井を濬ふ。養當に役夫を出して以て之を助くべし。適く伯養の僕疾あり。伯養乃ち出で躬自ら屢を執て力を分つ。尙ほ上下を脱がすと云ふ。

●弓町 ●井戸後へ ●つるべなは

有善者佐佐木玄信者善記諸家系譜。而至其不可得詳。則率合附會以欺世。一日過伯養。談及譜。伯養

善者佐佐木玄信といふ者有り。善く諸家の系譜を記し、其の得て詳かにす可からざるに至つては、則ち率合附會して以て世を欺く。一日伯養に過り、談譜に及ぶ。伯養問うて曰く、荆妻は垂水氏なり。傳へ言ふ、昔者垂水某なる者、伊勢の國司に仕ふと。既に其名を失し、且つ未だ何の世の人なるかを知らず。則ち其跡絶えて考ふ可からず。豈に遺憾ならずやと。玄信曰く、此れ垂水廣信

問曰、荆妻垂水氏也。傳言昔者垂水某者。仕伊勢國司。既失其名。且未知爲何世入。則其跡絕不可考。豈不遺憾哉。玄信曰、此垂水廣信也。廣信稱河內守。伊勢垂水人。初仕其國司。後事其後。醜天皇。諫疏不聽。而去。廣信好學。始奉伊洛說。所著有嘉文亂記六十

なり。廣信、河內守と稱す。伊勢垂水の人。初め其國司に仕ふ。後後醍醐天皇に事へ、諫疏聽かれずして去る。廣信學を好み、始めて伊洛の説を奉ず。著す所、嘉文亂記六十五卷あり。嘗て藤藤房に勸めて朱子集註を讀ましむ。事長濟草に載す。今子の爲に誦讀せんと。乃ち誦する者歴歴として聽く可し。伯養驚き且つ喜んで曰く、吾子の記憶誠に天性に出づ。此に由るに非ずんば余何を以てか之を知るを得ん。請ふ再誦せよ。余將に之を録せんとすと。玄信又復誦す。伯養隨つて之を筆し、以て明證を得たりと爲す。是時に當つて、京師の藤井懶齋國朝諍錄を撰ぶ。伯養、懶齋と久要を爲すを以ての故に、之を懶齋に致し、以て諍錄に載せしむ。迨後永井貞宗の本朝通紀、寺島良安の倭漢三才圖繪、垂水廣信此邦にて始めて朱注を讀む事を載す。蓋し皆諍錄に本づくなり。而るに所謂垂水廣信は古今其人無し。嘉文亂記及び長濟草、亦未だ其書有るを聞かず。是れ本玄信一時の妄

五卷。嘗勸藤原房讀朱子集註。事載長濟草。今爲子誦讀焉。乃誦者歷歷可聽。

語に出でて、伯養之を信じ、海内遂に犬吠の説を唱ふと。此れ日夏高繁の兵家茶話に辨する所なり。

伯養驚且喜曰。吾子記憶誠出天性。非由此余何以得知之。請再誦。余將錄之。玄信又復誦。伯養隨而筆之。以爲得明證。當是時。京師藤井懶齋撰國朝諺錄。伯養以下與懶齋爲久要。故致之懶齋。以載諺錄。迨後永井貞宗本朝通紀。寺島良安倭漢三才圖繪。載垂水廣信此邦始讀朱注事。蓋皆本諺錄也。而所謂垂水廣信古今無其人。嘉文亂記。及長濟草。亦未聞有其書。是本出玄信一時妄語。而伯養信之。海内遂唱犬吠之說。此日夏高繁兵家茶話所辨也。

● ことづく ● 家の系圖 ● 自分の妻の諱、愚妻 ● 諺言 ● 伊は程伊川の伊、源は源陽即ち伊川の生地、轉じて程子の稱 ● 藤原房 ● あきらかなるさま ● 今一度誦す ● 舊くよりの約束 ● 一犬吠に吠えて萬犬吠を傳ふるが如く、端を次々に傳ふ

伯養妻垂水氏。名三。字省君。貞正操有。且つ伯養に學び、書を讀み古君。貞正有操。且學於伯養。

伯養の妻垂水氏、名は三、字は省君、貞正操有り。且つ伯養に學び、書を讀み古に通ず。伯養の釋老を學ぶや、省君隨つて其義を領解す。伯養の王となり朱となるや、省君亦克く之を治む。世稱して曰く、夫婦並に才學有る者、二山伯

讀書通古。伯養之學釋老也。省君隨而領解其義。伯養之爲王爲朱也。省君亦克治之。世稱曰。夫婦並有才學者。有二山伯養。貝原益軒耳。嘗伯養將出而有火。乃謂省君曰。火遠矣。必不及焉。若漸逼則吾歸携汝去。少焉風急延燒及近鄰。弟子謂省君曰。災今難免。內君盍早去。省君從容曰。夫臨出謂妾曰。火逼必歸共行。然不待夫而去。此不奉夫之言也。與不奉夫之言以求苟生。寧燒死而全女子節。時火益熾。居益危。而守死不變。已而伯養遂歸俱共去。

養、貝原益軒有るのみと。嘗て伯養將に出でんとして火有り。乃ち省君に謂つて曰く、火遠し。必ず及ばじ。若し漸々逼らば則ち吾れ歸つて汝を携へ去らんと。少くありて風急に、延燒近鄰に及ぶ。弟子、省君に謂つて曰く、災今免れ難し。内君盍ぞ早く去らざると。省君從容として曰く、夫出づるに臨み妾に謂ひて曰く、火逼らば必ず歸つて共に行かんと。然るに夫を待たずして去らば、此れ夫の言を奉ぜざるなり。夫の言を奉ぜずして以て苟も生を求めんよりは、寧ろ燒死して女子の節を全うせんと。時に火益々熾々、居益々危し。而も死を守り變ぜず。已にして伯養遂て歸り俱に共に去る。

● 佛子及び老莊の子 ● 陽明學となり又朱子學に變了 ● 燒け廣がりて近所に至る ● 平然と立ちつく

伯養以寶永己丑八月二十日終。享年八十有七。妻省君先一年卒。年八十。共窆于江戸牛籠宗參寺。

伯養、寶永己丑八月二十日を以て終る。享年八十有七。妻省君先だつこと一年にして卒す。年八十。共に江戸牛籠の宗參寺に窆る。

●六年

谷松。字宜貞。小字三介。號己千。又號一齋。土佐人。一齋父素有字時中。初入釋。親覽派。住持土佐眞常寺。爲人豪爽。有忠節。最

谷松

谷松、字は宜貞、小字は三介、己千と號し、又一齋と號す。土佐の人。一齋の父素有、字は時中。初め釋に入り親覽派を祖とし、土佐の眞常寺に住持たり。人となり豪爽、志節有り。最も儒學を喜ぶ。後遂に髮を種ゑて大學と稱し、儒を以て業と爲す。大儒野中兼山、山崎闇齋、皆之が訓導を得たり。時喪亂の餘、文運未だ開けず。況や僻郷最も典籍に乏しきをや。而るに時中諸を四

喜儒學。後遂種愛稱大學。以儒爲業。大儒野中兼山。山崎闇齋。皆得之訓導。時喪亂之餘。文運未開。況僻郷最乏典籍。而時中求諸四方。多儲之家。本饒實爲殆蕩盡。皆使一齋學。小倉三省所一也。謂曰。吾聞富貴失志。田產五百石。此非所以惠子孫也。乃需之僅存。數頃可。以。飼。口。云。

方に求め、多く之を儲ふ。家本饒實なりしも爲に殆ど蕩盡す。嘗て一齋をして小倉三省の所に學ばしむるや、謂つて曰く、吾れ聞く富貴は志を失ふと。田産五百石、此れ子孫を惠む所以にあらずと。乃ち之を儲ぎ、僅かに數頃の以て口を飼す可きを存すと云ふ。

- 親覺上人を祖國とする淨土眞宗派 ● 氣象大きくして主義節操を有す ● 戰國の亂後にて文化未だ開けず
- かたみなかにて書物乏し ● 官家なりしも書物代のため財を無くす ● 富貴なれば志極く ● 田地の上り高五百石 ● 歌町歩

一齋土佐を去り京師に移つて、江戸に來り、稻葉侯に遊事し、暮年之を辭す。性淡泊にして財貨を屑とせず。野中兼山嘗て重價を出し、正宗が鍛ふる所の一名劔を購ふ。乃ち一齋に托して之を研工に付す。時に某甲將に冠せん

之。性淡泊不
屑財貨。野中
篁山嘗出重
價。購正宗所
鑄一名劔。乃
托一齋付之
研工。時某甲將冠。一齋爲之實。則贈其劔爲祝。他日兼山聞之。亦略不介意。

す。一齋之が寶たり。則ち其劔を贈つて祝と爲す。他日兼山之を聞き、亦略意に介せず。

● 曠年 ● 研工に費す ● 元服す ● 何ともははす

一齋悟性不
逾中人。而勤
苦求意。以是
其學有體用。
徂徠獲苑隨
筆曰。有谷一
齋先生者。嘗
上封事。而徂
格不用焉。予
得其藁而讀

一齋、悟性中人に逾えず。而も勤苦意を求む。是を以て其學體用有り。徂徠の苑隨筆に曰く、谷一齋先生といふ者有り、嘗て封事を上る。而るに徂格して用ひられず。予其藁を得て之を讀むに、其中に遷都の事あり。故に予此を以て其學の無所見たらざるを識る。今の世に當り、能く斯の業を爲す、亦其人を難んずるかなと。夫れ徂來、名を一世に擅にし、詞林に於て許可する鮮し。而るに獨り之を稱すること此の如し。則ち以て一齋を定むるに足らん。

● 聖賢哲人に類せず ● 學問の根本的基礎と其の運用 ● 難白書 ● 遷り止められ取り上げられず

之。其中有遷
都事。故予以
此而識其學
不爲無所見
也。方今之世
能爲新業亦
難其人矣。哉
夫徂來名擅
一世。於詞
林鮮許可。而
獨稱之如此
。則足以定一
齋。

● 車禍 ● 見識細きに非ず ● 文壇に於て獨り人に許さず

一齋の墓は江戸遷谷長谷寺に在り。石有り銘序を勒す。大高坂清介之を撰ぶ。碑面の楷字谷一齋宜貞居士之墓の九字を題す。

● 彫りつゞる

一齋墓在江
戸遷谷長谷
寺。有石勒銘
序。大高坂清
介撰之。碑面
楷字題谷一齋
宜貞居士之墓
九字。

卷之四

伊藤維楨

伊藤維楨、字は原佐、仁齋と號す。又古義堂と號し、古學と私諱す。平安の

伊藤維楨。字原佐。號仁齋。又號古義堂。私諱古學。平安人。仁齋自幼穎異。其始習句讀。時意已欲以儒熾。于

仁齋幼より穎異。其始めて句讀を習ひし時、意已に儒を以て一世に焜耀せんと欲す。稍長するに及び堅苦自ら勵む。而るに家素賈を業とす。故に親串以て利に迂なりと爲し、皆之を沮んで曰く、學問は是れ彼の邦の事なり。此の邦に在りては固より無用に屬す。假令之を能くするも售れ易からず。醫術を爲めて以て生産を致すに如かずと。仁齋從はず。是時に當つて家に衰謝し、沮むこと愈々止まず。而も其志確乎として變ぜず。

● 才能すまれて業に就んづ ● 素賈を業とす ● 世の中の名を聞かず ● 高貴 ● 親類共は利益にうとし

邦事也。在此邦一國屬無用。假令能之不易售。不如爲醫術一以致生産。仁齋不從。當是時一家日衰謝。沮者愈不止。而其志確乎不變。

とす ● 支那 ● 醫術を習つて資産を作るが宜し ● 貧困す

年十九、父に従ひ琵琶湖を過る。詩有り云く、古來云ふ此の水、一夜平湖と作る。俗説尤も信じ難し、世傳詭言亦迂なる。百川流れて已まず、萬谷滿ちて相扶く。天下滔滔たる者、憐むべし異教に趨るを。又園城寺の絶頂に登るに云ふ、山行六七里、往いて杳冥の中に到る。船遠くして閑閑として去り、天長うして漠漠として空し。嶺は環る村落の北、湖は際る寺門の東。男子空しく死すること莫かれ、請ふ看よ神禹の功と。識者此を以て其志の存する所を知る。

● 俗説、孝聖天皇の御宇一夜に富士山を生じ同時に琵琶湖を生ずと云ふ ● 多くの河水流れて止まらず、其の上多くの谷々に水滿ちて之を助くるを以て終に此の湖を爲せり ● 天下の人士河水の濁々たる如く相運れて邪道に

年十九從父過琵琶湖。有詩云。古來云此水。一夜作平湖。俗說尤難信。世傳詭言亦迂。百川流不巳。萬谷滿相扶。天下滔滔者。應憐異教趨。又登園城寺絶頂云。山行六七里。往到杳冥中。船遠閑閑去。

天長漢漢空。嶺環村落北。湖際寺門東。男子莫空死。請看神禹功。識者以此知其志之所存。

初奉宋儒。著大極論。性善論。心學原論等。及二年三十七八。始出己見。故其說無論早晚有異。同而古學文集。載之。是東涯之孝思。雖非定見者。不忍棄之云。

初め宋儒を奉じ、大極論・性善論・心學原論等を著す。年三十七八に及び、始めて己が見を出す。故に其說無論早晚異同有り。古學文集之を撰載す。是れ東涯の孝思、定見に非ざる者と雖も、之を棄つるに忍びざりきと云ふ。

- 自分の意見を立つ
- 初年と晩年とにて相違あり
- 孝行の意
- 確定せる見解に非ざるものも棄て去り

大高坂清介。著適從錄。以駁仁齋。弟子持來。師之曰。先生作之辨。仁齋笑而不。

大高坂清介、適從錄を著し、以て仁齋を駁す。弟子持來り之を師して曰く、先生之が辨を作れと。仁齋笑つて言はず。弟子曰く、人、書を著して以て恣に己を議す。苟も辭塞らすんば、豈に黙して止むべけんや。先生にして答へずば、則ち請ふ余代つて之を折んか。仁齋曰く、君子は争ふ所無し。如し

言。弟子曰。人著書以恣議己。苟辭不塞。豈可默而止乎。先生而不答。則請余代折之。仁齋曰。君子無所爭。如彼果是我果非。彼於我爲益友。如我果是彼果非。他日彼其學長進。則當自知之。小子宜深戒。爲學之要。惟虛心平氣。以爲己爲先。何毀彼立我。徒增口多口。

彼果して是に我果して非ならば、彼は我に於て益友たらん。如し我果して是に彼果して非ならば、他日彼其學長進せば、則ち當に自ら之を知るべし。小子宜しく深く戒むべし。學を爲すの要は、唯だ虚心平氣にして、己を爲むるを以て先と爲す。何ぞ彼を毀り我を立て、徒に茲の多口を憎まん。

- 辨解の辭無きに非ればだまつて居るわけ無し
- 贈答
- 門人を指す
- 學をさむるは自分の身を修むるを第一とす
- 口数多し

後德大寺藤公。好學。時集京師諸名儒。使其相討論。以聽其定說。時仁齋年方

後德大寺藤公、學を好み、時々京師の諸名儒を集め、其を相討論せしめ、以て其定説を聽く。時に仁齋年方に壯、亦召されて列にあり。諸儒皆初め怡聲氣を下し以て辨説し、各々相容れざるに及ぶや、努嘴説を立て誼諱已ます。仁齋獨り坦夷濃厚終始一の如し。竟に舉坐皆之に歸す。

壯亦被召在列。諸儒皆初怡聲下氣以辨說。而及各不相容也。勢嘯立說諠譁不已。仁齋獨坦夷溫厚終始如一。竟舉坐皆歸之。

嘗夜行郊外。劫賊四五人當路立。各按劍曰。吾徒不醉不樂。今無酒資。客若缺腰纏。則自脫衣裳一供之。仁齋神色不少動。曰。今日適無錢。敝袍脫以遺之。耳。且問汝輩常以何爲業。邪。曰。昏夜橫

● 聲をやはらかにす ● 口を失らせて自説を立し 騒ぎてやまらず ● 氣平かにあだやか

弟に弟に、一日も無かる可からざる者は是れなり。人にして道無ければ禽獸のみと。言未だ畢らざるに、賊皆頓首涕泣して曰く、噫君と吾と鈞しく是れ人なり。而も事業の迥かに異なることは是の如し。吾れ甚だ恥づ。願はくは君吾儕の罪を宥せ。今より後灰を飲んで胃を洗ひ、謹んで教を門下に奉ぜんと。遂に皆改心し自ら勵むと云ふ。

● おひはぎ ● 酒代 ● 朋儕の金 ● ふくろに入れてたる錢 ● 破れどてら ● 夜中もしあるき人の物を奪ひ取つて生活す ● おひはぎ ● 舉動 ● ナつかかり心を入れかへて教を受けたし

行。掠奪以自給。是其業也。仁齋曰。以二若所爲爲業。吾何拒焉。輒脫服以授之。將去。於是賊止。仁齋曰。吾儕草竊爲衣食。數年。未嘗見一舉止如客者。抑客何爲者。曰。儒者也。曰。儒者爲何事。曰。以二人道二教二人者也。所謂人道者。孝於親。弟於弟。不可一日無者是也。人而無道。禽獸焉耳。言未畢。賊皆頓首涕泣。曰。噫。君與吾鈞。是人也。而事業之迥異如是。吾甚恥。願君宥吾儕罪。今而後飲灰洗胃。謹奉教于門下。遂皆改心自勵云。

嘗過花街。娼家使婢邀入。仁齋不肯。婢

嘗て花街を過る。娼家、婢をして邀へ入れしむ。仁齋肯せず。婢曰く、少しく懇うて去る、事に於て害無けん。郎君其れ辭する勿かれと。直に袂を牽いて樓に

曰。小憩而去。於事無害。耶君其勿辭。直奉袂上樓。仁齋固不知爲倡家。中心私揣。是非內交。於吾。又非要譽於鄉黨朋友。蓋輕財敷德。施及路人。也。吸茶喫煙。厚致謝而去。渠亦見其狀。貌殊不類。治耶。不強留也。仁齋歸。謂弟子曰。今日偶過市。一家使小女迎余。途延上其樓。則綺窗繡簾。殆爲異觀。畫幅琴箏。陳設具趣。而婦女六七十人。盛粧

上る。仁齋固より倡家たるを知らず。中心私かに揣る、是れ交を吾に内るゝに非ず。又譽を郷黨朋友に要むるに非ず。蓋し財を輕じ徳を敷き、施して路人に及ぶなりと。茶を啜り煙を喫し、厚く謝を致して去る。渠も亦其狀貌の殊に冷郎に類せざるを見、強ひて留めず。仁齋歸つて弟子に謂つて曰く、今日偶々市を過る。一家小女をして余を途に迎へ、延いて其樓に上らしむ。則ち綺窓繡簾殆ど異觀を爲し、畫幅琴箏陳設趣を具す。而して婦女六七人、盛粧豔服す。知らず其内人か、將た其閑愛か。出でて余に接する頗る款洽なり。去るに臨み其庖中を覗へば、亦美酒嘉肴宴席に備辦す。意はざりき、今の世善を樂み施を好む、此の如き者有らんとはと。

- 遊廊 ● 交誼を吾に求むるに非ず ● 煙草を吸ふ ● 遊治郎 ● あやの轡を垂れし風、刺刺せるすだれ幕 ● 畫の掛物、琴などの裝飾あり ● 美しくけはひし肴飾る ● 要 ● 妾 ● てまつし ● 酒宴の準備す

豔服。不知其内人邪。將其閑愛邪。出接余。願款洽。臨去。觀其庖中。亦美酒嘉肴。備辦宴席。不意今之世有樂善好施如此者。

大石良雄。取贊仁齋。一日來侍其講書。而時時睡弗聽。衆皆匿笑。退後垢罵曰。惰懶如彼。不如不學。仁齋曰。小子勿妄

大石良雄贊を仁齋に取り、一日來つて其書を講するに侍す。而して時時睡りて聽かず。衆皆笑を匿す。退いて後垢罵して曰く、惰懶彼の如くんば學ばざるに如かずと。仁齋曰く、小子妄りに誘ふこと勿かれ。予を以て彼を觀るに庸器に非ず。必ず能く大事に堪へんと。

- 東齋ををさめて入門す ● のしる ● 凡庸の器量

誘。以子觀彼。非庸器。必能堪大事。

某貴紳。珍製一石。大如量。備五色。一日召仁齋。際之。

某貴紳一石を珍製す。大さ量の如く、五色を備ふ。一日仁齋を召して之を眺す。仁齋、視ること久しうして曰く、此石龍を生ず。人の愛重す可きものに非ず。請ふ遠く之を郊外に棄てよと。貴紳悦ばず。然れども其の安からざるより、

仁齋親者久之曰。此石生龍。非下人之可受重者也。請遠棄之郊外。賈紳不悅。然其不安也。遂結茅茨于原野。置之。居十餘年。果雷雨驟至。霹靂一聲。茅茨破壞。有龍從石中出。騰空而去。

遂に茅茨を原野に結んで之を置く。居ること十餘年、果して雷雨驟かに至り、霹靂一聲、茅茨破壊し、龍あり石中より出で、空に騰つて去る。

● 大初に所願す ● 心中不安なるにより ● 小屋を野原に立てて置く

有人爲狐所魅。諸術不能辟。適聞仁齋之德能服妖。招請之。仁齋至。口未吐一言。狐憤服謝罪去。仁齋家故赤貧。歲暮不能買糶。亦賤

人あり狐に魅せられ、諸術辟くること能はず。適く仁齋の德能く妖を服すと聞き、之を招請す。仁齋至る。口未だ一言を吐かざるに、狐憤服罪を謝して去る。

● 色々の法術も狐氣を去りがたし ● もそれ願す

仁齋、家故亦貧にして、歲暮糶資を買ふこと能はざるも、亦賤然として以て意と爲さず。妻跣き進んで曰く、家道有賴、妾未だ嘗て堪へずと爲さず。而る

然不以爲意。妻聽遺曰。家道有賴。妾未嘗爲不堪。而獨其不可忍。者。孺子原藏未解貧爲何物。妾人家有資。連求不已。妾雖口能譏呵之。腸爲斷絕。言訖泣下。仁齋隱几閱書。一言不爲之答。直卸其所著外套以授妻。

に獨り其の忍ぶ可からざるは、孺子原藏、未だ貧の何物たるかを解せず、人の家の資あるを羨み、連に求めて已まざることなり。妾、口能く之を譏呵すと雖も、腸爲に斷絶すと。言訖つて泣下る。仁齋几に隱り書を閱し、一言も之が答を爲さず。直に其の著る所の外套を卸ぎ、以て妻に授く。

● 腸はもち米、妾は餅 ● 平然として氣にかけず ● 家事と子供の教育 ● 小供 ● 叱る

仁齋謝荒川景元惠金詩云。討習研磨二十春。恩如父子。最相親。受金不謝元非傲。適爲君

仁齋、荒川景元が金を恵むを謝する詩に云ふ、討習研磨二十春、恩父子の如く最も相親し。金を受けて謝せず元傲るに非ず、適に君の情厚く且つ眞なるが爲なりと。東涯後に題して曰く、先人此詩を作る時、予未だ冠せざるも、尙ほ其事を記す云々と。此に由つて之を觀れば、仁齋年五十七八にして家猶ほ寒な

情厚且風。東
涯題後曰。先
人作此詩時。
予未冠。尙記
其事云云。由
此觀之。仁齋
年五十七八家
猶寒。然先是
肥後侯祿千石
招之。辭以母
老侍養無一人
世復安得。其
心不爲利祿動
上如斯人者乎。

り。然るに是より先肥後侯祿千石にて之を招く。辭するに母老侍養人無きを以てす。世復安ぞ其心の利祿の爲に動かざる斯の如き人者を得んや。

● 慶應の研究二十年 ● 金を貰へど徳の意を表せざるは傲るに非ず、足下の清源厚にして言語の盡す所に非ればなり ● 元服せず、幼少なり ● 貫し

左右比屋敷
力清義井仁
齋聞之。出欲
共焉。衆皆曰。
吾曹成之足
矣。何役先生
爲。仁齋曰。敢
不謝義之辱
乎。雖然余汲
此井。既與衆
不異。今豈有
獨不與之理乎。
遂執鞭分其勞。

左右比屋敷を襲せて義井を溶ふ。仁齋之を聞き、出でて共にせんと欲す。衆皆曰く、吾曹之を成さば足れり。何ぞ先生を役することを爲んと。仁齋曰く、敢へて義の辱きを謝せざらんや。然りと雖も余此井を汲む、既に衆と異ならず。今豈に獨り與らざるの理あらんやと。遂に鞭を執つて其勞を分つ。

● 左右の近衛 ● 共井戸 ● 疋の馬きを感謝す ● づるべつな

仁齋實爲一
代儒宗。天下
學者四面來
歸之。東涯盡
譽錄曰。先人
教授生徒四
十餘年。諸州
之人無不
至。唯飛彈佐
波壹岐三州
人不及門。執
調之士以千
數。

仁齋實に一代の儒宗たり。天下の學者四面より來つて之に歸す。東涯の盡譽錄に曰く、先人、生徒を教授する四十餘年。諸州の人、國として至らざる無し。唯飛彈・佐波・壹岐三州の人のみ門に及ばず。調を執るの士千を以て數ふと。

● 第一流の學者 ● 名刺を通じて説をきく士

邦俗立春前
一夕。撒炒豆。
高聲叫曰。福
内鬼外。殆不
類於兒戲乎。
而仁齋必著
禮服行之家。
其不好爲崖
異者如此。

邦俗、立春の前一夕、炒豆を撒き、高聲叫んで曰く、福は内鬼は外と。殆ど兒戲に類せざらんや。而るに仁齋は必ず禮服を著て之を家に行ふ。其の好んで崖異を爲さざること此の如し。

● 我國の風俗 ● 強ひて他と異なることを行はざること此の如し

嘗率門人數

嘗て門人數輩を率ゐて梵刹に徜徉し佛を見て即ち拜す。門人悦ばずして曰く、

聖翁^二往^レ梵刹^一。見^レ佛^レ即^レ拜^レ門。人不^レ悅^レ曰^レ。先生恆^レ力^レ辨^レ釋^レ氏之非^レ。而今拜^レ其像^レ者何也。仁齋曰^レ。釋誠與^レ儒異^レ。然而過^レ其地^レ。不^レ禮^レ其主^レ可^レ乎。

先生恆に力めて釋氏の非を辨ず。而も今其像を拜するは何ぞやと。仁齋曰く、釋誠に儒と異なり。然れども其地を過り、其主に禮せずして可ならんやと。

●佛寺

凡^レ唱^レ一家^レ說^レ以^レ爲^レ己^レ始^レ得^レ道^レ者。自^レ非^レ其黨^レ外^レ視^レ如^レ寇讐^レ。至^レ如^レ仁齋。於^レ其^レ不^レ信^レ之者。亦^レ不^レ能^レ不^レ推^レ。太宰春臺自^レ視^レ甚^レ高^レ。嘗所^レ評^レ驚^レ難^レ其

凡そ一家の説を唱へて以て己始めて道を得たりと爲す者は、其黨に非ざるより外は視ること寇讐の如し。仁齋の如きに至つては、其の之を信ぜざる者に於ても、亦推さざること能はず。太宰春臺自ら視る甚だ高く、常に評驚する所、其師徂徠と雖も、猶ほ擇ぶ所有り。然るに其漫筆に云ふ、伊仁齋は豪傑の士なり。所謂文王を待たずして作る者なり。物先生も亦豪傑の士なり。然れども伊氏に後れて出づ。故に其學伊氏に本かずと雖も、而も伊氏を以て嚆矢と爲さざる能

師徂徠。猶有^レ所^レ釋^レ。然^レ其^レ漫筆^レ云^レ。伊仁齋豪傑之士也。所謂不^レ待^レ文王^レ而^レ作者^レ也。物先生亦豪傑之士也。然^レ後^レ伊氏^レ而^レ出^レ。故^レ其^レ學^レ雖^レ不^レ本^レ伊氏^レ而^レ不^レ能^レ不^レ以^レ伊氏^レ爲^レ嚆^レ矢^レ上^レ也。又曰^レ。余嘗^レ見^レ伊氏^レ而^レ與^レ之^レ言^レ。觀^レ其^レ貌^レ也^レ恭。聽^レ其^レ言^レ也^レ從。余故^レ以^レ爲^レ君子^レ。又曰^レ。仁齋有^レ不^レ可^レ及^レ者

はずと。又曰く、余嘗て伊氏を見て之と言ふ。其貌を観るに恭、其言を聴くに從。余故に以て君子と爲すと。又曰く、仁齋に及ぶ可からざる者三あり。學、師傳に由らざること、一なり。仕へざること、二なり。子、東厓あること、三なり。物先生此に一を有せずと。又祇南海は木門の高足、固より仁齋と趣を異にす。而も其の高生を送る序に曰く、世語孟字義の書あるを聞き、索めて之を讀む。是に於て始めて京師に伊藤君といふ者あるを知る。予固より茲に拘つて一たびも接見する能はずと雖も、苟も其書を觀るや、則ち其の人と爲りを知るべきなり。夫の至言要言を觀るに、聖賢を左右にして以て邪説を鞭筆し、奮然魔を把つて世の爲に先登すること、昭昭乎として筆端に見はれ、人をして驚見せしむること、猶ほ景星卿雲の仰ぐ可くして企つ可からざるがごとし。嗚呼是れ豈に今の人ならんや。抑も古の所謂超然獨立する者かと。

● 仁齋の説を信ぜざるものと雖も推服せざることを能はず ● 驚はさだむること、即ちしなまだめ ● その説

三焉。學不由師傳。一也。不仕。二也。有子東厓。三也。物先生不有。一也。於此。又祇南海木門高足。固與仁齋異趣。而其送高生序曰。聞三世有語。孟子字義之書。索而讀之。於是始知京師有伊藤君者。予雖下固拘于技。不能一接見。苟觀其書也。則可知其爲人也。觀夫至言要旨。左有聖賢。以鞭箠邪說。奮然把麾爲世先登者。昭昭乎見于筆端。使人驚見。猶景星卿雲。可仰而不可企也。嗚呼。是豈今之人也哉。抑古之所謂超然獨立者歟。

に取る所あり ● 孟子の言、何人にも依頼する所なくして獨立興起する意 ● 鳴鶴、歌の初め先づカブラヤを放つにより凡て物の初めをいふ ● 物祖は三者の中一をも有せず ● 祇園南海は木下順庵門下の高弟 ● 孔孟の聖賢の言を引きて邪説をわらうち攻撃す ● 頁を覆つて采配を掃り世人を驚く、儒道のためにつくすをいふ ● はつきりと文字に現る ● 景星は卿雲、卿雲は景星、共にめでたきしるしとして現る

伊藤長胤

伊藤長胤、字は原藏、東厓と號す。又健齋と號し、紹述と私諱す。仁齋の長子。平安の人。

伊藤長胤。字原藏。號東厓。又號健齋。私諱紹述。仁齋長子。平安人。東厓經術湛深。行誼方正。粹然古君子。粹然古君子。

東厓は經術湛深、行誼方正、粹然たる古君子なり。嘗て集會の弟子に謂つて曰はく、昨、一匣を骨董肆に買ふ。之を几側に置き、以て抄冊を藏むるに、甚だ便

也。嘗謂集會弟子曰。昨買一匣于骨董肆。置之几側。以藏抄冊。甚爲便。乃使童子取之。陳於前。曰。余欲令工新製。如是器者有年。不意既有觀者。也。弟子視之。則藏接柄三絃之匣也。三絃。匣其用於。是互相目而不答。奥田三角進曰。先生未知邪。此物娼妓藏三絃之匣。請卻。東厓正色曰。小子勿妄語。三絃柄長。奈何藏此短匣。

となすと。乃ち童子をして之を取らしめ、前に陳して曰く、余、工をして新に是の如き器を製せしめんと欲すること年有り。意はざりき既に觀ぐ者あらんとはと。弟子之を視れば、則ち接柄の三絃を藏むるの匣なり。(接柄の三絃は、其用捨に隨つて之を折り接ぐ) 是に於て互に相目して答へず。奥田三角進んで曰く、先生未だ知らざるか。此物は娼妓が三絃を藏むるの匣なり。請ふ卻けよ。東厓色を正して曰く、小子妄語することなかれ。三絃は柄長し。奈何ぞ此短匣に藏めんと。

● 儒學の知識ひろく深し ● 行爲正し ● まじりけ無し ● 一つの匣を古道具屋にて買ふ ● 門弟子、三角を指していふ。汝みだりな言を吐くなかれと也

嘗て一小囊

嘗て一小囊の路に遺ちたるに値ふ。見て以て藥物と爲し、從者をして之を擧げし

遺於路。見以爲藥物。使從者舉之。解囊而視。則內有十餘金。東涯忽覺。曰。此當候遺者。而還之。即立其地。以待者良久。日將昏黑。遲遲而去。歸置之閣上。及伊勢巫祝至。付以納大神宮。

む。囊を解いて視れば、則ち内に十餘金有り。東涯忽ち覺して曰く、此れ當に遺者を候ちて之を還すべしと。即ち其地に立ち以て待つこと良久し。日將に昏黒ならんとし、遲遲として去り。歸て之を閣上に置き、伊勢の巫祝の至るに及び、付して以て大神宮に納む。

● 面をしかわ ● 遺失者の來るを待ちてかへす ● はより。此處は大神宮の御師をいふ

又嘗夜更歸。途中誤洩。防火水桶。去者里餘。始覺。其爲貯水。則還而扣戸謝者再三。明且又遣三人洗滌之。

又嘗て夜更けて歸る。途中誤つて防火水桶に洩す。去ること里餘、始めて其の貯水たるを覺る。則ち還つて戸を扣き謝すること再三、明且又人をして之を洗滌せしむ。

● 天水桶に小便す

東涯與祖徠同時。各鳴東西。而徠每感否。東涯不置。或過自西至者。即首叩以東涯所業。東涯異於此。嘗嶼嶼至日。出徠徠。已序以見之。嶼嶼出。東涯曰。物氏文。嘗驚。蒙鬼臉。恐喝孩兒者。奥田三角多年親。東涯聞其評。貶徠。唯此一言耳。

東涯、徠と時を同じうし、各々東西に鳴る。徠毎に東涯を感否して置かず。或は西より至る者に遇へば、即ち首に叩くに東涯の所業を以てす。東涯は此に異なり。昔嶼嶼の至りし日、徠が己に贈るの序を出だし以て之を見す。嶼嶼出づ。東涯曰く、物氏の文は、嘗へば猶ほ鬼臉を蒙つて孩兒を恐喝する者のごとしと。奥田三角多年東涯に親炙す。其の徠を評罵するを聞くこと、唯此一言のみ。

● 上しあしを批評す ● 山田氏、菅原氏なるを以て自ら曾とす。名は正剛、始め徠に異び後東涯に従ふ ● 鬼の面を被つて子供を恐す ● 類しく教を受く

弟子嘗て徠の天狗説を持ち來りて東涯に詠す。時に北村可昌、松岡玄達坐在在り。同じく觀て口を極めて之を刺譏す。東涯暗として一言を容れず。二生曰く、此文は骨に鑿牙にして語を成さざるのみに非ず、説も亦通ぜずと謂ふ可し。先生

文連在坐。同觀極口劇。之。而東涯暗不。容一言。二生曰此文非。會。牙不。成。語。而說亦可。謂不通矣。先生以爲何如。東涯曰。不入各有見。何必輕駁之。況其形天狗之狀。二者盡矣。今之乘筆者。恐不及。二生大愧。

以て何如と爲すと。東涯曰く、不、人各々見るところ有り。何ぞ必ずしも輕しく之を駁せん。況や其の天狗の狀を形容すること盡せるをや。今の筆を乘る者、恐くは及ばじと。二生大に愧づ。

●二人與に仁賢の門人 ●セシる ●だまつて一口も言はず ●文章どつくして平易淺薄ならず

東涯時俊傑輩出。各登一。方。而紹述文。二十卷。不。有。一。言。及。之。者。諷。者。以。爲。難。

東涯の時俊傑輩出し、各々族幟を豎て以て自ら一方に振ふ。而も紹述文集二十卷、一言之に及ぶ者有らず。諷者以て難しと爲す。

●一書の論を立てて相下らず ●東涯の紹述文集には一言簡便を批評せしものなし

東涯、雙海内を動かす。四方の後學多く幅濶す。菅麟嶼既に祖徠の門に入り、又

内。四方後學多。輻。輳。菅。麟。嶼。既。入。徠。門。又。心。徠。注。東。涯。遂。負。笈。赴。之。徠。徠。固。不。爲。意。春。臺。內。甚。不。平。各。有。送。別。詩。徠。徠。云。五。十。三。驛。莫。言。難。處。處。山。川。秋。好。看。明。日。先。從。函。嶺。望。如。隸。大。道。歸。長。安。其。二。揮。鞭。意。氣。飄。秋。涼。才。子。奉。恩。遊。洛。陽。但。到。西。山。紅葉好。錦衣

心東涯に郷注し、遂に笈を負うて之に赴く。徠徠固より意と爲さず。春臺内甚だ不平なり。各々送別の詩有り。徠徠云ふ、五十三驛難しと言ふこと莫れ、處處山川秋看るに好し。明日先づ函嶺より望まば、絲の如き大道長長に達せんと。其二、鞭を揮つて意氣秋涼に愜ふ、才子恩を奉じて洛陽に遊ぶ、但到れ西山紅葉好し、錦衣相映じて早く郷に歸れと。自ら扇頭に書して以て之を贈る。春臺云ふ、田郎妙齡遠遊を好み、一旦師を尋ねて西周に入る、天邊月落つ函嶺の曉、雲際星は流る渤海の秋、周道砥の如く奔走に任す、那ぞ識らん古人骨已に朽つるを。到るの日試に問へ柱下の官、往時の老聃今在りや否やと。麟嶼、東涯に造り、出して之を誦す。東涯一見し且つ笑つて曰く、物先生の襟度郭如たること想見す可し。太宰子亦慷慨氣節有り。

●心を傾く ●箱根山 ●支那の舊都の名、轉じてわが京都を指す ●軒昂の意氣秋氣の爽快なる比調和す ●函嶺をさす ●名を成して早く郷に歸れ ●函嶺は山田氏、故にいふ ●函嶺が京都に往くを孔子周に往きて道を老子に問へる故事に托していふ ●周に入るの遊、師も京都に行くの遊は平坦にて函嶺の如く非

相映早歸。鄉。自會扇頭以贈之。春蠶云。田耶妙齡好遠遊。一旦尋師西入周。天邊月落函關曉。雲際星流渤海秋。周道如砥任三奔。走那藏古人骨已朽。到日試問柱下官。往時老聃今在否。麟嶼造東涯。出脉之。東涯一見且笑曰。物先生襟度郭如可想見。太宰子亦慷慨有氣節。

東涯音吐甚低。且訥訥如不能言。對門有種桶匠。其屢東聲。東涯講書。聽者每苦其難分。或曰。東涯辨疑錄。答貝原益軒大疑錄。而作之。此言東涯、音吐甚だ低し。且つ訥訥として言ふこと能はざるが如し。對門に種桶匠有り。其屢東の聲東涯の講書を亂し、聽者毎に其の分ち難きに苦む。

或ひと曰く、東涯の辨疑錄は、貝原益軒の大疑錄に答へて之を作ると。此言然らず。辨疑錄は一に仁齋の遺漏を拾ひ、以て家説を主張するのみ。其題辭に曰く、先君子、沈潛の識を體し、獨得の見を奮ふ。一片の婆心和盤托出。微言

走自在なり 守藤室の史、即ち藤室の史、老子周に仕へて此官に在り 仁齋死して東涯其の聲名をれ

るを願す 廣きこと想ひやらる 氣概に宣ひ

口どもる 無屋 桶のたがを入れる者

不_レ然。辨疑錄一拾仁齋遺漏。以主張家説一耳。其題辭曰。先君子體沈潛之識。獨得之見。一片婆心和盤托出。雖微言精義剖折餘すなしと雖も、初學晚進尙ほ問を煩す。因つて舊聞を叙し、參ふるに新得を以てし、筆して辨疑錄四卷と爲し、以て答問の資と爲す。

獨得之見。一片婆心和盤托出。雖微言精義剖折無餘。而初學晚進尙煩問。因叙舊聞。參以新得。筆爲辨疑錄四卷。以爲答問之資。

東涯餘力工。臨池片紙。字人爭求之。而其錄經語必以楷字。是以間有詩賦諸語。作以行草。人疑爲非親筆。東涯生三男。東涯、餘力臨地に工なり。片紙隻字人争つて之を求む。其錄經の語は必ず楷字を以てす。是を以て間々詩賦諸語の作るに行草を以てする有れば、人疑つて親筆に非すと爲す。

● 後漢の張芝が池に臨みて書を習ひ、池水益に黒水と變ぜりといふ故事より、習字をいふ ● 經書の語を抄録せしは皆楷書なり

東涯三男を生む。長次先つて夭す。喪を送るに臨み、弟子數人柩前に哭す。時

長次先天。臨送。喪弟子數人哭于柩前。時一僧來叩。謂曰。當悲哀如。是時。諸君豈得不信。吾無常輪迴說乎。木村源進毅然曰。吾黨若信。道不篤。至如今日。或殆爲左道所惑。僧默然。

に一僧來叩し謂つて曰く、悲哀是の如き時に當らば、諸君豈に吾が無常輪迴の説を信ぜざるを得んやと。木村源進毅然として曰く、吾黨若し道を信じて篤からずんば、今日の如きに至つて、或は殆ど左道の爲に惑されんと。僧默然たり。

●長男次男は早死す ●萬物には常相なく、世をかへ生をかへて轉々すと説く佛敎の説 ●邪道

名物六帖。人品。人事。器財。三帖。皆奥田三角所校也。而器財校正。人品。人事。器財。魯魚。二引書。此器財東涯在日。即就其

名物六帖の、人品・人事・器財三帖は、皆奥田三角の校する所なり。器財は校正し、人品・人事は魯魚を誤り引書を繕る。此れ器財は東涯の在りし日、即ち其家の眞本に就いて之を校刻す。二帖は東涯の没後、三角、其の草寫して己が家に藏むる者を以て之を刻すればなり。故に舛誤甚だ多し。東涯の男東所、嘗て更に二帖を校正すと云ふ。然れども其本未だ印せざれば、則ち人の之を知る者無し。

家眞本二帖。東涯没後。三角以其草寫藏於己家。者上刻之。故舛誤甚多。東涯男東所。嘗更校正二帖。云。然其本未印。則無一人知之者。

●文字のうつしあやまり、魯と魚との字形類するよりいふ ●引用書 ●草字にて寫す ●あやまり

東涯門人高養浩者。叙師事宋儒者。時學誠情中。紀東涯之學。行。頗爲詳悉。乃撮錄于左。客曰。敢問東涯先生之爲人如何。曰。溫厚之長者也。博雅洽聞。不減。徂徠。惜哉。性過謙讓。而智乏。施設。學包

東涯の門人高養浩といふ者、師に叛いて宋儒を奉じ、時學誠情を著す。中に東涯の學行を記し、頗る詳悉を爲す。乃ち左に撮録す。客曰く、敢へて問ふ東涯先生の人と爲り如何と。曰く、溫厚の長者なり。博雅洽聞徂徠に減らず。惜い哉性謙讓に過ぎて、智施設に乏し。學業美を包ねて、才教誨に短し。是を以て問ふこと有れば則ち之に答ふ。答亦精詳ならず。問はざれば則ち之に示さず。示さざるも亦吝むこと有るにあらず。然れども其父師の説に於けるや、疎漏を補直し、幽渺を張皇し、筆削改竄、大勳勞有りと謂ふ可し。童子問。語孟字義の二書、既に己に刊行す。論孟古義環樸は略具つて、成説未だ完からず。先生、門人と校讎討論す。予も亦末席に在るを忝うす。今

衆美。而才短。教。則。是。以。有。問。則。答。之。答。亦。不。精。詳。不。問。則。不。示。之。不。示。亦。非。有。吝。然。其。於。父。師。之。說。也。補。其。罅。漏。強。息。幽。渺。筆。削。改。竄。可。謂。有。大。勳。勞。矣。董。子。問。語。孟。子。義。之。二。書。既。已。刊。行。論。孟。古。義。壞。模。略。具。而。成。說。未。完。老。生。與。門。人。校。讐。討。論。予。亦。忝。在。末。席。以。今。思。之。論。語。一。書。章。句。句。說。修。爲。者。多。故。仁。齋。之。旨。符。合。矣。抑。至。孟。子。論。心。性。則。望。疑。不。通。者。過。半。矣。故。今。所。刊。行。孟。子。古。義。其。實。成。于。東。涯。削。錄。之。手。者。也。由。此。言。之。則。東。涯。之。學。識。未。必。無。異。議。於。其。家。說。而。孝。子。仁。人。豈。忍。夢。寐。之。發。哉。是。以。當。知。先。生。之。篤。志。賢。慮。非。他。人。之。所。敢。及。也。

を以て之を思ふに、論語の一書、章章句句、修爲を説く者多し。故に仁齋の旨符合せり。抑、孟子心性を論ずるに至れば、則ち窒礙通せざる者過半なり。故に今刊行する所の孟子古義は、其實東涯削録の手に成れる者なりと。此に由つて之を言はば、則ち東涯の學識、未だ必ずしも其家説に異議無きにあらず。而も孝子仁人、豈に夢寐にも之れ發はすに忍びんや。是を以て當に知るべし先生の篤志賢慮は、他人の敢へて及ぶ所に非ざるを。

- とりつままで録する ● 學識得く見聞あまねし ● 實際の應用 ● ナきある部分、もれたる部分を補ふ
- 論語にして解し難き部分を明瞭にす ● 大略成り上れども説完全ならず ● 修養 ● 孟子の心性の論に至りては ● とゞこはる所ありて益が通ぜず ● 仁齋の説に對して異議無きにあらず

東涯墓碣銘。內大臣藤原常雅撰。權中納言藤原俊將篆額。右中將藤原英朝書。世以榮之。春臺與南郭書曰。去年七月平安伊藤原藏没。其弟及門生立碣於其墓。華山內大臣銘之。八條中將書坊城中納言篆額。問者有京師客持其文來示純。中述其弟才藏

東涯の墓碣銘は、內大臣藤原常雅の撰、權中納言藤原俊將の篆額、右中將藤原英朝の書なり。世以て之を榮とす。春臺、南郭に與ふる書に曰く、去年七月平安の伊藤原藏没す。其弟及び門生碣を其墓に立つ。華山內大臣之に銘し、八條中將の書、坊城中納言の篆額なり。問者京師の客有り。其文を持ち來りて純に示す。中に其弟才藏の言を述ぶ。曰く、集序は、亡兄の在せし日既に見允を蒙むると。華山公之を許すを言へるなり。純、喟然として歎じて曰く、昔者水戸の義公、其世子と、共に明人朱舜水の遺文を輯め、自ら其名を卷端に題し、且つ冠するに門人の二字を以てす。當時以て奇事と爲す。今者華山公の原藏に於けるや、既に集に序するを許す。又、墓銘を作る、其人其事皆相類す。奇と謂ふ可し。夫れ義公は、國家の宗室、華山公は、皇朝の大臣なり。而して舜水・原藏は、皆一匹夫なり。匹夫にして是の尊寵を受く。何ぞ其れ榮なるや云云と。

之言曰。集序。亡兄在日既

● 墓碑の銘 ● ゆるさる、此は華山公より序を與ふるを承諾されたるなり ● 嘆息する説 ● 珍しきこと ● 幕府の一家 ● 無位の平民

蒙見允言華山公許之也。純明然歎曰。昔者水戸義公與其世子共輯明人朱舜水遺文。而自題其名於卷端。以門人二字。當時以爲奇事。今者華山公之於原藏也。既許序集。又作墓銘。其人其事皆相類。可謂奇矣。夫談公者。國家宗室。華山公者。皇朝大臣也。而舜水原藏。皆一匹夫也。匹夫而受是尊寵。何其榮也云云。

伊藤長堅

伊藤長堅。字才藏。號蘭嶋。仁齋第五子。平安人。仕紀伊侯。

伊藤長堅、字は才藏、蘭嶋と號す。仁齋の第五子。平安の人。紀伊侯に仕ふ。蘭嶋、博學能文父兄に類す。而して舉止端重なり。其の始めて君侯の前に講するや、書に對して講せず。滿坐掌に汗して以爲へらく、伊の人寒素に生長して、未だ大人に説くに慣れず。則ち其端然たるを視て然るなりと。中使促

滿坐汗掌以爲。伊人生長乎寒素。未慣於大人。則端然也。中使促之。既而蘭嶋徐曰。公坐。吾不可謙。聖人之書也。侯聞之。遣去。於是方講說。音吐朗暢。辨論明備。座者皆歎賞曰。眞儒者也。

せども應ぜず。侯亦之を訝る。既にして蘭嶋徐ろに曰く、公、褥に坐す。聖人の書を講すべからずと。侯之を聞き遠てて褥を去る。是に於て方めて講説す。音吐朗暢、辨論明備、座する者皆歎賞して曰く、眞の儒者なりと。

● 動作正しくして重々 ● 一塵の手に汗を滴つて危ぶむ ● 言語の端に生長して貴人の前にて講するにみれず ● 威光高きを視て使れたる ● 音聲朗かにして辨論明白

仁齋有五丈夫。長原藏。次重藏。次正藏。次平藏。次才藏。人呼稱伊藤五藏。皆足以及世其家學。而原藏才藏

仁齋、五丈夫有り。長は原藏、次は重藏、次は正藏、次は平藏、次は才藏なり。人呼んで伊藤の五藏と稱す。皆以て其家學を世にするに足る。而して原藏。才藏最も著稱あり。之を伊藤の首尾藏と謂ふ。奥田三角の撰する仁齋の妻瀬崎氏の墓碣に曰く、東涯先生は緒方氏の出にして、愛護親子に踰ゆ。四子、長英、は福山に、長衡は高槻に、長準は久留米に、長堅は紀藩に仕ふ。皆儒を以て

最著稱。謂之伊藤首尾藏。奧田三角撰。仁齋妻瀨崎氏墓碣曰。東涯先生緒方氏出。而愛護險親子。四子長英。仕于福山。長衡于高槻。長準于久留米。長堅于紀伊。皆以備顯。

顯ると。

● 五人の男の子 ● 名高し

吾祖初年在京師時。與蘭嶋相友。是以蘭嶋之母貞順原氏墓記。及傷寒私斷序。皆屬蘭嶋撰之。又善書。先友不破子讀藏。數張。以下余之家。與蘭嶋有。曾將二分贈。未果。遺回。諒。又能繪事。奧田三角跋其墨蘭曰。蘭嶋好作墨嶋。近因道學先生言。斷此戲。

吾が祖初年京師に在りし時、蘭嶋と相友たり。是を以て祖の母貞順原氏の墓記、及び傷寒私斷の序、皆蘭嶋に屬して之を撰ばしむ。又書を善くす。先友不破子讀數張を藏す。余が家、蘭嶋と舊あるを以て、嘗て分贈せんとし、未だ果さずして回諒に遺ふ。又繪事を能くす。奧田三角其墨蘭に跋して曰く、蘭嶋好んで墨蘭を作る。近る道學先生の言に因つて此戲を斷つと。

● 吾祖原善の祖原嶋 ● 五六枚 ● 火車 ● 東涯の門人 ● 此道學を止む

米川一貞

米川一貞、字は幹叔、小字は儀兵衛、操軒と號す。平安の人。

操軒の父賈に服す。而るに操軒、幼より書を嗜み、區區として利を逐ふを欲せざるを見、命じて三宅寄齋に就いて學ばしむ。則ち寄齋期するに遠到を以てす。寄齋没す。乃ち山崎闇齋に調して益を請ふ。遂に性行篤學を以て世に名あり。而も祿仕を干めず。嘗て公侯徵辟す。並に就かず。仲邨惕齋、實記を撰び其行誼を詳かにす。

● 商賈をなす ● こせし ● 學の大成すべきを證明す ● 教授を回ふ ● 何れに 召時に應ぜず

于祿仕。嘗公侯徵辟。並不就。仲邨惕齋撰實記詳其行誼。

操軒登に程朱の説を奉じ、四子・小・近・書・易等の外、泛く他書を觀ることを欲せず。舊伊藤仁齋と善し。仁齋が古義を唱へ以て宋儒を排斥するに及び、乃ち書

米川一貞。字幹叔。小字儀兵衛。號操軒。平安人。操軒父賈。而見操軒自幼嗜書。不欲區區逐利。命就三宅寄齋。學。則寄齋期以遠到。寄齋沒。乃謁山崎闇齋。請益。遂以性行篤學。名于世。而不于祿仕。嘗公侯徵辟。並不就。仲邨惕齋撰實記詳其行誼。

操軒登程朱四子小近書易等

外。不微泛觀。他書。蓋與伊。藤仁齋善。及下。仁齋唱古義。以非斥宋儒。乃修書曰。朱子得聖人之道。吾子持異言。排之。語。美。德之學。則爲。薄德。語。講學之事。則無益於學。是謂之聖教罪人。速改之。則止矣。不則雖契分日久。不不得。不絕焉。其言切至。而仁齋不聽焉。遂絕交書。

操軒所友皆一時知名之士也。加藤非相。齊。仲。鄭。楊。齊。貝。原。益。軒。當。世以君子稱。

を修して曰く、朱子は聖人の道を得たり。吾子異言を持して之を排す。養徳の學を語れば、則ち薄徳たり。講學の事を語れば、則ち學に益無し。是れ之を聖教の罪人といふ。速かに之を改むれば則ち止む、不すんば則ち契分日久しと雖も、絶たざるを得ずと。其言切至なり。仁齋聽かず。遂に絶交書を贈る。

● 大學中庸。論語。孟子。小學。近思錄。尚書。周易。● 足下異見をいだいて朱子を排す ● 徳性を修養する學

操軒の友とする所皆一時知名の士なり。藤井懶齋。仲鄭楊齊。貝原益軒の如き、當世君子を以て稱せらる。則ち其友を取る豈に端しからざるを得んや。而して皆操軒と交睦し、没するに及ぶや、各々悼惜以て其學徳を紀す。而して益軒の録する所、最も以て其生平を想像するに足る。曰く、先生の人となりや、敏にし

て志操有り。福を求めて回ならず。其の人に接するや、嚴にして和、其の事に處するや、敬畏して苟もせず。其の言を出すや、辨にして序あり。聞く者厭はず。其の學を爲すや、純正にして、専ら經術を好む。平日心を程朱の書に用ひ、最も動めて雜書を好まず。文中子の所謂經學ならざるが故に明かなりとは、其れ此人の謂かと。(前後を略す)。

● 懐みいたむ ● オオとくして経術あり ● もそれつゝしかてい、加減にせず ● 簡巧にして順序あり

則其取友豈得不端乎。而皆與操軒交睦。及沒也。各悼惜以紀其學徳。而益軒所錄。最足以想其生平。曰。先生之爲人也。明敏而有志操。求福不回。其接人也嚴而和。其處事也敬畏而不苟。其出言也辨而有序。聞焉者不厭。其爲學也純正。專好經術。平日用心於程朱之書。最動不好雜書。文中子所謂不雜學。故明者。其此人之謂乎。

有。志。操。求。福。不。回。其。接。人。也。嚴。而。和。其。處。事。也。敬。畏。而。不。苟。其。出。言。也。辨。而。有。序。聞。焉。者。不。厭。其。爲。學。也。純。正。專。好。經。術。平。日。用。心。於。程。朱。之。書。最。動。不。好。雜。書。文。中。子。所。謂。不。雜。學。故。明。者。其。此。人。之。謂。乎。

藤井 臧

藤井臧、字は季廉、懶齋と號し、又伊萬子と號す。筑後の人。懶齋は初め眞名部忠菴と稱す。醫術を以て久留米侯に宦す。嘗て一病者を療

藤井臧。字季廉。號懶齋。又號伊萬子。筑後人。懶齋初稱眞

各部忠義。以醫術一官久留米侯。嘗療一病者。而不起。自以爲誤。治所致。於是慨然投七辭事。乃入京。專修儒業。晚以近其先塋所在。退居于京西鳴瀧村。超然絕世累。其學宗紫陽。高談性理。一時褒然有隱君子聲。

懶齋本豪氣。及老益慷慨。每曰。余有二策。關東若召吾。則就程而逝。即日教之。朝陳夕死。無復憾矣。室鳩

す。起たず。自ら以爲へらく治を誤つて致す所と。是に於て慨然としてヒを投じて事を辭す。乃ち京に入り専ら儒業を修む。晩に其の先塋の所在に近きを以て、京西鳴瀧村に退居し、超然世累を絶つ。其學紫陽を宗とし、高く性理を談じ、一時褒然として隱君子の聲あり。

- 死す ● 先祖の墓 ● 世俗に違ふかり世事のわづらひを無くす ● 朱子學 ● 實揚して隱君子と評判せり

懶齋本豪氣、老に及び益々慷慨なり。毎に曰く、余に一策あり。關東若し吾を召さば、則ち程を兼ねて至り、即日之を獻せん。朝に陳べ夕に死すとも復憾なしと。室鳩巢、遊佐某に與ふる書に曰く、藤井懶齋は、直清も亦其人を聞けり。此地、京師より來仕する者有り。素懶齋を識る。直清が爲に其人と爲りてを語る。言有り徳有る一隱君子なり。孟子、王を以て齊・梁の君に説く。懶齋

巢與遊佐某書曰。藤井懶齋。直清亦聞其人。此地有自京師來仕者。素懶齋。爲直清語其爲人。有言曰。一隱君子也。孟子以王而懶齋心慕之。其言有條理。今不克具錄。常居家。慨然曰。東都若有命召。隱士。雖老死於行。必往。至東都。一以此義一陳。亦足矣。一言之後。使在京。精神開之。雖爲斷舌。亦無悔焉。足下所絕。於言。而彼乃平生之志在此。想足下聞之。必大惡之。懶齋年八十餘。有子名團平。卓犖喜兵。好說天下之形勢。其父與操。軒。楊。齊。爲理學友。而團平深爲父執。

心之を慕ふ。其言條理有り。今具錄する克はず。常に家に居て、慨然として曰く、東都若し命有り隱士を召さば、行に老死すと雖も必ず往いて東都に至り、一に此義を以て陳せば亦足れり。一言の後、在京の精神をして之を聞かしめなば、爲に舌を断つと雖も亦悔ゆるなしと。足下の言議に絶つ所、而も彼乃ち平生の志此に在り。想ふに足下之を聞かば必ずや大に之を惡まんと。懶齋年八十餘。子あり名は團平。卓犖兵を喜び、好んで天下の形勢を説く。其父操。軒。楊。齊。と理學の友たり。團平深く父執に惡まる。然れども團平以て意と爲さず。懶齋亦禁せず。

- 徳川幕府 ● 世變を行してゆく ● 鳩巢の名 ● 王道 ● 其の言には條理あれど詳しく抄出する能はず ● 途中に老死す ● 口に出さざること ● 氣象すぐれて大 ● 父の友人

所感。然則平不以爲意。懶齋亦不誤。

懶齋深疾浮屠。

懶齋深く浮屠を疾み、閑齋筆記多く編侶を罵詈す。深神の元政の若き、孝を以て

多屬書編也。

聞ゆる者なり。然るに其の著す所の釋氏二十四孝、大安寺榮好を取るを以て、元政を謂つて孝道を知らずと爲す。

若深神元政。

● 懶 ● 約語

以孝聞者也。

● 懶 ● 約語

然以其所著

懶齋著す所多し。而して本朝孝子傳本朝諫諍録は、志、世教を裨益するに存す。孝子傳は、倭文を合して三版有り。盛なりと謂ふ可し。大和爲善錄・藏笥百首

釋氏二十四

徒然神捕義の如き、亦一片の婆心、兒女に益なしと爲さず。

孝。取大安寺榮好。謂元政爲不知孝道。

● 世の風教に補ひあり ● 人の益をもよひ

合二便文二有三

● 大和爲善錄。藏笥百首徒然神捕義。亦一片婆心。不爲無益見也。

加。大和爲善錄。

懶齋嘗居宣

懶齋嘗て宣舎に居る。人私かに告げて曰く、此塵染多し。子居ること勿かれ。人の此に住する、災危に遭はざる者なし。予復子の福日患に離るを見るに忍び

香。入。或告曰。

すと。懶齋以て恚と爲さず。之に居ること二十年、終に恙無し。乃ち曰く、白居易に凶宅の詩有り、云く、語を寄す家と國と、人凶にして宅凶なるに

此屋多染。予

非すと。信なるかなと。

勿。唐。唐。人之

唐の詩人白樂天 ● 怪しきことある家

住。此。莫。不。遭

人成は懶齋に謂つて曰く、朱學を爲むる者多くは急迫に失す。土佐の野中氏の如きは是れなりと。懶齋曰く、野中氏は朱子の書を読んで、朱子の學を會せず。此

災危者。予不

れ其の國を危くせる所以なりと。

忍。復。見。手。之

● 一氣短かの疑義あり ● 野中景山

他。日。離。也。

● 懶 ● 約語

懶齋不。以。爲

人成は懶齋に謂つて曰く、朱學を爲むる者多くは急迫に失す。土佐の野中氏の如きは是れなりと。懶齋曰く、野中氏は朱子の書を読んで、朱子の學を會せず。此

意。居。之。二十

人成は懶齋に謂つて曰く、朱學を爲むる者多くは急迫に失す。土佐の野中氏の如きは是れなりと。懶齋曰く、野中氏は朱子の書を読んで、朱子の學を會せず。此

年。終。無。恙。乃

人成は懶齋に謂つて曰く、朱學を爲むる者多くは急迫に失す。土佐の野中氏の如きは是れなりと。懶齋曰く、野中氏は朱子の書を読んで、朱子の學を會せず。此

曰。白。居。易。有。凶

人成は懶齋に謂つて曰く、朱學を爲むる者多くは急迫に失す。土佐の野中氏の如きは是れなりと。懶齋曰く、野中氏は朱子の書を読んで、朱子の學を會せず。此

宅。詩。云。寄。語。家。與。國。人。凶。非。宅。凶。信。哉。

人成は懶齋に謂つて曰く、朱學を爲むる者多くは急迫に失す。土佐の野中氏の如きは是れなりと。懶齋曰く、野中氏は朱子の書を読んで、朱子の學を會せず。此

無二國香。非二復絕世姿。再獲識將曉。孤芳徒自持。高人好二奇服。佩芳固無遺。豈料側陋質。謬
等二君子知。掇揚言亦至。微生非所宜。但恨虛二僻遠。不植君園池。願早走二下陳。朝夕近二容儀。

懶齋所交。皆以二進學二稱者也。川井正直二十七歲長二懶齋。懶齋爲二作行狀。米川操軒一歲長。仲邨惕齋一歲少。懶齋序二本朝孝子傳。曰。伊葛藤本人。愚受其知久。而所二兄事也。

懶齋の交はる所、皆篤學を以て稱せらるる者なり。川井正直は二十七歳懶齋に長す。懶齋爲に行狀を作る。米川操軒は一歳長じ、仲邨惕齋は一歳少し。惕齋、本朝孝子傳に序して曰く、伊葛藤丈人、愚、其知を受くること久し。而して兄事する所なりと。

● 自分 ● 知らるること既に久し

懶齋姓藤井氏。然雖異軍二用諱字。此不二會去。并。又於二

懶齋、姓は藤井氏なり。然るに題署、藤の字を單用す。此は會に井を去るのみにあらず、又藤の字より、懶を省けり。此事、懶齋の人と爲りに類せず。惟む可きのみ。諱諱自序に署して曰く、伊葛子藤氏季廉と。諱有り男之を撰

藤字二音也。此事不疑懶齋爲人。可怪已。諱諱自序署曰。伊葛子藤氏季廉。有取男撰之。曰。少男藤井理定。殆如異姓者。

ぶ。曰く、少男藤井理定と。殆ど姓を異にする者の如し。

象水者。懶齋長子也。好兵。有詩云。驥足未乘千里風。蟻窟縮首神菜。眼前什物盡云笑。十萬甲兵屯二腹中。柳葉種之。云。洛西高士有。二。風。何事。英材慕二七雄。經緯百萬無二

象水は、懶齋の長子なり。兵を好む。詩有り云ふ、驥足未だ乗せず千里の風、蟻窟首を縮む神菜の雄、眼前の什物笑ふと云ふと雖も、十萬の甲兵腹中に屯すと。鳩巢之に和して云ふ、洛西の高士家風有り、何事ぞ英材七雄を慕ふ、經緯百萬一事無し、些子を將つて胸中に上するを休めよと。

● 千里馬未だ千里の風に乗らず ● 鳩巢の腹の中を縮む首を縮む ● 蟻窟の中の道具類の首縮むこと笑ふにたへたり ● 象水を斥す ● 英才ありながら蟻窟を擲とせし取回七雄のしわざを慕ふは何故ぞ ● 高士は至る高士とも一事ゆきずとこそをし ● つまらぬ蟻窟を胸に思ひ上すなかれ

一事一休下將些子一上胸中。

仲邨之欽

仲邨之欽。字敬甫。小字仲二郎。揚齊と號す。平安の人。二郎。號揚齊。平安人。揚齊自爲二童子時。厚重不。好嬉戲。七八歲受二句讀于。鄉師。不煩二責。及長。惟務二篤實。不喜浮靡。先世住市中。而揚齊厭其喧囂。遷居幽地。日杜門。潛心大業。諸論學談文之外。不取爲二泛交。

仲邨之欽、字は敬甫、小字は仲二郎、揚齊と號す。平安の人。揚齊、童子爲りし時より、厚重にして嬉戲を好まず。七八歳、句讀を郷師に受け、督責を煩さず。長するに及び、惟篤實を務め、浮靡を喜ばず。先世市中に住す。而るに揚齊其喧囂を厭ひ、遷つて幽地に居る。日に門を杜きて心を大業に潛め、諸學を論じ文を談するの外、敢へて泛交をなさず。

- 備作重々し ● 教師の戒めず、めを持たず自ら勉む ● 輕浮を好まず ● 先代 ● 師かなら土地
- 廣く交遊

揚齊於二功名財利。澹然無情。雖二少長二于

揚齊、功名財利に於ては、澹然として情無し。少より賈豎の間に長すと雖も、物價を知らず。其家世、素封なり。而して盈縮問ふ所無し。嘗て管長に賦

買豎之間。不知二物價。其家世素封也。而盈縮無所問。嘗爲二管長二所賦。墨。親申。欲以鳴官。揚齊不可。曰。以私財損入性命。不慈莫大焉。從是家道日溼。而亦不爲意。

墨せらる。親申以て官に鳴さんと欲す。揚齊可かずして曰く、私財を以て人の性命を損す。不慈焉れより大なるはなしと。是れより家道日に溼ふ。而も亦意と爲さず。

- 名を顯し財を利することには汲泊にて顧みなし ● 商人の中に生長す ● 富家 ● 財産の殖える誠るを氣にかりず ● 素封に傾倒せらる ● 親戚は官に訴へんとす

揚齊凡所學。不不通曉。天文地理。尺度量衡。類皆能究極之。而尤邃于禮。其處家行已。吉凶及日用之間。一軌於古道。言動不苟。踐履足則。又審二音律。其所發明者。雖二富世達者。欽服之。

揚齊、凡そ學ぶ所通曉せざるなし。天文地理、尺度量衡の類、皆能く之を究極す。而して尤も禮に達し。其家に處りて己を行ふや、吉凶及び日用の間、一に古道に軌ふ。言動苟もせず、踐履則るに足る。又音律を審かにす。其の發明する所は、當世の達者と雖も、之に欽服す。

- 禮法を深く極む ● 家に在る時の動作 ● 一よみ行ふ所の動作は手本となる ● 當時の達人

傷齋、性理學を奉じ、誠敬を以て本と爲し、深く時輩の異説に渉るを非とす。其の人を教ふる、小學近思錄を以て之を開發す、惺惺として老に至るまで少しも怠らす。室鳩巢、和角某に與ふる書に曰く、傷齋、一生程朱を崇信し、始終變ぜず。近世の醇儒者といふべし。老夫敢へて自ら先輩に比するにあらずと雖も、其の程朱を崇信すること則ち多く譲らずと。又兩伯陽の橘意茶話に曰く、余少歳の時明經を以て志と爲す。中村・米川諸儒の如き、固より博學を以て之に名づく可からず。然れども其の身を立つる卓偉、自ら修むる謹嚴なること、亦以て篤行の郷先生と爲す可し。今則ち斯の人なしと。

● 宋儒の性命運氣の學 ● 同時代の人々 ● 従ふことなき説 ● 純粋の學者 ● 兩森芳洲 ● 無書の遺を明かにす ● 中村梅軒・米川權軒 ● 身を持つることけだかし

● 傷齋、伊藤仁齋より少きこと二歳。顔頰名を齊しうす。當世稱して曰く、傷齋兄たり難く、仁齋弟たり難しと。

● 相上下して譽を争ふが如し

傷齋、著書饒し。其筆記・詩集・傳の後に記す所四十五部、凡そ三百七十八卷。其鈔梓の者十六部、凡そ百七十四卷にして、没後刊する所の者甚だ多し。若し夫の後世の儒者が、其の述作する所、身自ら之を刻するに非ざれば、則ち身後終に之を鼠齋の口腹に充つること、傷齋に愧づる多し。

● 既に刊したるもの ● 紙を益上最

● 傷齋、伊藤仁齋より少きこと二歳。顔頰名を齊しうす。當世稱して曰く、傷齋兄たり難く、仁齋弟たり難しと。

● 傷齋、伊藤仁齋より少きこと二歳。顔頰名を齊しうす。當世稱して曰く、傷齋兄たり難く、仁齋弟たり難しと。

傷齋、性理學を奉じ、誠敬を以て本と爲し、深く時輩の異説に渉るを非とす。其の人を教ふる、小學近思錄を以て之を開發す、惺惺として老に至るまで少しも怠らす。室鳩巢、和角某に與ふる書に曰く、傷齋、一生程朱を崇信し、始終變ぜず。近世の醇儒者といふべし。老夫敢へて自ら先輩に比するにあらずと雖も、其の程朱を崇信すること則ち多く譲らずと。又兩伯陽の橘意茶話に曰く、余少歳の時明經を以て志と爲す。中村・米川諸儒の如き、固より博學を以て之に名づく可からず。然れども其の身を立つる卓偉、自ら修むる謹嚴なること、亦以て篤行の郷先生と爲す可し。今則ち斯の人なしと。

傷齋、伊藤仁齋より少きこと二歳。顔頰名を齊しうす。當世稱して曰く、傷齋兄たり難く、仁齋弟たり難しと。

字。其分門略。微小學而敷。衍之。博羣。錄。倭漢古今賢。媛。此邦女。誠。其克禱世教。蓋莫過此書。鳩巢以其不。載義經妾靜。引下采葑采菲。無以以下體。以尤之。要惟遺一烈女耳。何害此編。

の克く世教を禱くるもの、蓋し此書に過ぎたるなし。鳩巢、其の義經の妾靜を載せざるを以て、葑を采り菲を采る、下體を以てする無かれを引き、以て之を尤む。要するに惟一烈女を遺すのみ。何ぞ此編を害はん。

- 意味をわし廣む
- 世の風教の助けになる
- 詩經却風谷風篇に出づ。葑菲はかぶら、下體は根、即ちかぶらを探りて食するに、其根は時によりて味に美惡あれど根盤しくして其莖の美をすつべからずとの義にて、小雅を以て大雅をすつべからずとの意

惕齋行狀一卷。門人阿波増益夫。率遺言撰之。首載肖像及惕齋自題詩一首。其詩云。利名雙字胡爲者。

惕齋行狀一卷、門人阿波の増益夫、遺言を奉じて之を撰ぶ。首に肖像及び惕齋自題の詩一首を載す。其詩に云ふ、利名の雙字胡爲なる者ぞ、億萬の民生俱に策勵す。着畫莽材世計に惚し、林曲に考案して永く言に娛むと。

- 増田隆之、字は益夫、門波の人
- 名と利との爲にかげまはる
- 年老いて才拙く世渡りにくらし
- 山水の間に遊樂す

億萬民生俱策勵。着畫莽材世計考案林曲水言娛。

貝原篤信

貝原篤信、字は子誠、小字は久兵衛、益軒と號し、又損軒と號す。筑前の人。國侯に仕ふ。

貝原篤信。字子誠。小字久兵衛。號益軒。筑前人。仕國侯。益軒。以寬永庚午十一月十四日生。于福岡城中官舎。父利貞。號寬齋。通軒。岐家言。益軒自幼警敏。有殊質。九歲就兄存書。讀書多成。暗誦。及中

益軒は寬永庚午十一月十四日を以て、福岡城中の官舎に生る。父は利貞、寬齋と號し、軒岐家の言に通ず。益軒、幼より警敏にして殊質有り。九歲、兄存齋に就いて書を読み、多く暗誦を成す。中年に及び京に入りて講學す。是時都下の名彦胥心を傾けて之に下る。遂に博見篤學を以て名海内に重し。益軒、學常師なし。或は以て松永昌三の門人となすも謬れり。大宰徳夫、儒林に於て最も許可鮮し。其の益軒に於ける、嘗て稱説して曰く、博學洽聞海内比無しと。

年入京講學。是時都下名彦行傾心下之。遂以傳見篤學名重海內。益軒學無常師。或以爲松永昌三門人者謬矣。太宰藤夫於儒林最詳許可。其於益軒嘗稱說曰。博學洽聞海內無比。

●七年 ●許は黃帝の姪たる軒轅氏の略、彼は岐伯と稱する人、共に醫術の祖、轉じて醫術の稱 ●人に殊なりナゲれたる性質 ●名士 ●善識 ●儒者仲間にて最も許すこと少し ●學問博く見聞ひろし

初其學無所主。於陸象山王陽明說皆有所取焉。及後讀學齋通辨。登歸夜朱學。雖然晚年著大疑錄二卷。以下大極本無極。陰陽非道。所以陰陽一者道。性有本然氣質。理無

初め其學主とする所無し。陸象山・王陽明の説に於て、皆取る所有り。後學都通辨を讀むに及び、壹に朱學に歸依す。然りと雖も晩年大疑錄二卷を著し、大極は本無極、陰陽は道に非ず、陰陽する所以の者道なり、性に本然の氣質有り、理に生死無し、氣に生死有り。及び體用一源、顯微無間、主一無適、沖莫無朕等の説を以て、聖經と徑庭有りと爲す。而も人と爲り謙恭純篤なり。其言に曰く、吾、幸に朱子の後に生れて、其書を窺ふことを得たり。無窮の幸、又四極の恩なりと謂ふ可し。故に吾之を敬すること神明の如く、之を信すること書經の如しと。諸を世の其學未だ眞ならずし

生死。氣有主。死。及體用一源。顯微無間。主一無適。沖莫無朕等之説。爲與聖經有徑庭。而爲人謙恭純篤。其言曰。吾幸生于朱子之後。而得窺其書。可謂無窮之幸。又謂顯微無間。體用一源。之想也。故吾敬之如神明。信之如書經。視世之其學未眞。輒拾三人之短。以爲三口實者。則

益軒好著書。能救世之心。實苦。其所著

益軒好んで書を著す。救世の心實に苦なり。其著す所百有餘種、多く書するに國字を以てし、語種めて懇切に、田夫紅女素見隸卒皆之を便とす。近時刊

て、輒ち人の短を拾ひ以て口實となす者に視れば、則ち弊類も當ならざるなり。

●以下の各項皆朱子の學說の主要點なり。大極は本體なり、本體はもと現象を超越せり、形なく感受し得べからず、故に無極といふ ● 體用一源は道に非ず、體用する所具即ち作用を盡て盡さず ● 道は本體にして生死なし、氣は現象にして生死あり ● 體は本體、用は本體の作用にして、共に道を一にす ● 顯は本體の活動してあらはれたるもの即ち用なり、微は體かして未だ現れざるもの即ち體なり、體用一源なれば、顯微の間にてなきは當然なり ● 心善にして放散せざる意、朱子は之を敬といふ ● 沖莫は天地の空寂たるをいひ、無朕は何等のさしなきをいふ、朱子は天地は空寂にして、其間何のさしなきれども、其中に萬物の將に生ぜんとする形象隠れりと爲く、即ち無朕あり、無中に有るるあり ● 聖人の書に説く所とへ定たりあり ● 吾はあどを轉じて聖竹、是は其甲をまきて吉列をトすもの

百有餘種。多
 書以國字。語
 極懇切。田夫
 紅女童兒。錄
 本皆便之。與
 近時所刊行
 泛泛者。迥不
 類。又善修養
 投老猶要
 不衰。其所屬
 綴者不少。六
 十作和漢各
 數增補。六十
 七作大和。七
 七十四作筑
 前續風土記
 及點例。七十
 五作諸菜譜。
 七十九作大
 和本。八十

行する所の泛泛たる者と迥かに類せず。又修養に善し。老に投じ猶ほ嬰嬰とし
 て衰へず。其の屬綴する所の者も少なからず。六十、和漢名數増補を作り、
 六十七、大和廻を作る。七十四、筑前續風土記及び點例を作り、七十五、
 諸菜譜を作る。七十九、大和本艸を作り、八十一、樂訓を作り、八十四、
 養生訓を作る。慎思錄に載す、魏志に曰く、胡昭怡怡として愛せざる無く、
 僕隸と雖も必ず禮を加ふ。年八十にして書籍に倦まざる者は、胡徵君に於
 て之を見ると。篤信謂ふ、胡昭が愛敬の徳量及ぶ可からず。以て法と爲す
 可し。八十にして書を読んで倦まざるが如きは、吾れ耆耄と雖も、亦日夕手に
 卷を釋かず。是れ企及すべしとなすと。此れ自ら其實を紀するなり。

● 田夫は農夫、紅女は工女、童兒は子供、嬰嬰はめしつかひの類 ● つまらぬ書 ● 元氣さかんる書 ●
 ● 著する書 ● 支那三國時代の障子、德行あり、満の末、孫福風をなす、されど障の障れたる障子の一色を授す
 なく、邑民、障に障りて始めて安し、怡怡は愉快なるさま ● 老ぼれ ● 儲すことを得

一作樂調。八十四作養生訓。慎思錄載。魏志曰。胡昭怡怡無不受。雖僕隸必加禮焉。年八
 十而不倦於書籍者。於胡徵君見之矣。篤信謂。胡昭愛敬之徳量不可及。可以為法。如二八
 十。讀書不倦。吾雖遠遊。亦日夕手不釋卷矣。是為可企及。此自紀其實一也。

年三十九、近思錄備考を著し、明年小學備考を著す。並に世に版布す。後學此
 に因つて進む者多しと云ふ。人見鶴山云く、本邦先儒の編著固より多し。而し
 て經傳註解を衰輯する者、益軒先生の此二篇を以て始となすと。

● 後進の學徒 ● おつめ聞か

年三十九著
 近思錄備考
 明年著小學
 備考並版布
 于世後學因
 此而進者多
 云。人見鶴山
 云。本邦先儒
 編著固多。而
 衰輯經傳註
 解者。以益軒
 先生此二篇
 為始。

益軒雖時作
 詩。素好倭歌
 而不好詩。每
 謂詩為無用
 閑言語。慎思
 錄曰。和歌者

益軒、時に詩を作ると雖も、素より倭歌を好んで詩を好まず。毎に詩を謂つて無用
 の閑言語となす。慎思錄に曰く、和歌は我が國俗の宜しき所にして、詞意通曉し
 易し。故に古人の歌詠極めて精絶なり。古昔は婦女と雖も亦之を能くする者多
 し。唐詩は本邦風土の宜しき所に非ず。其詞韻國俗の言語に異なり、中華に摸倣

我國俗之所
宜。而調章易
歌。詠極精絕
矣。古昔雖
多矣。唐詩者
非本邦風土
之所宜。其詞
韻異于國俗
之言語。雖
微于中華。故
雖古昔之名
家。其所作拙
劣不及于和
歌。一也。遺
矣。我邦只可
以和歌一言
其志。其情不
要作拙詩。以
招
給。稗符之謂
又曰。白樂天
以謂。作詩者
勞心慮。後聲
氣。連朝接夕
不。自知其苦
非。魔。而何。
愚謂此以詩
爲。魔也。其言
宜矣。然而白
樂天其言如此
。而所爲不免
爲。詩。魔。所
。惱。者。何。邪。

益軒年八十

益軒年八十五にして没す。没するに臨んで詩二首倭歌一首を賦す。詩に云ふ、平

し難し。故に古昔の名家と雖も、其の作る所拙劣にして和歌に及ばざるや遠し。我が邦、只和歌を以て其志を言ひ其情を述ぶ可し。拙詩を作つて以て論、魔符の詭を招くを要せずと。又曰く、白樂天以謂へらく、詩を作る者は心を勞し、虚しく聲氣を役す。連朝接夕自ら其苦を知らず。魔に非ずして何ぞやと。愚謂ふ此れ詩を以て魔と爲すなり。其言宜し。然り而して白樂天其言此の如くにして、而も爲すところ詩魔の爲に惱まざるを免れざるは何ぞやと。

● 役に立たぬむだごと ● 古人の歌は甚だすぐる ● 言語の韻が日本語と異なる ● 魔術を何事するれの

五。後。賦。没。賦。二
詩。二。首。倭。歌。
一。首。詩。云。平
生。心。曲。有。誰
知。常。畏。天。威。
欲。勿。欺。存。願。
沒。寧。難。不。克。
朝。聞。夕。死。豈
不。悲。幼。求。斯
道。在。孤。懷。德
業。無。成。夙。志
乖。八。十。五。年
爲。曷。事。誰。書。獨
樂。是。生。涯。倭。歌。曰。殺。失。葛。世。曠。乙。買。殫。敗。葛。栗。請。殺。殺。買。失。閑。鴉。連。石。邊
儂。栗。納。幽。篋。屋。密。失。葛。捺。宿。八。十。餘。年。夢。事。如。狂。

生の心曲誰有りて知らん、常に天威を畏れ欺くなからんと欲す、存願、没寧、克はずと雖も、朝聞夕死豈に悲しからずや。幼にして斯道を求むること孤懐に在り、徳業成る無く夙志乖く。八十五年曷事をか爲せる、讀書獨樂是れ生涯と。倭歌に曰く、來しかたは、一夜ばかりの心ちして、八十路あまりの、夢を見しかな。(譯に曰く、往事を願回すれば、宿の如し、八十餘年夢裏に過ぐ)

● 平生の心中誰か知らん ● 論語里仁の「子曰朝聞道、夕死可矣」の語に取る ● 幼時より聖人の道ををまゐんことを願ひ心に定む ● 一夜泊り

嘗て東に居て將に西に歸らんとし、路を海上に取る。同船數人名姓相知らず。雜然相向ひ、喋喋相語る。中に一少年有り。亢顔經を談ず。旁人無きが若し。益軒嗜として言無く、能無き者の若し。既にして船岸に達し、各其姓名郷里を

嘗て東に居て將に西に歸らんとし、路を海上に取る。同船數人名姓相知らず。雜然相向ひ、喋喋相語る。中に一少年有り。亢顔經を談ず。旁人無きが若し。益軒嗜として言無く、能無き者の若し。既にして船岸に達し、各其姓名郷里を

雖然相向。噪
噪相語。中有
一少年。元頗
談。經。旁若無
人。益軒暗無
言。若無能者。

告ぐるに及へば、則ち少年始めて益軒たるを知り、
愜然として自ら容れず。遂に其名を陳べず鼠竄して去る。

● ことごとくと向ひあつてべら／＼話す ● 傲然として無言を説く ● 聲の如く無言 ● 鼻づかしくてたへられず ● こま／＼と立去る

既而及下船。連岸。各告其姓名。鄉里。則少年始知爲益軒。愜然不自容。遂不陳其名。鼠竄去。

益軒讀書之所二室有り。一は則ち益軒と號し、一は則ち損軒と號す。並に自ら命するなり。世或は姪好古損軒と號すと爲す者有り。或は初め損軒と號し、後書估の言に従ひて更めて益軒と號すと爲す者有り。皆謬傳にして信す可からず。

● 本屋 ● あやまれる言ひつたへ

益軒讀書之所二室有り。一則號益軒。一則號損軒。並自命也。世或有爲姪好古號損軒者。或有爲初號損軒。後從書估言。更號益軒者。皆謬傳不可信。

慎思錄。取三時。聖之學。曰。游蕩。記。濫。偏。僻。駁。雜。或。云。讀。書。學。文。之。事。常。多。慎。德。力。行。之。功。常。少。或。云。欲。立。己。說。而。實。入。之。小。疵。動。常。傷。于。刻。薄。雖。有。其。說。是。者。也。其。心。則。非。矣。浮。疎。淺。露。非。君子。之。氣。象。其。文字。雖。有。其。可。採。者。其。人。猥。陋。可。賤。而。已。矣。是。蓋。指。徂。徠。黨。也。又。斥。爲。三。大。學。非。三。聖。人。之。言。者。爲。近。世。之。俗。儒。是。指。仁。齋。也。此。他。學。術。論。及。異。學。辨。朱。子。一。辨。皆。論。當。世。排。宋。儒。更。立。門。戶。

慎思錄に時輩の學を駁して曰く、游蕩記濫偏僻駁雜と。或は云ふ、書を讀み文を學ぶの事常に多く、徳を慎み行を力むるの功常に少なしと。或は云ふ、己が説を立てんと欲して、人の小疵を責め、動もすれば常に刻薄に傷る。其説是なる者有りと雖も、其心は則ち非なり。浮疎淺露、君子の氣象に非ず。其文字間採る可き者有りと雖も、其人猥陋賤む可きのみと。是れ蓋し徂徠の黨を指すなり。又大學は聖人の言に非ずと爲す者を斥け、近世の俗儒と爲す。是れ仁齋を指すなり。此他學術論、及び異學の朱子を誹る辨（自娛集に載す）は、皆當世宋儒を排して更に門戸を立つるを論刺す。

● とりとめなく、みだりがはしく、かたより、いりまじる ● 小さな事 ● 冷然に過ぐ ● 輕率にして淺薄 ● いやしくみだち ● 攻撃す

存齋樂軒皆
益軒兄弟好
學有著作存
齋有丈夫子
二曰可久曰
重春重春承
益軒後樂軒
子曰好古號
二聰軒益軒

存齋樂軒は、皆益軒の兄にして、學を好み著作有り。存齋に丈夫子二有り。曰く可久。曰く重春。重春、益軒の後を承く。樂軒の子を好古と曰ひ、聰軒と號す。益軒養つて子と爲す。博雅、益軒に類す。惜しいかな先だちて没す。

● 男の子 ● 博雅至事なること益軒に似たり

益軒妻江崎
氏。名初字得
生。號東軒。才
德並全。治經
史。善詞文。
工。作。詩。書。
又。諷。風。常
於。益軒遊。歷
勝地。奪軒多

益軒の妻江崎氏、名は初、字は得生、東軒と號す。才德並び全く、經を治め史に通ず。善く文墨に嫻ひ、工に隸書を作る。又國風を詠じ、常に益軒に従つて勝地を遊歴す。益軒多く遊記を著す、實に内助有りと云ふ。東涯、貝原翁及び妻某氏の字帖に題して曰く、前時、海の西に二巨儒有り。曰く省菴先生、曰く損軒先生。先人の省菴子に於けるや、未だ面を識らずと雖も、竿牘往來、毎に相推重す。損軒子に於けるや、管て一播神の家に相會す。而も道契はず。牛

著遊記。實有
內助云。東涯
題貝原翁及
妻某氏字帖。
曰。前時海之
西有二巨儒。
曰省菴先生。
曰損軒先生。
先人之於省
菴子也。雖未
識。而竿牘往
來。每相推重。
於損軒子也。
管相會于一

山香月子は筑の産なり。兩豐の間に宦し、時時都に上つて先人を過訪す。故に平素三老宿の間に周旋す。損軒子は則ち特に其の親依するところなり。近ろ又京に遊び予に乙軸を詠す。則ち損軒子と其内子某氏との遺筆なり。予に其尾に跋せしむ。嗚呼損軒子の書、端好度あり。老いて衰へず。某氏孟光の賢を躬にして、衛氏の筆を兼ぬ。皆予の夙に聞く所なり。而して之に加ふるに牛山子の賢を尙び徳を懷ふの誠を以てす。曷ぞ其託に負く可けんやと。

● 文章にすぐる ● 和歌 ● 東涯の父仁雅を指す ● 書風のヤリとり ● 書評歴史 ● 三老學者の間を遊訪す ● 内通とも兼 ● 端正にして決意あり ● 詞の人、夫を擧げて終海の妻となり、固つて遺筆の山中に入る ● 管の筆蹟、草書を善くす

播神家。而道不契。牛山香月子筑産也。宜予兩豐之間。時時上郡過訪先人。故平素周旋三老宿之間。而損軒子則特其所親依也。近又遊京。既予乙軸。則損軒子與其内子某氏之遺筆也。傳予跋其尾。嗚呼損軒子之書。端好有度。老而不衰。某氏躬孟光之賢。而兼衛氏之筆。皆予之所夙聞。而加之。以牛山子尙賢懷德之誠。曷可負其託耶。

宇都宮三近

宇都宮三近、字は由的、頑拙と號す。又遷菴と號す。周防の人。巖國の吉川氏に仕ふ。

字都宮三近。字由的。號頑拙。又號遷菴。周防人。仕巖國吉川氏。遊學京師。明曆丁酉年二十四。承主命歸郷。途中有詩及倭歌。編名巖邑紀行。印行于世。其居京學於松永尺五門。乃紀行難波吟。有昨月二月丁日。老師尺五講堂前。各產蒨藝評書卷。祭至聖二面配大賢。我爲公程二背此會。幾思師友。意悵悵句。

遷菴、幼時京師に遊學す。明曆丁酉、年二十四、主命を承けて郷に歸る。途中、詩及び倭歌有り。編して巖邑紀行と名づけ、世に印行す。其京に居るや、松永尺五の門に學ぶ。乃ち紀行難波の吟に、昨日二月上丁の日、老師尺五講堂の前、各々蒨藝を羞めて書卷を評し、至聖を祭りて大賢を配す、我れ公程の爲に此會に背く、幾たびか師友を思ひ意悵悵の句あり。

●三年 ●上のきのこの日、彌賀を行ふ日なり ●うき草と白もぎ、祭に供ふ ●孔子を祭りて顔孟其の他の大賢を併せ祭る ●要へかなしむ

嘗て日本古今人物史を著す。而るに中川清秀の傳、書事忌諱に觸るゝ者有り。此を以て罪を大府に得、乃ち巖國に禁錮せらる。數年にして赦に遭ふ。是に於て又京に入り、壹に教授を以て任と爲す。久しうして名益々重し。其赦に遭ひしを延寶乙卯六月二十四日となす。是日山鹿高祐(兼行子と號す。寛文六年、事に坐して赤穂侯に幽せらる)亦俱に赦さる。

- 其筋の據に由る ● 周防岩國 ● 三年

● 其筋の據に由る ● 周防岩國 ● 三年

嘗て日本古今人物史を著す。而るに中川清秀の傳、書事忌諱に觸るゝ者有り。此を以て罪を大府に得、乃ち巖國に禁錮せらる。數年にして赦に遭ふ。是に於て又京に入り、壹に教授を以て任と爲す。久しうして名益々重し。其赦に遭ひしを延寶乙卯六月二十四日となす。是日山鹿高祐(兼行子と號す。寛文六年、事に坐して赤穂侯に幽せらる)亦俱に赦さる。

嘗て日本古今人物史を著す。而るに中川清秀の傳、書事忌諱に觸るゝ者有り。此を以て罪を大府に得、乃ち巖國に禁錮せらる。數年にして赦に遭ふ。是に於て又京に入り、壹に教授を以て任と爲す。久しうして名益々重し。其赦に遭ひしを延寶乙卯六月二十四日となす。是日山鹿高祐(兼行子と號す。寛文六年、事に坐して赤穂侯に幽せらる)亦俱に赦さる。

- 四書に同じ、論語・孟子・大學・中庸の四篇

先生。蓋其標註皆蠅頭細字。猶遺著衣。故云爾。

物徂徠少在上總。得二書。上總二時。得二書。標註二體之。後介二解長伯二。贈二書。稱二。諸標註以爲下。惠及二海內一者。而此書未致。遷菴就水。周南代父復徂徠。律一書曰。以下與二。郡由的一書託。嗟乎的也。以二。今年春二世。乃與二孝孺二。我之巖邑。使下。的于文甫祭二告墓。以成中先生之志也。由的吾嘗所二兄事也。學術衰然實行可尙。不富二彼其身。身二先生二相識。今則及墓也。悲哉。

● 山縣長伯をなかだちとなす ● 棺に入る、死す ● 死す ● 山縣周南 ● 岩國 ● 廣田經衡立派にして性質行動尊敬に備ひす ● 徂徠

男三的。字文甫。號圭齋。卒于京師。伊藤東涯記墓曰。惟昔遷菴先生。學于松永氏之門。講經授徒。久在二輩下。人所二師尊。君夙承二家庭之訓。兼從二先子二遊。天資樂易。善與人交。家世臣事吉川家于防州巖國。鄉人嚮學君有力焉。

男、三的、字は文甫、圭齋と號す。京師に卒す。伊藤東涯墓に記して曰く、惟ふに昔遷菴先生、松永氏の門に學び、經を講じ徒に授く。久しく輩下に在り。人の師尊する所。君夙に家庭の訓を承け、兼て先子に従つて遊ぶ。天資樂易、善く人と交る。家世吉川家に防州巖國に臣事す。郷人の學に嚮ふこと、君力有りと。

● 天子のち膝元、京都 ● 仁廟 ● 性質快活にしてむやすく、よく人と交際す

子遊。天資樂易。善與人交。家世臣事吉川家于防州巖國。鄉人嚮學君有力焉。

五井守任

五井守任。字加助。號持軒。大坂人。

五井守任、字は加助、持軒と號す。大坂の人。持軒、其先は大和の五井戸に家す。因つて五井を氏とす。世、井戸と稱する者も

持軒其先家大和五井。因氏五井。世稱井戸者同出于此。共一族云。持軒本醫者也。嘗誤方劑。致人不起。慨然改。輟爲儒。則學篤行修。綽有古風。本多侯厚禮。辭之。以開講說。大喜其誠實。一時名彥。伊藤仁齋。東涯。仲邨。惕齋。貝原益軒。恥軒。三輪執齋等。咸以文字爲交。初宗宋儒。晚有所見。不拘守。如其論性。專以氣質爲說云。

持軒成童入京。居十餘年。歸大坂。教授。

同じく此に出づ。共に一族と云ふ。持軒は本醫者なり。嘗て方劑を誤つて人を不起に致す。慨然として輟を改めて儒となる。則ち學篤く行修り綽として古の風有り。本多侯禮を厚うして之を辭し、以て講説を聞き、大に其誠實を喜ぶ。一時の名彥、伊藤仁齋・東涯・仲邨・惕齋・貝原益軒・恥軒・三輪執齋等、咸文字を以て交驩をなす。初め宋儒を宗とし、晩に見る所有りて拘守せず。其の性を論ずる如き、専ら氣質を以て説を爲すと云ふ。

- 處方を誤つて人を死に致す ● 方針をかへて儒者と爲る ● ムツたりとして古人の風あり ● 同時代の名士 ● 貝原好古 ● よしみを交ふ ● かはり守らず

持軒、成童にして京に入り、居ること十餘年、大坂に歸つて教授す。此地、文學の興る、持軒を以て首となす。南郭が蘭洲に復する書に曰く、在昔尊翁先

此地文學之興。以南軒爲首。南郭復蘭洲書曰。在昔尊翁先生唱道。浪華海內。景仰久矣。又學下河邊長流。善國風。東瀛撰墓碑。盛稱其學術。行義曰。壯時家道饒阜。爲親眷所掩。而不問。及晚。遂致窮迫。乃曰。若無人相恤。則死耳。淡泊自守。晏如也。簡牘往來。常揀

生道を浪華に唱へ、海内景仰すること久しと。又下河邊長流に學び、國風を善くす。東涯、墓碑を撰び、盛に其學術行義を稱して曰く、壯時家道饒阜、親眷の爲に掩はれしも問はず。晩に及び遂に窮迫を致す。乃ち曰く、若し人相恤むこと無くば則ち死せんのみと。淡泊自ら守つて晏如たり。簡牘の往來、常に敗紙を揀んで其空白を用ひ、天物を暴殄するを以て戒と爲す。天資坦率にして、邊幅を修めず、辭説を飾らず。平生曾て人の惡を言はず。或は人と語るに、言或は當らずとも亦之を斥けず。但曰く、某の解せざる所と。問關鄙俚の言、解せざる所多し。苟も學を問ふに及んでは、誨誘懇至解せざれば已まず。曾て人に謂つて曰く、某胸中未だ嘗て一惡念を蓄へずと。又曰く人は惡を爲す能はざる者なりと。一書生有り。遽かに曰く、吾輩然ること能はずと。先生色を正して曰く、意はざりき君の人と爲り乃ち爾らんとは。惡若し作す可くんば試みに之を爲せと。家に日本紀學を傳ふ。之を治む

敗紙一用其空
自以爲天
物爲戒。天資
坦率。不飾。邊
幅。不飾。辭。說。
平生。不。言。言。
人之。惡。或。與。
人。言。言。或。不。
當。亦。不。斥。之。
但。曰。某。所。不。
解。聞。聞。部。僅。
之。言。多。所。不。
解。有。及。同。學。
勝。勝。至。不。
解。不。已。曾。謂。
人。曰。某。胸。中。
未。嘗。言。一。惡。
念。又。曰。人。不。能。
忍。者。也。有。一。書。
生。遊。曰。吾。輩。不。
能。忍。然。先。生。正。色。
曰。不。意。君。之。爲。
人。乃。爾。
忍。者。可。作。試。爲。
之。家。傳。曰。本。紀。
學。治。之。尤。精。不。
能。忍。怪。不。經。之。
說。又。嗜。和。歌。不。
勝。瑣。錄。敏。
而。有。理。又。梁。田。
說。應。作。傳。曰。先。
生。常。謂。人。得。能。
忍。四。子。可。以。爲。
一。理。乃。行。而。躬。
焉。

ること尤も精し。迂怪不經の説を糺へず。又和歌を嗜む。瑣録を務めず、敏にして理有り。又梁田蛭巖、傳を作つて曰く、先生常に謂ふ、人能く四子に通ずるを得ば、以て宇宙第一理を識る可し。乃ち行つて躬にせば、則ち天下の能事畢れりと。故を以て書を説くに學庸語孟を循環し、未だ嘗て佗に及ばず。此方坊間の諸賢、其業を命じて某屋と曰ふ。所謂茶屋酒屋の類の如し。攝人 戲に先生を目して、四書屋加助と謂ふと云ふ。

持軒は關州の父をよりかくいふ ● 大和守田の人。本姓小崎氏、名は具平、通稱益六、大坂に住す、國學者 ● 和歌 ● 家藏書有にて類類のためにごまかされたるも問はず ● 田賦する ● 安ずるさま ● むやみに消失す ● 率直にしてかざり氣なし ● 村里の俗語 ● をしへ導くこと願めて懇にわかれ止めず ● まはり聞く且つ常態を遺したる風なし ● 魂はまがく、寝ばたちばむ、即ちつくりかざる ● 謙謙の人

天下之能事畢矣。以故說書循庸語孟。未嘗及佗。此方坊間諸賢。命其業曰某屋。加所關茶屋酒屋之類。攝人戲曰先生。謂四書屋加助云。

年八十、三輪執齋倭歌を作り之を賀す。曰く、日にそひて高くぞ仰ぐ、學び得し心の法も盡きぬ齡もと。此れ其徳と、壽の疆無きと、人之を仰ぐこと日の如くなるを陳べしなり。碑に曰く、享保六年辛丑、閏七月十八日、家に終る。享年八十一。傳に曰く、享保中享年八十、大坂の僑居に卒すと。

年八十三輪執齋作倭歌賀之。曰。朋輩遠乙的。世葛孤。猿。過。屋。葛。悠。徐。勝。湖。夫。毅。毅。藤。助。助。藥。木。實。吉。奴。部。鏡。乙。木。此。陳。其。徳。與。壽。無。一。傳。曰。享。保。中。享。年。八。十。卒。於。大。坂。僑。居。

五井純禎

五井純禎、字は子祥、小字は藤九郎、蘭洲と號す。又洲菴と號す。持軒の

九郎。號蘭洲。又號三洲。持軒男。大坂人。蘭洲嗣家學。又有重名於世。享保中。中井覺菴設鄉校于大坂尼崎坊。三宅石菴主講席。蘭洲爲助教焉。亡何來江戶。遂召仕津輕侯。猷替多裨益云。然以言或有不行。乃移病乞去。有司惜而不爲通。數乞終九。即歸休于大坂。復教授其鄉校。以終其身。辭津輕。遠近爭召。而皆不應也。

蘭洲博學富著述。項語實疑當非物編

男。大坂の人。

蘭洲家學を嗣いで、又世に重名有り。享保中、中井覺菴、郷校を大坂尼崎坊に設く。三宅石菴講席を主る。蘭洲助教たり。何もなく江戸に來り、遂に召されて津輕侯に仕ふ。猷替裨益多しといふ。然るに言或は行はれざる有るを以て、乃ち病に移し去らんことを乞ふ。有司惜んで爲に通ぜず。數々乞うて終に允さる。即ち大坂に歸休し、復其郷校に教授し、以て其身を終ふ。津輕を辭する後、遠近争ひ召ししも、皆應ぜず。

● 辭を勤め難を止め、よく君をたすく ● 前にかこつけて去らんとす

蘭洲博學著述に富む。瑣語・質疑篇・非物編は、既に世に行刻す。其他人梓を勤むるも、謙讓許さず。又兼て國學を攻む。世に源語梯三卷有り。人

既行刻于世。其他人勸梓。而謙讓不許。又兼攻國學。世有源語梯三卷。人得益焉。其附言曰。此書不詳何人所著。人或購得之市。此狡猾貪利者。盜蘭洲源語。改刻其題署也云。河井立牧桂山集。載倣蘭洲春。百首倣歌。由此視之。又好詠國風。

益を得。其附言に曰く、此書何人の著す所なるかを詳かにせず。人或は之を市に購得すと。此れ狡猾にして利を貪る者が、蘭洲の源語語を盗みて、其題署を改刻せるなりと云ふ。河井立牧の桂山集に、蘭洲の春曙百首の倣歌に倣ふを載す。此に由つて之を視れば、又好んで國風を詠せしなり。

● 出版をす、む ● 終む ● 題署を更む

蘭洲文世不多傳。余嘗見其烈婦瀕死記。敘事曲悉。使人悲痛。實是婦女之鑑戒。不可無沒

蘭洲の文、世に多く傳らず。余嘗て其烈婦瀕死の記を見るに、敘事曲悉、人をして悲痛せしむ。實に是れ婦女の鑑戒にして、蕪没すべからざる者なり。因て此に掲ぐ。曰く、烈婦栗女は、甲斐國田中村の農夫の女なり。幼にして孤、村長某の家に依る。村長其人となりを愛し、資裝を與へて同村安兵衛といふ者に嫁せ

者也。因揭於此。曰。烈婦栗女。甲斐國田中村農夫之女也。幼孤。依村長某家。村長愛其爲人。與女裝嫁。同村安兵衛者。未幾安兵衛染惡疾。臥在牀。栗女事之。身執井臼。毫無厭心。夜則代夫耕田。夜則遺扶。助之。其暇紡績。以供薪藥。勇六十餘。每三四遊。

しむ。未だ幾ならずして安兵衛惡疾に染み、臥して牀蓐に在り。栗之に事へて身井臼を執り、毫も厭心無し。晝は則ち夫に代りて田を耕し、夜は則ち選つて之を扶助し、其暇には紡績以て薪柴に供す。舅六右衛門、七十歳を過ぐ。出でて野外に遊ぶ毎に、必ず湯茶を持ち往いて之を省す。遠く出で晚く歸れば、必ず里門に迎ふ。一村の人相聚つて嘆賞せざる者なし。茲に年有り。嗚呼婦人の夫に於けるや、仰望して身を終ふる所なり。夫疾みて事を事とせず。舅恙して家衰ふ。豈に身を託するに堪へんや。矧や惡疾は人情の憎む所なるをや。且つ子無くして、年尙ほ少し。之を捨てて改嫁せざる者、天下能く幾人が有る。栗女や孝且つ義なるかな。嗟天道知る無し。洪水横流、夫妻魚腹に葬らる。享保十三年戊申十二月、官其節を嘉し、黄金を賜ひて、以て其事を旌す。初め七月八日、大風暴雨、川流沸騰し、隄を懐み陸に覆る。田中村は其下流に在り。夜中人相呼で曰く、水將に至らんとす。之を避けて可なり

野外。必持湯茶。往省之。遠出曉歸。必迎里門。一村人莫不相聚嘆賞者。有年于茲矣。嗚呼婦人之於夫也。所仰望而終身也。夫疾不事。舅恙而家衰。豈堪託身。矧惡疾人情所憎。且無子。而年尙少。不捨之改嫁者。天下能有幾人。栗女孝且義矣哉。嗟天道無知。洪

と。是の時に當つて、夫疾病にして四肢爛潰す。乃ち起つ可からざるを知る。乃ち栗に謂つて曰く、我れ水に死せん。汝疾く避けよ。汝、我を醜しとせず。湯藥の煩、扶助の勤、心に銘じて忘れず。今親老い汝年尙ほ少し。幸に生を全うして家を滅すなかれ。是れ望む所なり。我れ此惡病に窘む。餘喘惜む所なし。命旦夕に在り。水に死せば則ち幸なり。汝は則ち避けよと。栗、泣いて曰く、相親むこと數年。難に臨んで之を委するは不祥なりと。語未だ畢らざるに、門外詢詢且つ泣き且つ號んで曰く、水聲近し。後る者は死せん。栗乃ち舅を扶けて門外に出し、人に託して曰く、乞ふ此翁の命を救へと。舅曰く、汝、夫と來れ。然らずんば我れ獨り生きじと。栗曰く、敬諾。大人歩むこと遅し。請ふ先づ行け。妾、良人と之に及ばんと。乃ち舅の副衣及び田地典券を以て、油紙之を裹み、以て其人に託して之を遺る。而して後室に入り夫の側に侍し、天に誓つて以て夫と死を同じうす。水至り遂に溺れて死

水横流。夫妻
葬。魚腹。享保
十三年戊申
十二月。官嘉
其節。賜黃金
以旌其事。初
七月八日。大
風暴雨。川流
沸騰。懷。陸
田。中。村。在
其下流。夜中
人相呼曰。水
將至。避之可
當是之時。夫
疾病四肢爛
潰。乃知不可
起。乃謂栗曰。
我死於水。汝
疾過矣。汝不
我醜。湯藥之

す。民屋亦蕩す。夫妻の尸在所を知らず。水退き民其業に復し、栗女の志を聞いて、各々錢物を出し以て、其冥福を瑞蓮佛寺に修す。甲斐國の邑宰小宮山某、其狀を具して之を台聽に達す。且つ曰く、舅六右衛門幸に免る。然れども去年登らず。安兵衛田を以て金に質して以て租に充つ。伏して望む國恩黃金を賜ひ以て優賞せよ。則ち遺老頼る有り、死者瞑す可く、且つ以て民の志を勵さんと。是に於て黃金若干を賜ひ、以て舅を養ふ。邑宰、賜金を以て其田地を復し、以て安兵衛が後をなし、且つ爲に烈婦の碑を立て、之を一儒先に謀り、國字を以て其事を紀す。嗚呼匹婦の微、上君心を動かし、下傳へて以て美となす。其名石と朽ちじ。天道知る無しと謂ふ可けんや。

● 事を終することつばちにしてつくせり ● 賣は金、結は衣裳、よめいりの仕度 ● 床につく ● 勞役、水を汲み米を舂くの意 ● 綿糸をうみ、薪の代を儲く ● 仰ぎ願つて一生を過す ● 夫の病氣重くして手足たゞれくづる ● 粟を煎じる面倒 ● 餘命惜む所無し ● 難儀にあつて棄つるは不可 ● やかましくさわぐ ● つつしんで承知せり ● 地勢、同地の所有主を明記せる符村 ● 後世の安樂を佛に祈る

將軍の忠告に入れる

● 相買らば

● 生き残れる老人も頼りを生じ死したる者も安心して目をねむるべし

煩。扶助之功。銘心不忘。今親老汝年尙少。幸全生無滅家。是所望也。我嘗此惡病。餘喘無所惜。命在且夕。死水則幸也。汝則過矣。栗泣曰。相親數年。臨難委之不詳也。語未畢。門外詢且泣。且號曰。水聲近。後者死。栗乃扶舅出門外。託人曰。乞教此翁命。舅曰。汝與夫來。不然我不同生。栗曰。敬請大人步遲。請先行。妾與良人及之。乃以舅副衣及田地典券。油紙裹之。以託其人。遺之。而後入室侍。夫側。誓天以與夫同死。水至遂溺而死。民屋亦蕩焉。夫妻之尸不知在何所。水退民復其業。聞栗女之志。各出錢物。以修其墓。瑞蓮佛寺。甲斐國邑宰小宮山某。具其狀。達之台聽。且曰。舅六右衛門幸免焉。然去年不登。安兵衛以田質金。以充租。伏望國恩。賜黃金以優賞焉。則遺老有賴。死者可瞑。且以勸民志。於是賜黃金若干。以養舅。邑宰以賜金。復其田地。以爲安兵衛後。且爲立烈婦之碑。謀之一儒先。以國字記其事。嗚呼匹婦之微。上動君心。下傳以爲美。其名與石不朽。可謂天道無知也耶。

中井竹山非
徵曰。蘭洲先
生嘗言。徂徠
之殷。仁齋也。
曰。仁齋之於
宋儒。一如佛

中井竹山の非徵に曰く、蘭洲先生嘗て言ふ、徂徠の仁齋を駁するや、曰く、仁齋の宋儒に於ける、一に佛氏の所謂宿寃有る者の如しと。曾て己の宿寃を爲すこと更に甚だしきを知らざるなりと。蘭洲、朱學を家庭に承け、力めて徂徠を斥け宋儒を護る。然れども固執せず。故に其の自得する所、往往朱に反して

氏所謂有宿

說を立つること、瑣語質疑篇に見ゆ。

寛者曾不知下

己之爲宿宛一

更甚也。蘭洲

承朱學於家

庭。力斥祖徠護宋儒。然不固執。故其所自得。往往反朱立說。見瑣語質疑篇。

蘭洲與中井

整菴交義相

蘭洲、中井整菴と交義相厚し。整菴の墓碣は蘭洲之を紀す。而して整菴の子竹山

厚。整菴墓碣

蘭洲の墓に銘す。竹山の弟履軒の書並に家額あり。銘に曰く、天斯文を相け、

蘭洲紀之。而

實に先生を降す、夫の異言を褒ひ、績を往聖に承く、委有り源有り、通儒全才、

銘蘭洲墓。竹

詞を蒼岷に琢く、休風千載。

山弟履軒書

● 蘭洲が整菴の墓碣を書せるを斥す ● 美風千年の後に傳ふ

井篆額。銘曰。

● 蘭洲が整菴の墓碣を書せるを斥す ● 美風千年の後に傳ふ

天相斯文。實

● 蘭洲が整菴の墓碣を書せるを斥す ● 美風千年の後に傳ふ

降先生。襄夫

● 蘭洲が整菴の墓碣を書せるを斥す ● 美風千年の後に傳ふ

異言。承後往

● 蘭洲が整菴の墓碣を書せるを斥す ● 美風千年の後に傳ふ

大高坂季明

大高坂季明、字は清介、芝山と號す。又一峰と號し、又黃軒とも號す。土佐の人。

芝山の家、世々土佐に臣たり。父宜重致仕して歸田し、後關東に至る。芝山、幼より好んで書を讀む。年十八の比、土佐を出で京に入り江戸に來り、苦學自ら勉む。弱冠巖城侯に宣し、居ること若干年、去つて又稻葉侯に游事す。晩年に祿の用に足らざるを以て、休致を乞ふ。允されず。尋で災に罹る。侯重賜有り。是に於て止足軒の記を作り、敢へて復休を乞はず。

● 辭職して田間に歸る ● 二十歳頃 ● 晩年俸祿が支出に足らざるを以て辭職を乞ふ ● 火災

自勉。弱冠宣

稻葉侯。晩以祿不足用。乞休致。不允。尋罹災。侯有重賜。於是作止足軒記。

芝山出谷一

芝山、谷一齋の門に出で、廣才博覽最も性理を究む。又善く詩を賦し文を屬る。

齊門。廣才博覽。最究性理。又善賦詩。屬文。當世稱頌。儒而氣豪宕。自視甚高。每好排斥時輩。其適從錄二卷。擊蛇笏等目。縱毀鳳仁膏。又謝何林。老書曰。陳元贊在洛而最相會。朱舜水在此而最面晤。潛察厥言。行學術。疑弗端。誠純粹矣。多張便之態。

當世碩儒と稱す。而して氣豪宕自ら視る甚だ高く、毎に好んで時輩を排斥す。其適從錄二卷は、撞巢窟擊蛇笏等の目を擧げて、縦に仁齋を毀罵す。又何林二老に謝する書に曰く、陳元贊、洛に在りて曩に相會し、朱舜水、此に在りて還る面晤す。潛かに厥の言行學術を察するに、疑ふらくは端誠純粹ならじ。猥俚の態多く、彦士の姿に乏し。詞賦亦未だ英鎔ならざるに似たり。故に就いて正すことを欲せず。又編眞昌に答ふる書に曰く、深艸の元政、陳元贊、交を吾子に執ること斯に年有り。僕、洛に在り、晤語二三會に過ぎず。僕、當時、年少氣鋭、人に下るを肯せず。唯視る元贊人と爲り卑猥瑣碎、風雅の致無く、元政人と爲り暗弱固滯、實見の明なきを。或は賤或は廢、日に同志と譏笑するのみ。又厥の詞葩の取る可きみ觀る無し。故に屢々往來せず。亦惜からずや。嘗て聽く朱之瑜老人往年世を謝すと。心越禪師恙なきや否や。定めて知る吾子と此二老者と、毎毎清譚せしを。僕嘗て彼の二老者に遭ふこと、前後兩

乏彦士之姿。詞賦亦似未。英鎔故不欲。就而正焉。又答編眞昌書曰。深艸元政陳元贊。執交吾子有年。于斯僕在洛時。語不過二三會。僕當時年少氣鋭不肯下人。唯視元贊爲人卑猥瑣碎。無風雅之致。元政爲人暗弱固滯。無實見之明。或賤或廢。日與同志譏笑耳。又無視定知吾子與此二老者。每每清譚。僕嘗遭彼二老者。前後到兩三席。徒談花鳥話。風月而已。殊無一言及學問上。但於心越。則唱和一絕云云。近來偶逢木老儒。一癡訥人而已。未嘗看風彩。豈遇荒景元。贈答詩數章。學力未如幼敏之名也。

三席に到るも、徒に花鳥を語り風月を話するのみ、殊に一言學問上に及ぶ無きを。但だ心越に於ては、則ち一絶を唱和す云云。近來偶々木老儒に逢ふに、一癡訥人のみ。未だ會て風彩を看ず。曩に荒景元に遇ひ、詩數章を贈答す。學力未だ幼敏の名に如かずと。

- 大學者 ● 氣象ありし ● 明の何情と林珍 ● まごころありてまじりけ無し ● みだりなる態度
- 德行すべきたる人士 ● 英も鋭も秀でたること ● 輪詞練筆水戸の儒官、京都の人 ● 面會して語る
- みだりにして氣宇小さく、風雅のあもむき無し ● 暗黒にして心ちまり風潮を見る明無し ● 一人は同じく、一人は世學を履し、毎日同志のものと人を讀るのみ ● 文藝のとるべきものを見ず ● 死屍す
- 名は與備、明人、徳川光圀に聘せられて祇園開山となる ● 風雅の談話 ● 木下順庵 ● 口無調法なる愚人にすぎずして風采のりつばなる所なし ● 學力未だ幼時のナゲれたりといふ評判ほどになし

明林珍何倩顧長卿來在長崎芝山每致詩文乞是正彼各極口褒賞至爲韓柳歐蘇無過於芝山自以爲然江都北海曰林何顧三人孟浪談言固不足論而季明信之自夸毗遂缺精細工夫余酷愛季明慷慨有氣節因深惜下爲三人所誤非過論一

明の林珍・何倩・顧長卿、來つて長崎に在り。芝山毎に詩文を致し是正を乞ふ。彼各々口を極めて褒賞し、韓柳歐蘇も過ぐる無しと爲すに至る。是に於て芝山自らも以て然りと爲す。江都北海曰く、林何顧の三人、孟浪談言、固より論するに足らず。而るに季明之を信じ、自ら夸毗し、遂に精細の工夫を缺く。余酷だ季明が慷慨氣節有るを愛す。因て深く三人の爲に誤らるゝを惜むと。過論に非ず。

● 批評 ● 韓退之・柳宗元・歐陽修・蘇東坡 ● 孟浪はてならぬ、談言はへつらひ ● 芝山 ● 自慢す ● こまかなるに書をなさせ

芝山作山崎閣齋傳大實比閣齋於王

芝山、山崎閣齋の傳を作り、大に貶辭を寓す。且つ附論して閣齋を王荊公に比す。佐藤直方の討論筆記に曰く、頃年一文人一書を著し梓行す。其中に閣齋先生の傳有り。其立文命意、本先生を誹謗するを以て主と爲す。則ち固より直筆信す

荊公佐藤直方討論筆記曰頃年一文人著一書梓行其中有一閣齋先生傳其立文命意本以誹謗先生爲主則固非直筆可信者而言論抑揚之間陽衰陰之輕慢不遜殊非聖書一者之氣象也至於紀事之失其實則初不述曰先生之所以爲先生而徒稱傳聞無稽之言不論先生出處履歷之有故而妄載庸夫昏耄之說嗟呼可鄙矣哉且彼於先生有何怨嫉而詆毀至此耶今亦不暇一一辨其是非明者試取其書一觀則可見彼之爲人之實而知其言之不足爲證矣

可き者に非らず。而して言論抑揚の間、陽衰陰貶、輕慢不遜、殊に聖書を讀む者の氣象に非ず。紀事の其實を失ふに至つては、則ち初より先生の先生たる所以を述べずして、徒に傳聞無稽の言を稱す。先生の出處履歷の故あるを論ぜずして、妄りに庸夫昏耄の說を載す。嗟呼鄙むべきかな。且つ彼の先生に於ける、何の怨嫉ありて詆毀此に至るや。今亦一一其是非を辨するに暇あらず。明者試に其書を取つて一觀せば、則ち彼が人と爲りの實を見、而して其言の以て證と爲すに足らざるを知る可しと。

● ちとせめたる辭 ● 王安石 ● 出版、刊行 ● 文を作るの趣意 ● 抑揚論する間に於て ● 表面にはめて陰にけなす ● 聞きつたへのてならぬ言 ● 俗人々々いばれの説 ● せしり傷く

卷之五

高立岱

高立岱。字子新。一字斗膽。小字新右衛門。號天瀟。又號壽山。肥前人。仕大府。

高立岱、字は子新、一の字は斗膽、小字は新右衛門、天瀟と號す。又壽山とも號す。肥前の人、大府に仕ふ。

天瀟祖高壽。西土人也。父大誦。號一覽。爲長崎者。一覽改爲高。高爲深見。豐高氏出自自瀟海。瀟海倭讀深見。故以稱焉。天瀟與朝鮮聘使李

天瀟の祖高壽覺は、西土の人なり。父大誦は一覽と號し、長崎の譯者なり。一覽、姓高を改稱して深見となす。蓋し高氏は瀟海より出づ。瀟海の倭讀は深見なり。故に以て稱す。天瀟、朝鮮の聘使李東郭に與ふる詩の序に、其歸化の顛末を陳ぶ。乃ち左方に錄す。曰く、東都の高立岱、字は子新、自ら天瀟と號す。本中華の族なり。祖、瀟海の高壽覺は、福建彰郡の人なり。海に航して薩摩州に寓し、後明に歸る。父大誦年十六、祖を跡うて明に入り、祖氏の墟を弔ふ。魯に遊び齊に轉じ燕を踰え趙に跨り、北匈奴の域を經、南東寧の限に

東郭詩序。陳其歸化顛末。乃錄左方曰。東都高立岱。字子新。自號天瀟。本中華族。祖瀟海高壽覺。福建彰郡人。航海薩摩州寓焉。後歸明。父大誦年十六。跡祖入明。甲辰氏之墟。遊魯齊。臨燕。跨趙。北經匈奴之域。南及東寧之限。行嘆天瀟。下文物之盛。歷覽名山大

及ぶ。行々天下文物の盛なるを嘆じ、名山大川の勝を歴覽すると、殆ど十有餘年なり。一日母を慕ふの念歇まず。輒ち商舶に登り直に長崎に到る。時に寛永六年、父歳二十有七なり。僕は即ち長崎の産なり。幼より曼公戴先生といふ者に師事す。先生は浙の杭州西湖の人、明の遺士なり。明亡びて海に航し、長崎に寓すること二十有餘年。僕の親炙するや久し。而して其語言音韻、則ち期せずして頗る解す。今に至るも船首猶ほ南音を操る。但だ愧づ、性を執る迂魯質體脆薄、動もすれば輒ち疾に嬰るを。少にして夙志ありと雖も、意を肆にして業を勤むること能はず。徒に犬馬の年を増すのみ。先生没し、僕自ら度らず、妄に浪を長風に破つて、一たび華域に詣らんとすること數々なり。而も國禁、界を越ゆるを許さず。乃ち退いて中原の輿地圖等を閱して、臥遊を作すに效ひ、聊か復懷を慰す云云と。

● 祖先の住所のあとを訪ふ ● へめぐりみる ● 劇しく教を教く ● しらが頭 ● うまれつき愚かなり

川之勝。殆十有餘年矣。一日暮。母之念不歇。輒登商船。直到長崎。時寬永六年。父歲二十有七。僕即長崎之產也。從幼師。事曼公。戴先生者。先生浙之杭州西湖人。明之遺士也。明亡航海。寓長崎。二十有餘年。僕之親炙也。久而其語言音韻。則不劫而解焉。至今睹首。猶操南音。但愧執性迂魯。實體庸薄。動輒嬰疾。雖少有三尺志。不能肆意動業。徒增天馬之年耳。先生沒。僕不自度。妄欲破浪長風。一詣中華。域上者數。而國禁不許。越界。乃退。閱中原輿地圖等。效作臥遊。聊復慰懷云云。

● 豐實瑣語 ● 愚亦存分 ● 徒につまりぬ年をとるばかり ● 舟に乗りて海を渡る ● 支那の地

天満自幼有現才。其居長崎。學於僧。立。曼公。字。傍。通。醫。術。乃。以。醫。遊。事。薩。州。亡。後。去。復。住。長。崎。以。藝。學。爲。事。久之名。天満幼より現才有り。其の長崎に居るや、僧の獨立(曼公)に學び、傍醫術に通ず。乃ら醫を以て薩州に遊事す。幾も亡く去つて復長崎に住し、藝學を以て事と爲す。久しうして名聲遠邇に馳す。遂に室鳩巢宅觀瀾と同じく大府の召に應じ、江戸に來りて儒員に列す。白石が宅集に、鳩巢、席間、詩を贈つて云ふ、三人同じく召されて高萊を出で、齒徳共に推す當日の魁、良工國を醫するの手を一變して、翻つて成す詞客接天の才、羨む君が簡を授け先達と

聲。隨。遠。邇。遂。與。室。鳩。巢。宅。觀。瀾。同。塵。大。府。之。召。來。江。戶。一。列。儒。員。白。石。宅。集。鳩。巢。席。間。贈。詩。云。三。人。同。召。出。高。萊。齒。徳。共。推。當。日。魁。一。變。良。工。醫。國。手。翻。成。詞。客。接。天。才。羨。君。授。簡。得。先。達。笑。我。論。年。拒。後。杯。嘉。會。由。來。難。得。樽。前。莫。惜。玉。山。頤。

稱するを、笑ふ我が年を論じて後杯を拒ぐを、嘉會由來屢々得難し、樽前惜むなかれ玉山の頤るゝをと。

● 大才 ● 遠近 ● 三名觀瀾 ● 白石の家に於ける集會 ● 上もぎや、鶴草の生きたる田舎より出づ ● 年輪も雖も其の時三人中の第一 ● 嘉會より一變してひろくすべれたる才の文士となる、横は蓋し ● 時に任命を受けて ● このやうな好き會合は障々はなし ● 辨ひ倒る

又兼能書。其法自獨立。而得之。當世與林道榮齊名。白石曰。榮死。予新獨步天下。南海篆隸。歌曰。崎陽於華。只一葦。臨。

又兼ねて書を能くす。其法獨立よりして之を得、當世林道榮と名を齊しうす。白石曰く、榮死して予新天下に獨歩すと。南海が篆隸の歌に曰く、崎陽の華に於ける只だ一葦、臨池の技皆精勤、先に林榮後には高岱有りと。春臺曰く、林道榮は、長崎の舌人なり。高立岱と俱に草書を善くするを以て名を知らる。然れども林は高に及ばず。筆法に變化無きが故なり。但し林は諸體を兼ね。高は草

池之技皆精
勤。先有林榮
後高岱。春臺
曰。林道榮者。
長崎舌人也。
與高玄岱俱以善草書知名。然林不及高。筆法無變化。故也。但林兼諸體。高非草字不能作。此則高不及林處也。人特稱林者。以此也。已。

字に非ざれば作ること能はず。此れ則ち高が林に及ばざる處なり。人特に林を稱するは、此を以てのみと。

●長崎と支那とは海をへだつること僅かの距離 ●晉道にくはし ●刃闘者、通稱

徂徠以泰邁之資。睥睨一世。獨於天澹。嘗欲得其二書。且求與之締交。與香國禪師一會可。見曰。嚮者在坐。視時人高玄岱字。意欲得其二一二幅。而一

徂徠、泰邁の資を以て、一世を睥睨す。獨り天澹に於ける、嘗て其書を得んと欲し、且つ之と交を締ばんと求む。香國禪師に與ふる書に見るべし。曰く、嚮者に坐に在つて、騎人高玄岱の字を觀、意、其二幅を得んと欲す。而るに一時老和尚吾伊が金石の響を作すを食り聽くに奪るゝに縁つて、遂に爲に言ふことを忘る。未だ其人已に還りしや否やを審かにせざるなり。儘し未らざれば則ち敢へて一方便を請ふ。且つ要す爲に賤名を通じ、以て日後鳴謝に使せんを。則ち或は天涯一相識者を添ふる、亦遊道の益廣ならんと。

● 豪氣にしてすぐれたる天性 ● 知らぬ下す ● 讀書の弊弊が金石を鳴らす如く美善なるは隠されて言ふべきことを忘る ● 書を手に入れたる工夫 ● 自分の名前 ● 後日に響を述べる便利 ● 遊道の知り人を頼りて交際を廣くするわけ

時熱下食三粒老和尙吾伊作一金石響之所也。遂爲忘言。未善其人已還否也。儘未則敢請一方便也。且要爲通賤名。以便日後鳴謝。則或添天涯一相識者。亦遊道之益廣也。

鳩巢當世之碩儒也。其文辭亦不爲疎。而推其言以爲定論。答三宅純明書曰。僕平生讀書。稍有所得。及所著文頗多。其欲就誠者正之。前日天澹

鳩巢は當世の碩儒なり。其文辭亦疎と爲さず。而も天澹を推獎し、其言を得て以て定論となす。三宅純明に答ふる書に曰く、僕平生書を讀み稱得る所有り、及び著す所文頗る多甚。識者に就いて之を正さんと欲す。前日天澹兄來訪、言文辭の事に及ぶ。此人能く西土の音に通じ、號して文章家と稱す。乃ち僕の文稿を出し之を視す。天澹兄其中に就いて、一兩篇西音を以て讀むこと一過して曰く、善し。但文辭繁に傷らる。一閑の字を缺くのみと。僕即ち言下に敬服すと。

● 大學者 ● たくさん ● 支那語に導く ● 緊要し過ぐ

兄來訪。言及文辭事。此人能通西土之音。號稱文章家。乃出僕文稿一視之。天濤兄就其中一兩篇以四音一讀。過曰。善。但文辭傷緊。缺一兩字耳。僕即言下敬服。

天濤以享保壬寅八月八日沒。享年七十四。墓在江戶東叡山中。護國院後。其父母及師獨立髮齒。亦盛此地。各有建石。

佐藤直方

佐藤直方。小字五郎左衛門。備後人。

直方年二十一。介永田養一。介山崎齋。齋弟。

佐藤直方、小字は五郎左衛門、備後の人。

直方年二十一、永田養一を介して山崎齋に調す。齋、弟子を教ふること極めて厳なり。直方之に事へて情ならず。遂に能く其旨を得たり。齋が晩年神道を唱ふるに及び、則ち疑なき能はず。是を以て竟に弟子の籍を削らる。直方

子結。直方事之不情。遂能得其旨。及齋。則不能無疑。是以竟削弟子籍。直方又作敬義

内外考論。曰。易文言敬義。内外。此乃以心與身言之。敬義先生以爲身爲内。家國天下爲外。予辨之不止。由是遂得罪於先生。不出入於師門者幾二年。由此觀之。其爲齋所絕者。非推不事神道。

直方無字號。或謂曰。山崎齋。子之師也。淺見綱齋。三宅尙齋。則子之友也。而

又敬義内外考論を作つて曰く、易の文言の敬義内外は、此れ乃ち心と身とを以て之を言ふ。敬義につき先生以爲へらく身を内と爲し、家國天下を外と爲すと。予之を辨じて止まず。是に由つて遂に罪を先生に得、師の門に出入せざる。こと幾ど二年と。此に由つて之を觀れば、其の齋の爲に絶たるゝこと、惟だ神道を奉ぜざるのみに非ず。

● 齋の學說に通ず ● 易經の經名、孔子の作する所と傳ふ。敬を主體的原理とし、義を客體的原理とする説

直方字號無し。或ひと謂つて曰く、山崎齋は、子の師なり。淺見綱齋・三宅尙齋は、則ち子の友なり。而も皆號を以て稱す。子獨り尊稱す可き者無し。知らず何の説ありやと。直方曰く、余邦俗に従ふのみ。此邦古より字號なし。何ぞ必ずしも邦俗に背くことをなさんや。假令余彼の西の邦に之くも、亦名は直

皆以_レ稱_レ子
獨無_レ可_レ稱_レ一
者_レ。伊_レ知_レ有_レ何
說_レ歟。直方曰。
余從_レ邦_レ俗_レ耳。
此邦自_レ古_レ無_レ
字號。何必背_レ
邦俗_レ之爲_レ。假
令余之_レ彼_レ西
之邦。亦以_レ名_レ直方通稱五耶左衛門一居。故雖_レ弟子直稱曰直方先生。稻葉默齋墨水一滴
云。斯文源流。以_レ剛齋爲_レ直方先生號_レ。剛齋。弟子野田德勝號_レ剛齋。一時名_レ軒耳。非_レ自表_レ之號_レ。

嘗曰。博覽強
記能文善書。
莫若_レ宋_レ蘇東
坡_レ焉。然自_レ得_レ
道者_レ而視_レ之。
東坡固_レ不足_レ
論也。故學者

其識見自_レ非_レ
以_レ東_レ坡_レ爲_レ俗
儒_レ。則不_レ得_レ至_レ
聖賢地位_レ矣。
今秋_レ多_レ觀_レ及_レ詩賦文章皆善_レ之者。沒_レ世_レ不_レ能_レ爲_レ眞儒_レ一也。

方通稱五郎左衛門を以て居らんと。故に弟子と雖も直に稱して直方先生と曰ふ。稻葉默齋の墨水一滴に云ふ。斯文源流に、剛齋を以て直方先生の號と爲すは誤れり。弟子野田德勝、剛齋と號すと。(或は云ふ、直方峰、松軒と號すと。此れ蓋し一時軒に名くるのみ。自表の號に非ず)

嘗て曰く、博覽強記、能文善書なること、宋の蘇東坡に若くものなし。然れども道を得る者より之を視れば、東坡固より論するに足らず。故に學者、其識見、東坡を以て俗儒と爲すに非ざるよりは、則ち聖賢の地位に至ることを得ず。今多識及び詩賦文章皆之を善くせんと欲する者は、世を没ふるまで眞儒たるこ

と能はずと。
● 博く見てよく記憶し文章上手に書を善く書く ● 博識なる上に詩賦文章共に上手になる ● まことの學者

故赤穂侯遺
臣殺_レ吉良氏。
明日跡部光
海來_レ謂_レ曰。先
生未_レ聞_レ乎。昨
夜赤穂大石
等四十七士
復讐_レ直方曰。
曾誤_レ矣。遺臣
之於_レ吉良。何有_レ讐_レ視_レ之理_レ乎。遂本_レ諸_レ柳宗元_レ取_レ復讐_レ論_レ爲_レ上_レ者。

初年承_レ父_レ宣_レ
初年父に承けて、結城侯に宣し、俸五十口を受く。元祿癸酉乞うて休致す。後

初年父に承けて、結城侯に宣し、俸五十口を受く。元祿癸酉乞うて休致す。後

結城侯。受二俸五十口。元祿癸酉乞休致。後既橋侯延爲師。年餽二百金。乃處其邸者二十餘年。然以道不合遂辭之。卜居神田紺屋街。時年六十九。

既橋侯延て師となし、年に百金を餽る。乃ち其邸に處ること二十餘年。然れども道合はざるを以て遂に之を辭し、神田紺屋街に卜居す。時に年六十九。

● 父の後をつぐ ● 六年 ● 仕を辭す ● 執る所の道一致せず

享保己亥八月十四日。進講唐津侯。即古河侯之疾暴作。以肩輿昇歸。侯乃賜二入參二兩。令二稻葉迂齋護視。翌日遂不起。享年七十。門人三輪執齋聞病而至。則已易質。乃作二倭歌二哭之。

享保己亥八月十四日、唐津侯（即ち今の古河侯の祖先なり）に進講す。疾暴に作り、肩輿を以て昇き歸る。侯乃ち人參二兩を賜ひ、稻葉迂齋をして護視せしむ。翌日遽に起たず。享年七十。門人三輪執齋、病を聞いて至れば、則ち己に質を易ふ。乃ち倭歌を作つて之を哭す。

● 四年 ● かく ● 君はせしむ ● 死ぬこと、自盡が死に臨み、其歌ける所の質を、身分不相應なりとて取りかへたる故事に出づ

江戸麻布琉璃光寺。其永永處也。一片小碑。正面勒曰。一頁了道居士。左曰。佐藤五郎左衛門直方。右曰。享保己亥八月十五日没。

江戸麻布の琉璃光寺は、其の永永の處なり。一片の小碑、正面勒して曰く、一頁了道居士。左に曰く、佐藤五郎左衛門直方、右に曰く、享保己亥八月十五日没すと。

● いづまでも居る處の意より、埋葬の場所にいふ

三宅尙齋默識錄云。直方先生氣稟宏闊。穎悟。故其學不苦而至。中年學不勤不進。屬續前十四五年。好學之篤。手不

三宅尙齋の默識錄に云ふ、直方先生氣稟宏闊、穎悟なり。故に其學苦まずして至る。中年學勤めず進まず。屬續の前十四五年、好學の篤き、手、卷を釋てず。人と語るに小・近・四子に非ざれば、未だ嘗て口舌に載せず。才の穎なる、辭の敏なる、終日人と學を談じ、譬論百端、殆ど人をして踴躍自得せしむ。實に東方の一人のみ。憾むる所は、其學小學・四子・近思の間に止り、近思錄致知篇に載する所の先賢の語と膾合せざる者多し。其見識の徹、未だ知らず能く精

釋卷。與人語。非小近四子。未嘗載於口。舌。才之穎。辭之敏。終日與人談學。曾論百端。殆教人。賜自得一矣。實東方一人耳。所感者。其學止於小學四子近思之間。不脛合於近思錄。致知篇所載先賢之語。者多。而其見識之微。未知能入三精微否。其談道。所謂隔壁可聞者。庶幾矣。發明其天命本然之妙者。今不存于世焉。

微に入るや否や。其の道を談すること、所謂壁を隔てて聞く可き者に庶幾し。其天命本然の妙を發明する者、今世に存せずと。

- 生れつき度量なく敏なり ● 聰明、人の死せんとする時、呼吸の強弱を見るため、鼻孔に繻(繻)を貼る上りいよ ● 小學、近思錄及び大學、中庸、論語、孟子の四書 ● 才敏く言葉きびしくす ● たとへば色や機や
- 了悟して快に堪へざらしむ ● 東國の第一人者 ● 一致せず ● 見識の微蔵することこまやかなる所まで入るや否や不明 ● 天道自然の本性を發揮す

直方門人。有。著者天神澤一者。筑前人也。才行修美。一時有聲稱。稻葉迂齋作。

直方の門人に、著者大神澤一といふ者あり。筑前の人なり。才行修美、一時聲稱有り。稻葉迂齋之が傳及び祭文を作る。迂齋亦業を直方に受け高足たり。其輯藏錄數卷は、多く直方の語を録す。

- 百人 ● 才能德行りつば ● 高弟 ● 門人 ● 一札の小冊 ● 五箇傳了了日

之傳及祭文。迂齋亦受業直方。爲高足。其輯藏錄數卷。多錄直方語。

淺見安正

淺見安正、初名は順良、小字は重次郎、綱齋と號す。又望楠樓と號す。近江の人。

綱齋少うして山崎闇齋に學ぶ。砥行植節、社中其右に出づる者無し。後闇齋が敬義内外の説に従はず。又神道を喜ばず。是を以て遂に容れられず。闇齋の没後其の師に叛くを悔い、香を炷して罪を謝せりと云ふ。蓋し闇齋神道を倡へ、一時門弟子の皆之に靡くに及んで、堅く舊説を守り、少しも變動せざりし者は、綱齋及び直方。尙齋の數子に過ぎざるのみ。

- 行をみがき節操をかたく立つること社中第一

淺見安正。初名順良。小字重次郎。號望楠樓。又望楠樓。近江人。綱齋少學山崎闇齋。砥行植節。社中無出其右者。後不從闇齋敬義内外説。又不喜神道。是以遺不見容。闇齋没後悔其叛師。炷香謝罪。蓋闇齋倡神道。一時及門弟子皆靡之。而堅守舊説。不遇綱齋及直方尙齋數子。

耳。

初年強學。嗜血。闇齋猶課督不少貸。楨元真者。爲闇齋曰。之子疾口篤。請姑廢業以保齋。闇齋不可。居無幾。疾問矣。闇齋曰。死生命也。奈何使之折其志。

初年強學して嗜血を患ふ。闇齋猶ほ課督少らくも貸さず。楨元真といふ者、爲に闇齋に謂つて曰く、之の子疾日に篤し。請ふ姑く業を廢して以て保齋せしめよと。闇齋可かず。居ること幾もなくして疾問ゆ。闇齋曰く、死生は命なり、奈何ぞ之をして其志を折かしめんと。

● 學問を強強しすぎで血をばく ● 業を課しうながして勉強せしむ ● 養生

闇齋爲人慷慨。每以新委質列侯不爲深。故雖貧其不致。仕門人三宅觀淵。

闇齋人となり慷慨、毎に新に質を列侯に委ぬるを以て潔となさず。故に貧甚だしと雖も、敢て祿仕せず。門人三宅觀淵出でて水府に仕ふ。以爲へらく、其志道を行ふに非すと。即ち書を贈つて之を絶つ。其の靖獻遺言を著す、亦寓意有りと云ふ。

● 潔し異性質 ● 堅となるを不快におもふ ● 水府 ● 質を列侯に委ぬる

出仕水府。以爲其志非行。道。即贈書絶之。其著靖獻遺言。亦有實意云。

闇齋兼て武事を好み、常に騎馬擊劍し、其帶ぶる所の劍鍔には、觀淵が篆する赤心報國の四字を鐫る。

● 劍のつば

闇齋兼好武事。常騎馬擊劍。其所帶劍鍔。鐫觀淵篆赤心報國四字。闇齋少佐藤直方。二歳。初友義甚親。然皆面折直方親喪未除。出仕。以是遂絶交。默識録曰。闇齋先生與直方先生。初

闇齋、佐藤直方より少きこと二歳。初め友義甚だ親し。然るに嘗て直方が親の喪未だ除かざるに出でて仕ふるを面折し、是を以て遂に絶交す。默識録に曰く、闇齋先生、直方先生と、初を其交兄弟の如し。後相通せず。然して義亦言ふ可き者無し。乃ち是れ氣質の一癖、學問の大疵、甚だ惜む可し。直方先生、後來舊交を思ひ、將に通問せんとするの意有り。闇齋先生、終に執つて肯せずと。

其交如兄弟。後不相通。然而義亦無可言者。乃是氣質之一癖。學問之大疵。甚可惜。直方先生。後來思舊交。有將通問之意。綱齋先生。終執而不肯。

● 友誼と同じ ● まのあたり責む ● さうするについてこれに言ひ立つべき程の筋道 ● 氣質上の一つの癖、學問上の大なる缺點 ● 善徳を過する者あり

綱齋以承應元年八月十三日。正徳元年十月朔。卒。享年六十。綱齋無男子。以兄道哲子某爲嗣。門人若林新七能傳其學。

綱齋、承應元年八月十三日を以て生れ、正徳元年十月朔を以て卒す。享年六十、綱齋男子無し。兄道哲の子某を以て嗣となす。門人若林新七能く其學を傳ふ。

森 尚 謙

森尚謙。字利涉。小字龜之助。號龜翁。又號不染居士。

森尚謙、字は利涉、小字は龜之助、假塾と號す。又不染居士と號す。攝津

攝津人。仕水府。

の人。水府に仕ふ。

假塾自少好學。始事福住道祐。繼從松永昌易。二子咸與之。父某以醫仕水井侯。居攝津高槻。比其沒。假塾年二十六。以父遺言去高槻。游于京師。江戶。越七八年。業大進。當是時。水戶義公。廣辟致海內文學士。編修國史。假塾被召赴之。入局與其事。

假塾少より學を好む。始め福住道祐に事へ、繼いで松永昌易に従ふ。二子咸之を異とす。父某醫を以て水井侯に仕へ、攝津高槻に居る。其没する比、假塾年二十六。父の遺言を以て高槻を去り、京師・江戶に游學す。越えて七八年業大に進む。是時に時り、水戶義公、廣く海内文學の士を辟致し、國史を編修す。假塾召されて之に赴き、局に入つて其事に與る。

● 召しかゝよ ● 編修局

假塾多藝能。醫術兵法學。劔皆得其要。至於釋典尤

假塾藝能多し。醫術・兵法・擊劔、皆其要を得、釋典に至つては尤も之を研究す。嘗て護法資治論十卷を著し、謂ふ、儒と佛と並に存して相悖らずと。其友安澹泊痛く之を斥け、數々切規して曰く、速に之を火にして禍を貽

研究之。昔者二
護法安治論
十卷謂儒與
佛並存不相
悖。其友安瀾
泊痛斥之。數
切規曰。速火
之勿貽禍。嚴
熱不從。然與
瀾泊心交終
始不變。及卒
瀾泊記墓云。
與余交最熱。
每相箴規。而今亡矣。夫世之重尊者。毀譽出子愛憎。臧否失于權衡。果孰得而孰失。彼若君者。今不可多得。豈非一代之所難能者邪。

す勿れと。嚴熱從はず。然れども瀾泊と心交終始變せず。卒するに及び瀾泊墓に記して云ふ、余と交最も熱す。毎に相箴規す。今は亡し。夫の世の爲る者、毀譽愛憎に出で、臧否權衡を失す。果して孰か得にして孰か失ならんか。君の若きは、今多く得べ可らず。豈に人の能くし難き所の者を兼ぬるに非ずやと。

● 佛經 ● 安積覺 ● 切にいましめたがす ● 深き交際いつも變らず ● 互にいましめあふ ● 世間の口やかましき衆人 ● 汝はもしり或は變むること、もと一己のすききらひの感情より出て善しとし惡しとすることを争を失ふ ● さんと人のほし難きものを有するものにては難きや

安積覺

安積覺、字は子先、小字は覺兵衛、老圃と號す。又瀾泊齋と號し、晩に又老牛居士と號す。常陸の人。水府に仕ふ。

● 晩年に、老圃に

瀾泊の祖正信、小字は覺兵衛、元和乙卯大坂の役、小笠原秀政に屬して戦功有り。後質を水府に委す。父繼いで其祿を食む。瀾泊亦之を勲ふ。舜水答書に曰く、令祖功を往日に立て、孫子其祿を食む。見る可し善を爲し福を蒙るを。令祖功を他邦に立つ。上公之が爲に其孫を諱す。未だ暗動の此に至るを見ず。汝宜しく之を勉むべしと。

● 元年 ● 水府会を稱す ● ひかしのてがら

安積覺、字子先。小字覺兵衛。號老圃。又號瀾泊齋。晚又號老牛居士。常陸人。仕水府。瀾泊祖正信。小字覺兵衛。元和乙卯大坂之役。屬小笠原秀政。有戦功。後委質於水府。父繼食其祿。瀾泊亦質之。舜水答書曰。令祖立功於往日。而孫子食其祿。可見爲善蒙福也。令祖立功於他邦。而上公爲之諱。其孫未見暗動之至此也。汝宜勉之。

澹泊本稱角兵衛。後才好學。義公以爲其器不減。乃命襲稱。覺兵衛。既而錄履。至香頭。初年十三。始來江戶。師水。居三。該病痘歸。故親受句讀。者。僅孝經小學論語耳。及長博學能文。而史學尤擅。長。乃入彰考館。充日本史編修總裁。全編二百四十六卷。稿以享保庚子脫。前後與者無慮數十百人。而澹泊之功居多。澹泊至老。氣力不衰。其撰烈祖成蹟二十卷。時年七十二云。

澹泊本角兵衛と稱す。俊才にして學を好む。義公以爲へらく其器乃祖に減せずと。乃ち命じて覺兵衛を襲稱せしむ。既にして碌屢々増し、職、番頭に至る。初め年十三、始めて江戸に來り、舜水を師とす。居ること三歳、痘を病んで郷に歸る。故に親しく句讀を受けしは、僅かに孝經・小學・論語のみ。長ずるに及び博學能文にして、史學尤も擅長なり。乃ち彰考館に入り、日本史編修總裁に充つ。全編二百四十六卷。稿、享保庚子を以て脱す。前後與る者無慮數十百人。而して澹泊の功多きに居る。澹泊老に至るも氣力衰へず。其の烈祖成蹟二十卷を撰するや、時に年七十二なりと云ふ。

● 其の器量祖父に負けず ● 天然痘、はうまう ● 「史に三長あり」の句より出づ、即ち歴史を書くには才學の三長を備ふべしとの意、歴代とは即ち三長をほしいままにすの意にて、才學論を備へたるをいふ ● 徳川光圀が大日本史を編する爲に設けたる編輯所の名 ● 五年

澹泊主伊洛學。然不守株膠柱焉。與徂徠金華輩數遇書爲交。答徂徠曰。幼師事朱文恭。徒有其名而無其實。亦如前書所陳也。文恭務爲古學。不甚尊信宋儒。論往在有不合者。載在文集。可徵也。當時童蒙不能知其所謂。古學爲何等事。至今爲德。尊信宋儒。

澹泊、伊洛の學を主とす。然れども守株膠柱せず、徂徠・金華の輩と數々書を通じて交をなす。徂徠に答ふるに曰く、幼にして朱文恭に師事し、徒に其名有りて其實なし。亦前書に陳ぶる所の如し。文恭務めて古學を爲し、甚だ宋儒を尊信せず。議論往々往合せざる者あり。載せて文集に在り。徵す可きなり。當時童蒙其の所謂古學が何等の事たるかを知る能はず。今に至り憾と爲す。宋儒を尊信せしは、乃ち僕中年以後一己の見識のみ、云云。今夏偶々隨筆中に程朱の書を援引するを見、躍然として自ら見る所果して妄ならざるを喜ぶ。清詢を承くるに及び、始めて知る足下中年既に宋儒の陋を覺り、六經復註解を須たざるを。人の知愚相去る天淵此の如し。今頭を改め面を換へ舊習を革め去らんと欲すれば、則ち齒髮日に益々頽落、志氣亦因て衰耗し、我眉・闕苑、望む可くして即く可からず。之を一浩歎に付するのみと。又南郭の書に就いて之を考ふるに、嘗て將に南郭を水府に薦めんとす。又其の通鑑に於ける、涑水の舊本を

乃僕中年以後一已見識耳。云云。今夏偶見隨筆中授引程朱之書。雖然自喜之所見果不妄矣。及承清誨始知足下中年既覺宋儒之陋。六經不復須註解。人之知愚相去天淵如此。今欲改頭換面革去舊習。則齒髮日益頹落。志氣亦因衰耗。峨眉園苑。可望而不可即。付之一浩歎而已。又就南郭書考之。曾將南郭於水府。又其於通鑑。喜深水蓄本。不喜文公綱目。序湖亭涉筆。曰。綱目書法發明。雖論劃切。頗有傷於苛酷。一者。設使其人而聞之。必有辭焉。豈心服哉。

喜び、文公綱目を喜ばず。湖亭涉筆に序して曰く、綱目の書法發明、議論劃切なりと雖も、頗る苛酷に傷るゝ者あり。設し其人に面のあたり之を聞かしめば、必ず辭有らん。豈に心服せんやと。

- 程子の學、伊は程伊川の伊、洛は其生地洛陽の洛 ● 守株は韓非子に於て古人の說を固守すること、もと韓非子の、兔が株につき當り死せるを見、株を守りて兔を待ちし故事より出づ、膠柱は膠柱のきかざること、ことぞ(柱)に比かは(膠)して膠を鼓すといふ故事に出づ ● 朱陸水 ● 其の頃は子侯のこととて古學とは如何なることかを知らず ● 引用、引き用ふ ● 御さとし ● 人の習あると愚なると天淵の隔りあり ● 全然舊習を革む ● 齒や髪が脱げぬ元氣無くなる ● 峨眉は山の名、支那四川省嘉定州にあり、園苑は鳳凰山上にありと傳へらる、仙人のすまひ、共に遠く遊むのみにて行き得ざるたと ● 嘖息してやむのみ ● 司馬遷公の說 ● 朱子の綱目の書き方や意見する所 ● 論議劃切 ● 餘りひと過ぎる

幼時學舜水。能得華音。湖亭涉筆曰。今犬馬之齒將類。而學業不。成。其所存者。稍辨華音一事。由其課程嚴峻。故至今不忘耳。兩伯陽橋窗茶話載。水月淺香覺兵衛。紀州高瀨喜村。二人俱通唐音。覺則能讀而不。會唐話。喜則能講而不能。讀書。正孟子所謂不爲也。非不能也者。蓋用心與否之別也。橋窗茶話安積作。述香非是。烈祖成。

幼時舜水に學び、能く華音を得たり。湖亭涉筆に曰く、今犬馬の齒將に類れんとして、學業成らず。其の存する所は、稍々華者を辨する一事なり。其課程嚴峻にして晨讀夕誦せしに由る。故に今に至つて忘れざるのみと。兩伯陽の橋窗茶話に載す、水月の淺香覺兵衛、紀州の高瀨喜村、二人俱に唐音に通ず。覺は則ち能く讀んで唐話を會せず。喜は則ち能く講じて書を讀むこと能はず。正に孟子の所謂爲ざるなり、能はざるに非ざる者なり。蓋し心を用ふると否との別なり。(橋窗茶話に、「安積を淺香に作る。是に非ず。烈祖成蹟自註に曰く、安積をは諸書に皆淺香に作る。按するに淺香の本貫は近江、安積は陸奥なり。臣が祖先は實に奥州安積郡の人なり。故に臣が父貞吉命を稟けて安積に更む。」)

- 支那書を會得す ● 年齡徒らに老いんとす ● 朝より讀んで夕方に及ぶ ● 兩委芳洲 ● 支那語を解せず ● 本籍地

橋窗茶話安積作。述香非是。烈祖成。

自註曰。安積氏書作通書。按通書本黃近江安積。臣祖先實。與州安積郡人。故臣父貞吉。與命夏。安積。

澹泊名振四方。其修書請益者。不可枚舉。而謙虛自卑。於其親受提辭者。不敢以弟子視之。意謂吾安能足爲人師。其所結構文詩。必示其於衆人。以巧正。有

澹泊、名四方に振ひ、其の書を修め益を請ふ者、枚擧す可からず。而も謙虛自ら卑うし、其親しく提誨を受くる者に於ても、敢へて弟子を以て之を視ず。意謂へらく吾れ安ぞ能く人の師たるに足らんと。其の結構する所の文詩は、必ず薬を衆人に示して以て正を巧ひ、一字の講すべき有れば、輒ち改撰す。是を以て人皆益々敬服す。

● 題ををしよ ● 草詞を多くの人に示して訂正を乞ふ

澹泊甚愛菊。園中多栽之。嘗上三種于守山侯。侯亦

字可巧。輒改撰。是以人皆益敬服焉。

澹泊其愛菊。園中多栽之。嘗上三種于守山侯。侯亦

澹泊甚だ菊を愛し、園中多く之を栽う。嘗て百種を守山侯に上る。侯亦佳品十餘種を賜ふ。田子愛に寄する書に曰く、亡師朱文恭、菊を義公に乞ふの帖あり。載せて遺文外集に在り。覺、百事文恭を學ぶこと能はず。唯此一事の

賜佳品十餘種。寄田子愛。書曰。亡師朱文恭。有乞菊於義公帖。載在遺文外集。覺百事不能學文恭。而唯此一事。稍存餘風。不亦可。差之甚哉。又

み、稍餘風を存す。亦羞づ可きの甚しきものならずや。と。又鳩巢が七十を賀する序に曰く、吾れ百事能はず、唯、菊を養ふことを知る、培植三十年、頗る能く其要領を得たりと、乃ち菊を以て鳩巢に譬へ、以て一篇を成す。鳩巢亦其黃花塲詩の自註に曰く、主人菊の癖有り。凡そ諸家の奇品、旁搜並收して之を栽培せざるなし。種藝尤も精、品第極めて嚴、秋時に至る毎に、五色燦爛として、以て人目を奪ふ。而して安積氏の菊、園中に聞ゆと云ふと。

● 朱辨水の遺風を保存す ● あまねく採して手に入れる ● 栽培術をたくみ ● 品評極めてきびし

序曰。吾百事不能。而唯知養菊。培植三十年。頗能得其要領。乃以菊譬鳩巢。以成一書。鳩巢亦其黃花塲詩自註曰。主人有菊癖。凡諸家奇品。莫不旁搜並收。而栽培之。種藝尤精。品第極嚴。每至秋時。五色燦爛。以奪人目。而安積氏之菊。聞於園中云。

鳩巢、老圃七覽詠の詩有り。七覽とは碧於亭、紅葉欄、蟠藤岡、涼月樹、探蓮步、黃花塲、老蒼園を謂ふなり。又老圃行を作る。曰く、漢家の宗室禮數

鳩巢有老圃七覽詠詩。七覽謂碧於亭。

鳩巢、老圃七覽詠の詩有り。七覽とは碧於亭、紅葉欄、蟠藤岡、涼月樹、探蓮步、黃花塲、老蒼園を謂ふなり。又老圃行を作る。曰く、漢家の宗室禮數

紅藥欄。蟠藤。涼月樹探。蓮步。黃花塢。老蒼園也。又作老圃行。曰。漢家宗室禮。數崇。文武最。推西山公。著書。還笑。雅南。陌。大雅卓爾。河間同。千金。購求。天下籍。始開。史局。籠。英雄。忽。二館。舍。二十載。當。時。宿儒。安積。翁。家學。親承。舜水。傳。餘姚。一派。流。日。東。一。惟昔。國史。草。

崇し、文武最も推す西山公、著書還つて笑ふ淮南の陋、大雅卓爾として河間に同じ、千金購求す天下の籍、始めて史局を開き英雄を籠す、忽ち館舎を捐て二十載、當時の宿儒安積翁、家學親しく承く舜水の傳、除姚一派日東に流る、惟ふ昔國史草創の年、見る君盛壯先づ鞭を著くるを、人は道ふ小心高允に似たりと、邦は慶す良史馬遷を得たるを、材三長を擅にし局を總ふるに堪へ、文百鍊を経て大編を成す、直筆隱す無く鬼應に哭すべく、闕文疑を存して世傳ふ可し、嘉績何ぞ翅三載の考のみならん、華閔已に擢す羣士の先、梁園簡を授け馬卿重く、楚臺體を設く穆生が賢、年徂き事謝し今已みぬ、優恩告を賜ふ舊學士、家居自ら託す老圃の名、花を蔭る園に灌ぐ梅香里、七境趣を分ち迭に品題、三徑荒に就き自ら勸理す、謝眺宅前唯だ青山、杜甫舍邊皆白水、百年消憂琴書を樂み、平生宿好圖史を翫ぶ、借問す從容白玉の堂、何如穩眠烏皮の几、晚節此の如きは人の難しとする所、古來儒官幾か相似た

創年。見君盛。壯先著鞭。人道小心似高。允。邦慶良史。得馬遷材擅。三長。堪。總。局。文。經。百。鍊。成。大編。直筆。無。隱。鬼。應。哭。闕。文。存。疑。世。可。傳。嘉。績。何。翅。三。載。考。の。み。な。ら。ん。華。閔。已。に。擢。す。羣。士。の。先。梁。園。簡。を。授。け。馬。卿。重。く。楚。臺。體。を。設。く。穆。生。が。賢。年。徂。き。事。謝。し。今。已。み。ぬ。優。恩。告。を。賜。ふ。舊。學。士。家。居。自。ら。託。す。老。圃。の。名。花。を。蔭。る。園。に。灌。ぐ。梅。香。里。七。境。趣。を。分。ち。迭。に。品。題。三。徑。荒。に。就。き。自。ら。勸。理。す。謝。眺。宅。前。唯。だ。青。山。杜。甫。舍。邊。皆。白。水。百。年。消。憂。琴。書。を。樂。み。平。生。宿。好。圖。史。を。翫。ぶ。借。問。す。從。容。白。玉。の。堂。何。如。穩。眠。烏。皮。の。几。晚。節。此。の。如。きは。人。の。難。し。と。す。る。所。古。來。儒。官。幾。か。相。似。た

る、我酔うて高歌す老圃行、誰か知る曲曲素履を飲するを、相思ふ何ぞ相見の期無からん、伊の人宛として水の中泄に在り。

● 徳川幕府の宗室を満家に譬へいふ ● 徳川光圀、西山に隱居せるを以て稱す ● 淮南王劉安が淮南子を編せるの、魏公が大日本史編纂に比較せり ● ぬきん出たる貌 ● 河間王歌、漢景帝の子、學を好み古を尚む、多く書卷を集め、儒者を尊ぶ、故に山東の諸儒多く之に従ふといふ、魏公が學者を多く集めたるに比す ● 西山公死去してより二十年 ● 陽明學派、陽明の生地より彼の學派を流江漢と稱す、舜水陽明を崇信せるよりいふ ● 彰考館開かれ大日本史編纂開始されたる當時、澗泊其長たりしよりいふ ● 字は伯華、魏に仕へ太子に經を授く、景治と國史を修め、事に坐して殺されんとしして後赦さる、小心慎密の名あり ● 史記を著したるは司馬遷なり、大日史を編修する任にあたるは澗泊なり、史局遷に比して適任なるを稱す ● 才學顯の三長、即ち澗泊は史を著くに三長具はりて能く之を活用せり ● 忌憚なく事實を書き又は批評して鬼神を泣かしむ ● 立派なる成績は三年に一度の取調のみならず、古は三年に一回官史の治績を勸導して賞賜す ● 立派なる家柄、即ち水戸家に於て澗泊を諸學士の筆頭に擬んづ ● 司馬相如が梁の孝王に從つて樂に遊び、子虛賦を作り、後此賦に依つて漢の武帝にめさる ● 楚の元王が魏生の酒を嗜まざるより、宴會毎に其爲に隨即ち甘酒を設けて厚遇せる故事 ● 主君のてあつき御恩にて休暇を賜ふ ● 上流本文の七賢として擧げたる如く、菊を七所に分ち各別種のものを選ばるるいふ ● 三徑とは蔣元卿といふ隱居者其庭園に三條の徑路をつくりしより出づ、此句は陶淵明の歸去來辭の「三徑荒に草生、松菊猶存す」をひき、澗泊の隱居して菊を愛するに比せり、勸理は園をすく意 ● 謝眺といひ杜甫といふ、皆隱居の境涯に比するなり

詩花瀧國梅香里。七境分趣逸品。三徑就荒自勵理。謝眺宅前唯青山。杜甫舍邊皆白水。百年消夏樂琴書。平生宿好厭圖史。借問從容白玉堂。何如種暇烏皮几。晚節如此人所難。古來儒官幾相似。我醉高歌老圃行。誰知曲曲飲茶烟。相思何無相見期。伊人宛在水中央。

當三磯公之世。史館得人尤盛。及公薨。一時名彦相尋凋喪。澹泊獨存爲世所瞻仰。徂徠書曰。先侯業已卽世。一時羣枚之輩。墜落殆盡。而足下獨以朱先生高第弟子。歸然以存。有如靈光。初澹泊夢

義公の世に當つて、史館人を得る尤も盛なり。公薨するに及び、一時名彦相尋いで凋喪す。澹泊獨り世に瞻仰せらる。徂徠の書に曰く、先侯業に己に世に卽く。一時羣枚の輩、墜落殆ど盡く。而るに足下獨り朱先生高第の弟子を以て、歸然として以て存す。靈光の如き有り。初め澹泊夢に野水月縱横の句を得、義公分つて韻と爲し、近臣と同じく賦す。公、月の字を探り得、雲收まりて月明かに衆星稀なり、仰き見る文苑一輪の月の句有り。此れ卽ち澹泊の前程を言へるなり。是に至つて果して然り。

● 名士つゞぎに稀くなる ● 死す ● 高第・枚乘の徒、共に梁の孝王に従へる學者 ● うらぶれて殆ど絶くなる ● 廻りぬきんでて存す ● 文壇 ● 前途

得野水月縱横句。義公分爲韻。與近臣同賦。公探得月字。有雲收月明衆星稀。仰見文苑一輪月句。此卽言澹泊前程也。至是果然。

源君美

源君美、字是在中、新井氏、小字は勘解由、初名は瑠、白石と號す。又錦屏山人と號す。江戸の人。大府に仕へ、從五位下に叙し、筑後守に任す。

源君美。字在中。新井氏。小字勘解由。初名瑠。白石。又號錦屏山人。江戸人。仕大府。從五位下。任筑後守。白石父正濟。常陸人。年少來江戸。出仕土屋侯。利久。萬千石。延寶己未。除。坂井氏。以明

白石の父正濟は、常陸の人なり。年少江戸に來り、出でて土屋侯(久留利二萬千石、延寶己未國除かる)に仕ふ。母は坂井氏、明曆丁酉二月十日を以て白石を生む。白石生れて岐嶷聰慧、三歳字を寫し、六歳書を誦す。既に長じて器資宏偉、才、經綸を負ふ。其學洽聞多識、倭漢古今の典故に通曉す。述作する所の書、

曆丁酉二月十日生白石。白石生而岐嶷聰慧。三歲寫字。六歲誦書。既長器資宏偉。才具經綸。其學洽聞多識。通曉倭漢古今典故。所遺作之書。世稱其有用。善以國字紀事。是以雖日用簡牘。皆足以傳一矣。又善賦詩。江都北海稱爲所謂錦心繡腸。咳唾成珠。嚙語諧韻者。

世其有用を稱す。善く國字を以て事を紀す。是を以て日用の簡牘と雖も、皆以て傳ふるに足る。又善く詩を賦す。江都北海稱して所謂錦心繡腸、咳唾珠を成し、嚙語韻に諧ふ者と爲す。

- 三年 ● 幼時より人に秀でたること
- 器資宏偉大なり
- 國家經綸の才を有す
- 故事
- 日本文にてしるす
- 手紙
- 錦繡の如き美しき心圖
- 咳唾(せき)してつばが飛びても珠玉となり、うはごと言ひても韻律にかなふ。名詩の言に従つて出て来る形

比七歳。父母拉觀戲劇。一記認置諸胸臆。歸語之。其次序一無所遺。父異之。曰。是兒非常。

七歳の比、父母拉して戲劇を観る。一一記認して諸を胸臆に置く。歸つて之を語るに、其次序一も違ふ所無し。父之を異として曰く、是の兒常にあらず。他日才當に文事に發すべし。新井氏其れ興らんかと。

- 芝居狂言
- 記憶し置く

他日才當於文事發。新井氏其興乎。

初年從父宦于久留利。二十一與父共辭仕。於是貧甚。人或勸之。業醫若教字以取給。白石不從。一期意于經史。時河都瑞軒殷富多藏書。乃就而借覽。瑞軒心知白石神姿。佗日常貴顯。因欲配其女。納以爲壻。而白石不肯。

初年父に従つて久留利に宦す。二十一にして父と共に仕を辭す。是に於て貧甚だし。人或は之に勸む、醫を業とし若しくは字を教へて以て給を取れと。白石從はず。一に意を經史に刻す。時に河都瑞軒、殷富にして多く書を藏す。乃ち就いて借覽す。瑞軒心に白石の神姿佗日常に貴顯たるべきを知り、因つて其女に配し納れて以て壻と爲さんと欲す。白石肯ぜず。

- 仕ふ
- 苦心して經書史書を攻究す
- 富しきかゆ
- すぐれたる風采
- 其の女にめあはず

白石與對馬西山健甫。名。爲舊友。年十六。錄所作

白石對馬の西山健甫(名は順泰)と舊友たり。年十六、作る所の詩一萬首を録し、健甫に因つて韓客に之が評を爲さんことを求む。則ち客請うて接見し、遂に序を作つて之を褒揚す。後木下順菴の門に入る。健甫又之が介を爲す。元祿

詩一萬首。因健市求韓客爲之評。則客詩而接見。遂作序褒揚之。後入木下順菴門。健市又爲之介。元祿戊辰健市没。臨没謂白石曰。以不朽乞先生。

辭久留利後。又遊事類田侯。居十年不得志而去。時

戊辰健市没す。没に臨み白石に謂つて曰く、不朽を以て先生（順菴を指す）に乞ひ、書は則ち君を系さんと。是を以て順菴墓記を作る。錦里文集に載す。今其墓石を見るに、左右後の三面には一字なく、惟正面楷字にて西山順菴墓の五字を題す。所謂墓記之を壙中に埋むるのみ。（健市の墓は、江月下谷養玉院にあり。）

● 朝鮮より來れる客 ● 面會す ● かかだち ● 元年 ● 不朽に後世に遺す文の意にて碑文をいふ ● 墓穴の中

久留利を辭する後、又堀田侯に遊事す。居ること十年志を得ずして去る。時に寶甚だしく、篋中止青錢三百、米三斗のみ。曰く、此れ未だ過かに凍餓せずと。意氣少しも撓まず。順菴以て諸を加賀に薦めんと欲す。岡島仲通、名は好

寶甚。篋中止青錢三百。米三斗而已。曰。此未過凍餓。意氣不少撓。順菴欲以薦諸加賀。岡島仲通。名は好加賀産。亦順菴門子也。聞之戚然語白石曰。予負笈遠遊若二千年子技。比得家書。老母日逼。衰頽。倚閣待予歸。每一念至。百感憤心。如幸賴吾先生先容。得釋褐于本藩。則願足矣。白石即告順菴。以三此言。曰。予求仕何國之

石梁と號すは加賀の産、亦順菴の門子なり。之を聞いて戚然として白石に語つて曰く、予笈を負うて遠く遊ぶこと茲に若干年。比る家書を得るに、老母日に衰頽に逼り、閨に倚つて予が歸るを待つと。一念至る毎に、百感心に攢る。如し幸に吾先生の先容に頼つて、褐を本藩に釋くことを得ば、則ち願足れりと。白石即ち順菴に告ぐるに此言を以てして曰く、予仕を求むる何れの國かこれ擇ばん。請ふ予を捨て彼を薦めよと。順菴嘆じて曰く、世衰へ道微にして、日に儉薄に入る。子の如きは絶えて無くして、儻に有る者と。乃ち岡島を加賀に推し、後二年元祿癸酉、白石を甲斐府に擧ぐ。時に年三十七。

● まづしきこと ● つつちの中に銅錢三百文と米三斗あるのみ ● 加賀の藩田侯に推せんとなす ● うれよる貌 ● 齊の王孫賈の母閨門に倚つて買の鬻るを待ちしより、母が遠遊の兒子を待つ意に用ふ ● 一念これに思ひ及ぶ毎に萬感胸にあつまる ● 前以てのと異なるし ● 褐はいやしき衣服、之を釋くとは服を脱ぎ去る意にて、官職に就くこと ● 既河

擇。附舍予薦。彼。眼。菴。嘆。曰。世。衰。道。微。日。入。三。倫。薄。如。子。絕。無。而。僅。有。者。乃。推。三。國。島。子。加。賀。後。二。年。元。祿。癸。酉。舉。白。石。子。甲。斐。府。時。年。三。十。七。

白石仕六年。文廟尙遭災。爲賜五十金。白石謂都下數有火。今以此賜治屋宇。亦必當一朝灰。洪恩豈可。不別有所用乎。乃以賜金命函人制甲。曹一領。其意欲一旦緩急假以狗節也。居五年果復遭災。家什蕩盡。嗣以其甲曹一隨身得無恙矣。鳩巢文集。有源君美鑑記。是也。

正德辛卯。韓使來聘。白石建議。使使者鑿雅樂奏。

正德辛卯、韓使來聘。白石建議して、使者を鑿するに、申樂を止め雅樂を奏す。

白石仕へて六年、(文廟尙ほ潛邸にあり)災に遭ふ。爲に五十金を賜ふ。白石謂ふ、都下數々火あり。今此賜を以て屋宇を治むるも、亦必ず當に一朝洪恩を灰にすべし。豈に別に用ふる所有らざる可けんやと、乃ち賜金を以て函人に命じ甲曹一領を制す。其意一旦緩急あらば還いて以て節に狗はんと欲するなり。居ること五年、果して復災に遭ひ、家什蕩盡す。獨り其甲曹を以て身に隨へ恙無きを得たり。鳩巢文集に、源君美鑑記有り。是なり。

- 家宣公 ● 甲曹を作る職人 ● 甲曹にて身をかたむ ● 忠節をつくす ● 家の什物盡らず失はる

使來聘。白石建議。使使者止申樂。奏雅樂等。多革舊例。或與使者延論禮法。使者竟被摧折。祇南海賀白石六十七首古詩。有韓之使者執玉帛。血面爭禮頭如石。公歷西階。樞衣升。軒軒如震。擊屋額。腰帶紫。太守印。眼如紫電。髻如戟。按劔叱叱殿柱。翼。使者贈。

る等、多く舊例を革む。或は使者と禮法を廷論し、使者竟に摧折せらる。祇南海が白石の六十を賀する七言古詩に、韓の使者玉帛を執る、血面禮を争つて頑として石の如し。公西階を歴衣を樞けて升れば、軒軒霞の如く屋額に擧る。腰は帯ぶ紫陽太守の印。眼は紫電の如く髻は戟の如し。劔を按じて叱殿柱震ふ。使者膽煉して其魄を喪ふ。擊劔歌成りて血霧を吹き、機鋒觸るゝ處皆辟易す。禮成り樂奏して賓主歡び、王家の寶典日と赫く、の句有り。(南海の自註に云ふ、韓客公に謂つて曰く、嘗て聞く、貴國、擊劔の技に長ずる者多しと。今幸に一觀を得可きやと。公曰く、之を觀ること道に辨ず可からず。吾今客の爲に其涯略を説かんと、席上、擊劔の歌一篇を作以て示すと。

- 元年 ● 歡樂、鐘樂と同じ。樽酒を主とせる言 ● 古昔國樂の傳來して日本化せしもの ● 政廳にて議論す ● 論破せらる ● 祇園南海 ● 面を赤くして禮法を争ふ ● 西の階段より登をかへりて上る ● 輕くあがること道の如し ● 使者禮をのきたましひを消す ● 白石の論鋒に當るもの皆屈す ● 幕府を指す ● 單邊には取對ひがたし

疎衷其魄。擊劔歌成。血吹霧。橫鋒觸處皆辟易。禮成樂奏賓主歡。王家寶典與日林句。兩
自注云。韓客謂公曰。晉聞貴國多長於擊劔之技者。今可每季一觀。公曰。之不可。吾今爲客設其酒。兩上作擊劔歌一節以示。

由與佐久間洞巖書觀之。白石號非有深意也。其少年觀古人美白石黃白石沈白石等號。以爲雅稱。一時題詩稿。遂以爲別號。然爲取之磨而不磷。涅而不緇。或陸奧地名者皆非。

佐久間洞巖に與ふる書に由つて之を觀れば、白石の號、深意有るに非ず。其少年のとき古人美白石・黃白石・沈白石等の號を視て、以て雅稱と爲し、一時詩稿に題し、遂に以て別號と爲す。然るに之を磨して磷せず、涅して緇せず、或は陸奥の地名に取れりと爲すは皆非なり。

●名は義和、仙臺藩の人、勝佐木新に就學す。又新井白石と親しく交る ●好き雨 ●みがきて磨りへらぎ、染めても麗まぎ

入貢琉球人。得白石詩草一冊。遂致之清。

入貢の琉球人、白石詩草を得て歸り、遂に之を清に致す。清の翰林鄭任翰、自ら寫して之が序を作る。此本復琉球を経て日本に至り、終に白石の手に落つ。

清翰林鄭任翰。自爲作之序。此本復琉球を経て日本に至り。終落白石手。白石序藏之。而序中指白石書新塔。此勸塔音相近。蓋誤傳新井勸辨由。而轉稱之也。

白石之を珍藏す。而して序中白石を指して、新塔と書す。此れ誠、塔音相近し。蓋し新井勸辨由を誤り傳へて、之を略稱すと云ふ。

白石詩才亦爲天縱。其精工當世無敵。一時遊戯に出づと雖も、以て其敏警を其敏警者。嘗過茶許。主人書容奇二字。來詩。編綴。筆立就。曾下瓊錦。初試雪。紛

白石詩才亦天縱たり。其精工當世敵なし。一時遊戯に出づと雖も、以て其敏警を見るに足る者有り。嘗て某の許し過る。主人書容の二字を書して詩を索む。輒ち筆を援つて立どころに就る。曾て瓊錦を下して初めて雪を試む、紛紛たる五節舞容閑なり、一痕の明月孝淳の墨、幾片の落花滋賀の由、劍を掲げて膳臣虎跡を尋ね、簾を捲いて清氏龍顔に對す。盆梅剪り盡して能く客留め、憚り得たり隆冬限なきの艱難。蓋し書容は雪の半の閑靜なり。故に此作皆故事を此邦に采る。

紛五節舞容
開一痕明月
茅渚里幾片
落花遊賀山
提劍購臣尋
虎跡捲塵清
氏對龍顏盆
梅剪盡能留
客濟得隆冬無限艱。蓋容奇雪字國譯也。故此作皆采故事於此邦。

● 天性上手 ● 詩のたくみなること當時歌謡し ● 才のまときを見るに足る ● 伊弉諾伊弉聞の二神天の浮瀛に立たし天の種子をもつて抄紙を採りたまひし故事 ● 天武天皇吉野藩の宮に在せし時日暮時を廻じたまひして向ひの山より登立上り真中に神女現れて幸の詞に合せて舞ひ給を舞すこと五度なりしといふ故事に基づき、歷代の大嘗會毎に五節の舞を行はせらる。詞々は舞姫の袖語るさま ● 鳥臣が朝鮮に使して虎に子を奪はれ、腹中に印せる跡を尋ねて虎を殺し、虎子の骨を領す ● 一條香が「書讀師の巻は」とのたまひしに對し、清少納言が其句の續なる「腹をかゝりてある」を擧出し、御座を擧いで西山の雲を舞覽に入れたる故事、此句は白樂天の詩なり ● 鹿田鉢木にとる

白石以經世一
爲任。故雖詩
至五妙。固不
欲以教人。稱
門人者至寡
矣。田鶴樓獨
以詩稱弟子。
白石與之交
誼終始不渝。

白石經世を以て任と爲す。故に詩工妙に至ると雖も、固より以て人を教ふるを欲せず。門人と稱する者至つて寡なし。田鶴樓獨り詩を以て弟子と稱す。白石之と交誼終始渝らず。佐久間洞巖に與ふる書中に云ふ、吾が故人鶴樓に如くはなし。中秋の月三十一年必す借に之を賞せり。今年亦二子を携へ來る。詩あり云ふ、滿堂明月中秋色、歸路清風十里程と。

● 書を經論するを任務とす ● 益田洞巖 ● 交誼することいつも變らず ● 友人、知人

與佐久間洞巖書中云。吾故人英鶴樓如一焉。中秋月三十一年必當賞之。今年亦携二子來。有詩云。滿堂明月中秋色。歸路清風十里程。

嘗謂鶴樓曰。南郭先生名譽甚噪。余欲往一見。者有年。然一旦被簡任。居內班。則不得私造。處士許。彼亦既爲名家。不可引致。以故至今不果。豈不遺恨乎。鶴樓曰。是何難之有。予將爲紹介。明日見之於先生。乃過南郭。語以此言。南郭喜。即與鶴樓共來。白石倒屣迎入。遂定交。

嘗て鶴樓に謂つて曰く、南郭先生名譽甚だ噪し。余往いて一見せんと欲すること年有り。然るに一旦簡任せられて内班に居る。則ち私に處士の許に造ることを得ず。彼亦既に名家なれば引致す可からず。故を以て今に至るも果さず。豈に遺恨ならずやと。鶴樓曰く、是れ何の難きこと之れ有らん。予請ふ、紹介をなし、明日之を先生に見はしめんと、乃ち南郭に過り、語るに此言を以てす。南郭喜んで即ち鶴樓と共に來る。白石倒屣迎へ入れ、遂に交を定む。

● 多年 ● ちらび任ぜられて ● 漁人 ● 呼び來る ● はきものを倒にする道、あわてて迎ふるなり

白石自題有

白石自ら肖像に題する詩に云ふ、蒼顏鐵の如く髮銀の如く、紫石稜稜電人を射

像二詩云。皆顔
如鐵製如鐵。
紫石較殺電
射人。五尺小
身渾是睛。明
時何用畫。賦
時。時。使。初。仕。
類。田。侯。時。寒
友。有。小。瀧。某
者。每。謂。白。石
曰。余。少。時。受。
兵法于由井正雪。今觀三子之面容。政與正雪絕相類。

る、五尺の小身渾て是れ眼、明時何ぞ用ひん麒麟に畫くをと。(時に使を奉じて四
上せり。)初め堀田侯に仕ふる時、寮友に小瀧某といふ者有り。毎に白石に謂つ
て曰く、余少時兵法を由井正雪に受く。今子の面容を觀るに、政に正雪と絶
だ相類すと。
● 喜樂と顔の如く鐵製の如く白し ● 紫石は陸州より出づる紫色の石にて角多し、横は角立てる貌、此
は顔元のすまじきまじき

少有大志
自諷曰大丈夫
夫生不得封侯
侯死當爲國
國賦兩海作
吳詩云生逢

少より大志有り。常に自ら諷して曰く、大丈夫生れて封侯たるを得ずんば、死
して當に國難と爲るべしと。蘇南海哭詩を作つて云ふ、生れて聖世に逢ふ應
に恨無かるべし、死して國難と作る爲すこと有るに足ると。蓋し其平生の
言を記すと云ふ。

聖世無恨。
死作國難足
有爲。蓋記其平生之旨云。

○ 大名 ○ 國體本玉 ○ 諸國神英

高天濤作二白
石像贊二首。
其一曰。誰道
是白石。磯磯
不可磨。誰道
是非白石。磯
不可磨。眉
間大字耳上
一毫。兩目漁
光。磯磯。一機
應變。誰道不
然。神者殿上。
爭得使二髮從
容。數手不碎
頭柱一乎。而乃

高天濤、白石が像の贊二首を作る。其一に曰く、誰か道ふ是れ白石と。磯磯磨す
可からず。誰か道ふ是れ白石に非すと。磯磯磨すべからず。眉間の火字耳上の
一毫。兩目光を流して磯磯。一機變に應じて縱横。然らずんば韓客殿上、爭で
か渠をして從容手を斂め、頭を柱に碎かざらしむるを得んや。乃ち其人
の言に曰く、日出の邦源大官、骨清く氣豪に身桓桓。曾中壯略龍虎視み、
筆下の文章星斗纏る。謂つ可し國家の爪牙萬里折衝の臣と。其二に曰く、
腰下の秋水は端に上より賜はり、身上的水干は攝籙の贈る所。鼻比の上に踞し
て日月の表に傲視す。口津津腹便便、天下の樞機其間に參る。誠を推して物
に及ほし萬人を拯濟す。神化丹青渾て儀表を成す。將に百世を歴て眞宰儼然

其人之言曰。日出之邦源。大官。骨清氣。豪身桓桓。胃中吐略龍虎。聽筆下文章。星斗蟠。可謂國家之爪牙。萬里折衝之巨矣。其二曰。腰下秋水端。從上賜。身上水干。攝錄所贈。服乎卑比之上。傲視日月之表。口津津腹便便。天下樞機。參乎其間。推誠及物。拯濟萬人。神化丹青。潭成儀表。將歷百世。而眞宰儼然。不可奪者歟。

白石無兄弟。唯有姊妹。皆早沒。而集中有到信夫郡。

として奪ふ可からざる者かと。

● 高文俗 ● 磨くも之を薄くすりへち能はず ● がら／＼とまらばす能はず ● 磨の間の火の字の如き筆、耳の上の一本の毛、與に白石の人相 ● 電光の如く閃 ● 磨略が變化に靡じて自由自在 ● 磨かに手を挽き、磨りて磨を柱に研かざらしむ ● 磨客 ● 白石 ● 武勇のさま ● 胸中の磨略は磨虎のひも少かくる、如く壯んに、筆下の文章は星斗の大空に散在する如く見事 ● 爪牙の如く國家を拒ぎ守り、萬里の外邦に便して談判して國を辱しめざる臣 ● 刀 ● かりぎぬに似たる一種の磨 ● 磨政開白の意、高貴の家柄にいよ ● 磨の肥大なるさま ● 政治上の要磨 ● 神々しき風采精神凡て萬人の手本となる ● 眞實の精神畫像の上にもり／＼と存して百世の後とほも記す可らず

白石兄弟無し。唯姊妹有りしも皆早く没す。而るに集中信夫郡に到つて家兄に奉ずる詩有り。此れ白石未だ生れず、父、某氏の子を養ひて子と爲す。後相馬侯に仕ふ。所謂家兄とは是なり。

奉二家兄一詩。此白石未生。父養二某氏子一爲子。後任二相馬侯一。所謂家兄者是也。

鳩巢文集に白石の墓記并に銘を載す。其志行履略見る可し。淺草の報恩寺に、白石の墓有り。石方僅かに尺餘、正面に新井源公之墓と題し、左側に推筑後守從五位下、諱君美、年六十九、享保十年五月十九日卒の二十四字を記すのみ。

● 志行動と履歷 ● 石方僅かに一尺餘餘

源公之墓。左側推記。就後守從五位下。諱君美。年六十九。享保十年五月十九日卒。二十四字而已。

古今著書之富。莫若白石。焉。併未脱藁者。凡一百六十餘種。今尙存於其家云。

古今著書の富なる、白石に若くはなし。未だ脱藁せざる者を併せて、凡そ一百六十餘種、今尙ほ其家に存すと云ふ。

● 草藁を藪き上ぐ

室直清

室直清。字師禮。又字汝玉。小字新助。鳩巢。又號滄浪。備中人。仕大府。

室直清、字は師禮、又の字は汝玉、小字は新助、鳩巢と號す。又滄浪と號す。備中の人。大府に仕ふ。

鳩巢自幼耽嗜文章。能不知息。年甫十五。出仕。加賀侯。一日侯命。請大學。職理明辨。侯以爲異器。乃令入京師。受中。京師下。順。遂。自。是。學。日。益。精。文。日益進。水門

鳩巢幼より文章に耽嗜し、倦んで息むことを知らず。年甫めて十五、出でて加賀侯に仕ふ。一日侯命じて大學を講せしむ。義理明辨なり。侯以て異器と爲す。乃ち京師に入りて業を木下順菴に受けしむ。是より學日に益々精しく、文日に益々進む。木門原俊傑多し。而も皆鳩巢の爲に席を譲ると云ふ。正徳辛卯、大府の儒員に擧げられ、鳩に信任を得。其の著す所亦少なからず。而して六條演義大意、五倫五常名義は、皆指を奉じて之を撰ぶ。

● たしなまよける ● 室直清白に徹く ● ナされたる人物 ● 元年 ● 將軍の命によりて撰述す

風多俊傑。而皆爲鳩巢。正徳辛卯。舉大府儒員。遂得信任。其所著亦不少。而六條演義大意。五倫五常名義。皆奉旨撰之。

其先は備中英賀郡の人なり。故に其郷貫を擧げ、常に英賀と稱す。又其の加賀に在る時、嘗て廢屋を買つて之に住す。因て扁するに鳩巢を以てし、遂に以て別號と爲す。記有り、文集に見ゆ。

● 故郷、本郷 ● 廢屋を買して居る

因願以鳩巢。遂以爲別號。有記見文集。

羽黒成實。字養齋。近江人。宦于彦根。後致仕。徙加賀。其人學於關齊。有德行。鳩巢嘗嚴書之。

羽黒成實、字は養齋、近江の人なり。彦根に宦し、後致仕して加賀に徙る。此人關齋に學び儒行有り。鳩巢嘗て之に敬事す。其答書に曰く、清幼より學を好み、略古人の遺意を得ること有り、見聞する所の士大夫亦頗る多し。然れども義理に於ては、則ち必ず高明の許可を得以て自ら信す。文辭に於ては則ち

其答書曰。清
自幼好學。有
略得古人遺
意者。所見聞
士大夫亦頗
多。然於義理
則必得高明
之許。可以自
信。於文辭則
必經木翁之
品題。以自足
私心自謂。二
公天下之知
己也。故平生
以今世有二
公爲樂耳。又
答遊佐木齋
書曰。與木翁
一別。道於京
師。見其趣向

必ず木翁の品題を經以て自ら足る。私心自ら謂ふ、二公は天下の知己なり。故に平生今世二公あるを以て樂と爲すのみと。又遊佐木齋に答ふる書に曰く、羽翁と一たび京師に邂逅す。其趣向造詣を見るに、曲學淺識の徒に非ざるなり。既にして翁飲邑に寓處す。相與に優游其議論を上下すること今に十年なり。常に虚を以て往き實にして歸るを得、日に其聞かざる所を聞き、我が惑を解き、我が疑を辨じ、我が善を誘ひ、我が惡を戒む。視て法を取る所有り。畏れて爲ざる所あり。我をして以て放僻邪侈に陷るを免れしむること、翁の力多しと爲す。豈に古人の所謂斯の人なかりせば誰と與に歸せんといふ者かと。又祭文を作つて曰ふ、始め吾れ公を京師に見、尋いで復北陸に來辱す。爾來議論を上下し、往復切悃、忠告善道、一に道義を以て相期す。而して不肖弱質、公に頼つて勉強以て學に進むこと、茲に十有七年云云。嗚呼公や、遂に吾を棄てて死するか。今より以往惑有らば、將に誰か之が爲に辨せんとす

造詣。非曲學
淺識之徒也。
既而翁寓處
飲邑。相與優
游。上下其議
論。二十一年於今
矣。常得二以
往實歸。日聞
其所不聞。解
我之惑。辨我
之疑。誘我之
善。戒我之惡。有
所不視。而取
法。有所不畏。
而不敢爲。使
我免於放僻
邪侈者。翁力
爲多。豈古
人所謂微斯
人。誰與歸者
歟。又作祭文
曰。始吾見公
於京師。尋復
來辱於北陸。
爾來上下三
年。於茲云云。
嗚呼公乎。遂
棄吾而死邪。
自今以往。有
惑將誰爲之
辨。而有過。將
誰爲之規。

る。過在らば、將に誰か之が爲に規さんとするか。之を誓にして相無きに誓ふ。悵悵乎として其れ何にか之んと。
● 尋びつかふ ● 直清、即ち鳩巢 ● 善道を指して呼ぶ ● 木下順遊 ● 批評 ● 羽鳥養濤 ● む
● ぐりあふ ● 志す所と學殖 ● 學問不正に見離遠 ● 自分と同地に書寫す ● 興に往來して議論を戦
はす ● むなしくして往き、みちて歸る、得るところある意 ● 善道を讀んで手本とす ● わがまゝにて
心なげ、よこしまにしてゐる ● 范文正公の岳陽樓記に出づ ● 辱くも御出でになる ● 互ひに往來
して勉勵しあひ、誠意を以て戒め善く導く ● 道徳義理を研ぐを目的とす ● 自分ばかりよき性質 ● 百
人に介添人無きが如し ● 行くべき道に迷ふ、歴記の字句に取る

鳩巢與護苑

鳩巢、護苑の徒と互に相輕んず。金華一日來つて鳩巢を見、其得意の文一篇を出

之徒互相輕。金華一日來見鳩巢。出其得意文一讀。示之。且求刪。鳩巢一過。善。金華強乞。乃削二十字。更益五字。金華不喜而去。至翌日。質諸南郭。南郭不得決焉。又質諸徂徠。徂徠國鳩巢所。改二者上曰。如此而後成文。於是其徒始重鳩巢。

赤穂遺臣一大事。鳩巢獨撰之。紀曰。美人錄。又答鈴木貞齋書。

して之を示す。且つ刪正を求む。鳩巢一過して善と稱す。金華強ひて正を乞ふ。乃ち二十字を削り更に五字を益す。金華喜ばずして去る。翌日に至り諸を南郭に質す。南郭決することを得ず。又諸を徂徠に質す。徂徠、鳩巢が改改する所の者を視て曰く、此の如くにして後文を成すと。是に於て其徒始めて鳩巢を重んず。

● 物徂徠の一説を指す、徂徠の國を國といふ ● 平野金華 ● 刪削を乞ふ ● 削りあらたむ

赤穂遺臣の一大事、鳩巢獨り之を稱贊し、紀して我人録と曰ふ。又鈴木貞齋に答ふる書に曰く、赤穂義士の事、世儒の論に異同あるは、亦其學近裏工夫を缺き、自家惻隱の心を認めざるに由ると。誠に來論論する所の者の如し。敬服すと。

今に至るまで世皆義士を以て之を目するは、蓋し鳩巢より始まる。

● 其の國南手近裏工夫を缺く ● 美人の心事を推しけかりて稱贊する ● 物手近裏工夫を缺き

曰。赤穂義士事。世儒之論有異同者。亦由其學缺近裏工夫。不才自家惻隱之心。誠如來論所論者。敬服。至今世皆以義士目之者。蓋自鳩巢始。

鳩巢墨守朱學。深惡當世好立異義者。答鈴木貞齋書曰。僕嘗者以爲山崎氏之學。專於理一而略於分殊者。知有君臣之大義。不知湯武放伐與君臣之義。

鳩巢朱學を墨守し、深く當世好んで異議を立つる者を惡む。鈴木貞齋に答ふる書に曰く、僕嘗に以爲へらく、山崎氏の學が、理一に專にして分殊に略なるは、君臣の大義あるを知りて、湯武放伐と君臣の義と並び行はれて相悖らざるを知らず。敬義に内外の分有るを知りて、修身以上を以て敬以て内を直くすと爲し、齊家以下を以て義以て外を方にすと爲す可からざるを知らざればなり。此は其大なる者なり。其他見る所多く一理に執定して分殊を察せず。以て神道に流るる所以なり。然れども今にして之を思ふに、其理一なるは義理の一隅を

並行而不中相
 悖。知教義有
 内外之分。不
 知不可不以修
 身以上爲教
 以直内。以齊
 家以下爲中。義
 以方外。此其
 大者也。其他
 所見多執一定
 一理。而不察
 分殊。所以流
 於神道一也。然
 今而思之。其
 理一者守二義
 理之一。剛也。
 於本原一理
 處。所見未微。
 故往往有所
 窒礙。而欲以

守ればなり。本原一理の處に於て、見る所未だ徹せず。故に往往窒礙する所有り。而して其の見る所を以て之を一にせんと欲す。是れ其の分殊に略なる者に於て、理一に暗き故なりと。又高木氏儒學論に題して曰く、古より邪説の道を害するもの多し。然れども其の謔妄蠱惑忌憚する所無きこと、未だ今世の甚だしきが若き者有らず。或は古學と稱する者有り。曰く、大學は孔氏の遺書に非ずと。又曰く、我能く伊洛の淵源を塞ぐと。或は文學に矜る者有り。曰く、道は天に出でずと。又曰く、道は事物當然の理に非らずと。其佗淫辭浮言勝けて數ふ可からず。若し此等の説をして數十年の前に出でしめば、庸人孺子と雖も、亦其妄を知つて、之を非笑せん。今は然らず、世の師儒と稱する者よりして、皆之が爲に動かされ、其説を崇めて之を信ぜざるなし。況や後學晚進の者に於てをや。宜なるかな、其の靡然として趨いて之に歸するや。吾れ是に於て知る、世道の日に下り、人心の日に偏るを。亦悲む可しと。又仲村氏五經策

其所見一之。
 是其略於分
 殊者。暗於理
 一也。又題
 高木氏儒學
 論曰。自古邪
 說之害道多
 矣。然其誕妄
 蠱惑無所忌
 憚。未若若今
 世之甚者。或
 有稱古學者。
 曰。大學非孔
 氏之遺書。又
 曰。我能塞伊
 洛之淵源。或
 有矜文學者。
 曰。道不出於
 天。又曰。道非
 事物當然之

記の序に曰く、奈何せん近世邪説の説競ひ起り、漢・唐を凌駕し、程・朱を詆毀し、一己の私見を以て天下の耳目を誣ひんと欲し、有識の士をして之が爲に憤惋殆ど寢と食とを廢せしむるに至る。嘆するに勝ふ可けんやと。又遊佐木齋に答ふる書に云はく、若し王者起ること有らば、必ず海内の籍を聚め、悉く其叢雜無用の書を取つて、之を火にし、然る後天下の學者に、詔して、専ら體察踐行を務め、空言を事とせず、虛文を抑へ、浮華を剝ぎ、人心を正し、邪説を距がん。是の如きこと數年ならば、則ち天下靡然として正に復歸せんと。

● 開宗の義 ● 根本原理に力を入れて個々の差別的現象に疎し ● 殷の湯王が其主たる夏の桀王を伐ち、周の武王が殷の紂王を伐ちしことは、君臣の義と相反せずして兩立すといふことを知らず ● 教は主體的原理にして教は客體的原理 ● 大學の主眼とする六條目(誠意・正心・修身・齊家・治國・平天下)の中にて正意誠心修身の三條目 ● 齊家・治國・平天下の三條目を以て、外部生活たる行爲を義にて正しくすといふが如き分類法は誤り ● 國とし、野家・治國・平天下の三條目を以て、外部生活たる行爲を義にて正しくすといふが如き分類法は誤り ● 國を治むる ● 運路通ぜず、すぢちちよまがる ● てたらぬにして組織 ● 程朱の學のみなもとを棄ぜしむ ● 一人のみだりにして輕評なる言 ● 凡人や子供 ● 世の中の運能が日に切斷す ● せしむ ● 一人の

理。其佗淫辭。浮言。不可。三。等。數。若。使。此。等。之。說。出。於。數。十。年。之。前。雖。庸。人。孺。子。亦。知。其。妄。而。非。笑。之。今。也。不。然。自。世。之。稱。師。儒。者。皆。爲。之。所。動。莫。不。崇。其。說。而。信。之。視。於。後。學。晚。進。者。乎。宜。乎。其。踴。然。趨。而。歸。之。也。吾。於。是。知。世。道。之。日。下。人。心。之。日。偽。亦。可。悲。矣。又。仲。村。氏。五。經。筆。記。序。曰。奈。何。近。世。邪。誕。之。說。競。起。凌。駕。漢。唐。詆。毀。程。朱。欲。以。一。己。之。私。見。誣。中。天。下。之。耳。目。至。使。有。識。之。士。爲。之。憤。惋。殆。廢。與。食。可。勝。嘆。哉。又。答。遊。佐。木。齋。書。云。若。有。玉。者。起。必。聚。海。內。之。精。悉。取。其。遺。雜。無。用。之。書。而。火。之。然。後。謂。天。下。之。學。者。專。務。禮。祭。議。行。不。事。空。言。抑。虛。文。削。浮。華。正。人。心。距。邪。說。如。是。數。年。則。天。下。靡。然。復。歸。於。正。矣。

鳩巢墓。鳩巢。葬地。于。江。戶。大。塚。筑。波。山。の。後。に。賜。ふ。寺。地。に。非。ざ。る。な。り。是。よ。り。後。官。儒。多。く。葬。地。を。此。に。賜。ふ。鳩。巢。の。墓。に。は。四。面。の。一。小。碑。有。り。前。面。に。唯。鳩。巢。室。先。生。之。墓。の。七。字。を。題。す。る。の。み。

● 小塚川區大塚の鳩巢墓。俗に鳩巢治地と稱す

鳩巢葬地を江戸大塚筑波山の後に賜ふ。寺地に非ざるなり。是より後官儒多く葬地を此に賜ふ。鳩巢の墓には四面の一小碑有り。前面に唯鳩巢室先生之墓の七字を題するのみ。

● 小塚川區大塚の鳩巢墓。俗に鳩巢治地と稱す

三宅重固

三宅重固。小字は儀左衛門、後丹治と更む。尚齋と號す。播磨の人。尚齋の父は重直、人の後と爲りて平出氏を冒す。尚齋幼時其姓に従ひ、鬚髮して醫術を學ぶ。父之を命するなり。年十六にして父を喪ひ、十九にして鬚髮の門に入り、専ら儒學を攻む。是に於て鬚髮を種ゑて始て三宅に復姓す。後江戸に來り、經席を抗して人の師と爲る。遂に辟に阿部侯に應ず。元祿中大君、侯の邸に臨む。尚齋に命じて論語を講ぜしむ。乃ち衣服の賜あり。

● 髮をきり剃す ● 髮をのばす ● 鬚髮剃脱の處を要す

尚齋、間齋に學ぶこと三年。間齋世に即く。乃ち佐藤直方、淺見綱齋の二子に折

齊者三年。間
齊卽世。乃折
衷於佐藤直
方。淺見綱齋
二子。二子以
友誼待之。互
相切劘。遂共得山崎門三傑聲云。

衷す。二子友誼を以て之を待ち、互に相切劘し、遂に共に山崎門三傑の聲を得
と云ふ。

- 死す ● 兩説を合して其中庸をとる意、此れ二子の説を融くを以てかといふ ● 友人として待遇す ●
- 互に切劘琢磨す、互に磨練をみがきあふ ● 評判を得

尙齋就官忠
直務盡其誠。
居十年以言
不行。移疾乞
致仕。不允。猶
數乞不止。以
是得罪。賣永
丁亥。幽囚于
忍。友人三輪
執齋。細井廣

尙齋官に就くや、忠直務めて其誠を盡す。居ること十年、言行はれざるを以
て、疾に移して致仕を乞ふ。允されず。猶ほ數々乞うて止まず。是を以て罪を
得、賣永丁亥、忍に幽囚せらる。友人三輪執齋、細井廣澤等、之を憫み、爲に有
を請うて、得る能はず。越えて三年、赦に會つて放たる。是に於て去つて京師に
之き、儒を以て業と爲す。晩に私に大小學校に倣ひ、培根、達支の兩堂を勸解
由坊に建つ。尙齋氣象豪爽なり。其の圍圖にあるや、危難窘迫の際、之に處し

澤等。謂之爲
請宥。而不能
得。越三年。會
故而放。於是
去之京師。以
備爲業。晚私
倣大小學校。
建培根達支
兩堂于勸解
由坊。尙齋氣
象豪爽。其在
圍圖也。危難
窘迫之際。處
之裕如。乃謂
古人被利尙
能著書。吾寧
無爲而待
斃。然筆墨不
可得。因刺臂
血書張遼錄
三卷。其中祭
祀來格說一
卷。門人山宮
仲淵上梓。近
時吾友山田
思叔。再校之。

て裕如たり。乃ち謂ふ、古人刑せられて尙ほ能く書を著す。吾れ寧んぞ無爲
にして斃るゝを待たんと。然れども筆墨得可からず。因つて臂を刺して張遼錄
三卷を血書す。其中祭祀來格說一卷は、門人山宮仲淵上梓し、近時吾友山田思
叔、再び之を校刻す。

- 病氣にかこつて辭職を乞ふ ● 四年 ● 名は知眞、京都嵯峨の人、備前吉保に仕へ、備前府の費用に遣ふ
- 町名 ● 圍圖 ● ましせまれる場合 ● ャつたりとする ● 何もせずして死す

尙齋在獄。侯
嘗遣人察之。
尙齋卽作詩
示之云。富貴
壽夭不二心。

尙齋獄に在り。侯嘗て人をして之を察せしむ。尙齋卽ち詩を作り之に示して云
く、富貴壽夭、心を二にせず、但面前に向つて誠心を養ふ、四十餘年何事をか
學びし、笑つて獄中に坐す鐵石の心と。

- 財寶も位貴く長いし早死するが如きことにて志を曲げず

但向二面前養誠心。四十餘年學三何事。笑坐三獄中。鐵石心。

尙齋削籍之後。講業于京師。摺紳列侯從遊甚多。士佐侯請爲師。乃招來江戶。居僅半莽。其大夫山内矩重卒。此人尙齋之知己也。於是辭歸京。晚年復來江戶時。舊君阿部侯延而見之。道往事。嘆其忠直。

尙齋削籍の後、業を京師に講ず。摺紳列侯の從遊甚だ多し。土佐侯請うて師となす。乃ち招かれて江戸に来る。居ると僅かに半莽にして、其大夫山内矩重卒す。此人は尙齋の知己なり。是に於て辭して京に歸る。晩年復江戸に来る。時に舊君阿部侯延いて之を見、往事を道ひて其忠直を嘆す。

● 兎も、官位を同き ● 甲午

尙齋與直方交義素善。而議論未必圓。每曰。直方四十六士論。使人消滅至誠惻怛之心。

尙齋、直方と交義素より善し。而して議論は未だ必ずしも同じからず。毎に曰く、直方の四十六士論は、人をして至誠惻怛の心を消滅せしむと。

● まごころあつて痛み苦しむ

尙齋固守三宅說。深疾其已者。而與三宅石菴。三輪執齋。玉木葦齋。相友者。唯其舊交不忍絶云。石菴信三陸象山。執齋喜三王陽明。葦齋幸三神道。石菴執齋爲其所論刺。尙且每稱尙齋爲温厚長者。

尙齋固く朱説を守り、深く己に異なる者を疾む。而るに三宅石菴・三輪執齋・玉木葦齋と相友たるは、唯其舊交絶つに忍びざればなりといふ。石菴は陸象山を信じ、執齋は王陽明を喜び、葦齋は神道を奉ず。石菴・執齋其の爲に論刺せらるゝも、尙ほ且つ毎に尙齋を稱して温厚の長者と爲す。

● 論刺をせらる

有一狐爲野狐。其所斃。其邑正幸助者爲尙齋姪。尙齋責之曰。若何不爲爾國。之狐盡殺之。於是幸助即

一狐、野狐の爲に斃さるゝ有り。其邑正幸助といふは尙齋の姪たり。尙齋之を責めて曰く、若何ぞ爲に閩郷の狐を驅つて盡く之を殺さざると。是に於て幸助即ち弓弩雜緒を備へ、詰朝將に丁壯を率ゐる。遍く叢窟を探らんとす。而るに其半夜窓外に呼ぶを聞く。曰く、惡狐既に河上に斃ると。即ち人をして之を見しむるに、果して死狐あり。蓋し衆狐摺撃して之を斃し、以て其冤を免る

備弓弩羅絡。詰朝將率二丁壯遍探叢窟。而其午夜聞窓外呼曰。惡狐既斃三河上。即遣人見之。果有死狐。豎衆狐拮擊斃之。以免其冤也。尙齋乃令屠者割其皮。常坐其上。時鞭之曰。毛獸奈何害萬物之靈。

るなり。尙齋乃ち屠者をして其皮を剝がしめ、常に其上に坐し、時々之を鞭つて曰く、毛獸奈何ぞ萬物の靈を害すると。

- 一人の老翁 ● 村長 ● 全短、全材 ● 弓弩は弓、羅絡は網 ● 若者を引きつれて狐の穴を探る ● 多くの狐が打ち殺す ● 狐多

尙齋没後。門人久米訂齋。多田東溪。石王塞軒等。相議曰。先師不幸無後。吾輩難下遺業。授生徒不能保三世如今日也。

尙齋の没後、門人久米訂齋・多田東溪・石王塞軒等、相議して曰く、先師不幸にして後無し。吾輩遺業を講じ生徒に授くと雖も、世々今日の如きを保すること能はず。師の神主及び狼靈録は、之を瘞めて他日人の爲に汚さるゝこと無きに若かずと。留守退藏亦其座に列す。獨り以て是とせず。然るに衆議遂に決し、乃ち新黒谷光明寺なる尙齋の墓側に瘞む。明日寺僧遽て來り報じて曰く、昨夜盜有り、墓を發く。納適見て之を尤むれば、則ち劍を抜いて恐喝す。納辟易し、

師之神主及狼靈錄。不若瘞之無他。日爲人所汚也。留守退藏亦列其座。獨不以爲是。然衆議遂決。乃瘞新黒谷光明寺尙齋墓側。明日寺僧遽來報曰。昨夜有盜發墓。納適見而尤之。則拔劍恐喝。納辟易。彼遂恣其意而去。不知墓中有何財貨。致此厄乎。訂齋感頌曰。吁此必留守退藏所爲也。即往視之。則果失神主狼靈錄。

彼遂に其意を恣にして去る。知らず墓中何の財貨有りて此厄を致すかをと。訂齋頌を感めて曰く、吁此れ必ず留守退藏の爲す所ならんと、即ち往いて之を視れば、則ち果して神主・狼靈録を失へり。

- 位牌 ● 僧侶の自願 ● 墓上存分に目的を果して去る ● かばをしかめる

尙齋娶田代氏。一男三女。男重德。字一平。英敏好學。年三十一卒。女其一適門人久米訂齋。訂齋又以經藝一名。

尙齋田代氏を娶り、一男三女を擧ぐ。男重德、字は一平、英敏にして學を好む。年三十一にして先つて卒す。女、其一是門人久米訂齋に適く。訂齋又經藝を以て名あり。

- 經藝六名

尙齋娶田代氏。一男三女。男重德。字一平。英敏好學。年三十一卒。女其一適門人久米訂齋。訂齋又以經藝一名。

三宅正名。字實父。號石菴。又號萬年。平安人。石菴少耽學。不嗣家道。由是產遂蕩盡。乃斥賣家什。以償舊債。則所餘僅數金耳。弟觀瀾曰。今雖貧極。短褐蔬食。可以支數年。讀聖之志愈厚。環堵之室。對几而講習。共至忘饑食。亡

三宅正名

三宅正名、字は實父、石菴と號し、又萬年と號す。平安の人。石菴少うして學に耽り家道を視ず。是に由つて產遂に蕩盡す。乃ち家什を斥賣し、以て舊債を償ふ。則ち餘す所僅かに數金のみ。弟觀瀾に請つて曰く、今貧極ると雖も、短褐蔬食、以て數年を支ふ可しと。觀瀾の志愈々厚く、環堵の室、几に對して講習し、共に寢食を忘るゝに至る。何も亡く窮亦極る。是に於て兄弟相携へて江戸に來り、教授して給を取る。居ること數年にして、石菴獨り京師に歸る。尋いで大坂に至る。時に名翹然として起り、弟子雲集す。中井覺菴等、相謀りて、諸を官に請ひ、庠校を建て、懷德堂と名づく。衆皆石菴を推して之に主たらしむ。固辭して可かず。遂に祭酒の事を領す。後中井氏之を嗣ぎ、今に至つて衰へず。

- 家業を事とせず ● 家財道具を賣却して舊き負債を拂ふ ● 短き粗衣、なつば等の細く粗食 ● 熱心
- 方々一堵なる家の寂、映き家をいよ、一堵は五板、一板は方一丈なり ● 書を讀じて生活をつたつ ● 高
- 抽出たる説 ● 名は觀之、細州國野の人、大坂に住す ● 學校 ● 校長、觀瀾の長上弟

何窮亦極矣。於是兄弟相携來江戸。教授取給。居數年。石菴獨歸京師。尋至大坂。時名翹然起。弟子雲集。中井覺菴等。相謀請諸官。建庠校。名懷德堂。衆皆推石菴主之。固辭不可。遂領祭酒事。後中井氏嗣之。至今不衰。

石菴工書。頗得顏法。隻字人爭求之。而資質朴素。其所書未嘗款印。又通倭歌及俳諧。

香川太冲曰。世呼石菴爲鶴學問。此謂其首朱子。尾陽明。而聲似

石菴書を工にし、頗る顏法を得。隻字も人争つて之を求む。而も資質朴素にして、其の書する所未だ嘗て款印せず。又倭歌及び俳諧に通ず。

香川太冲曰く、世石菴を呼んで鶴學問と爲す。此れ其首は朱子、尾は陽明にして、聲仁齋に似たるを謂ふなり。

- 學問の精敏なるをいふ

仁齋也。
 三宅緝明。字用晦。小字九十郎。號觀瀾。石菴弟。平安人。仕大府。觀瀾始師淺見綱齋。末從木下順菴。嘗作拜楠子墓文。鶴飼金平石菴。采上水戶義公。公見感稱。乃召爲國史編修總裁。正徳壬辰年三十八。因白石蘆。逢大

三宅緝明

三宅緝明、字是用晦、小字は九十郎、觀瀾と號す。石菴の弟。平安の人。大府に仕ふ。

觀瀾始め淺見綱齋を師とし、末に木下順菴に従ふ。嘗て楠子の墓を拜する文を作る。鶴飼金平(名は眞昌)采て水戸義公に上る。公見て感稱し、乃ち召して國史編修總裁と爲す。正徳壬辰年三十八、白石の蘆に因て、大府の登用に逢ふ。梁蛭巖が祭文に曰く、文章典雅、責るに藻火黼黻を以てし、楠子の碑陰に書す。少時の作に出づと雖も、既に以て養ふところの深粹、志氣精采の鬱浮を見るに足れり。宜なるかな番く水府に譽有りて、史筆の冕鉞を司るや。館僚安積・栗山の二子、材識ありて博物なるも、且つ尙ほ退舍して英華を擅に發せしむと。

● 號は練瀾、水戸藩の備官 ● 二年 ● 徳川幕府 ● 梁田蛭巖 ● 藻火は文詞のあやまるもの、黼黻共にかざりある禮服の名、此處にては文章に美しきあやまるを形容せる也 ● 平素の修養の深きと元氣のちちたるをを見る ● 水戸に評判高し ● 梁と并崎、編修總裁となりしをいふ ● 安積澗泊・栗山潛峰 ● 觀瀾に一步譲りて才れたる才補を十分に發揮せしむ

府登用。梁蛭巖祭文曰。文章典雅。實以藻火黼黻。書楠子碑陰。雖出於少時之作。既足以見所養之深粹。而志氣精采之鬱浮一矣。宜乎蚤有譽于水府。而司史筆之冕鉞也。館僚安積栗山二子。有材識而博物。且尙退舍使英華擅發焉。

正徳辛卯韓使來聘。儒者就其館中爲唱酬者甚多。七家唱和集蓋爲之最。而多以詩不以文。其間有文亦皆平平耳。詩如高玄岱三百九十韻。

正徳辛卯韓使來聘す。儒者の其館中に就いて唱酬を爲す者甚だ多し。七家唱和集は蓋し之が最たり。而して多く詩を以てし文を以てせず。其間文有るも亦皆平平なるのみ。詩には高玄岱の三百九十韻、室鳩巢の二百二十韻、祇南海の百五十韻の如き、大作才料有りと雖も、要は無益の長語のみ。何ぞ必ずしも自ら誇張するに足らん。獨り觀瀾輩を出でて専ら經義を論議し、古今を商榷す。此に撮録して、以て其言の辨博にして力あるを見さん。嚴書記を送る序に曰く、明に至り薛文清・丘文莊有り。其精神輝光、以て一時を鼓振し、百世を

室鳩巢二百二十韻。祇南海百五十韻。雖大作有二十韻。要無益長語。何必足自夸。獨觀淵田。專論二韻。經義。商榷古今。操錄於此。以見其言辨博。有以力。送二嚴書記。序曰。至明有薛文清。丘文莊。雖其精神輝光。不能以鼓一。時。潤。化。百。世。而。之。卓。守。之。約。信。之。厚。

潤化する能はずと雖も、而も識の卓、守の約、信の厚、由の正、一に皆淵源する所有り。夫の佔畢訓詁の末を事として、簡捷虛誕の域に淪む者と併しからず。蓋し萬にして一を得、云々と。明人嘗て貴境の文を論ずる者有り。其意居然として中夏文明を以て自ら處り、隨つて其學と爲す所を訂するに及んでは、則ち釋を尙び老を雜へ、刻意琢句、沾沾として喜んで才子を以て標榜を相爲し、復古聖賢の大法要道の屬して外に在るを知らず。此は華にして夷に變すと謂ひて可なり。而も舉世悵悵として、唯名に之れ狗ひ、景仰慕效置かず。父兄子弟亦皆是を以て督して之に趨る。今にして孔孟程朱再起せば、復將に其言の流弊此に至るを悔い且つ怨むに違あらざらんとす。宜なるかな能く其意其全を體するを知る者、絶えて無くして僅かに有るやと。嚴が復書に曰く、明興り程篁墩・陳白沙・王陽明の諸人ありと雖も、間々駭雜の病有り。亦偏係の失多し。文清の學の、純實無偽博洽多聞なるが如きに至つては、肯へて此を以

由之正。一皆有所淵源。不與夫事佔畢訓詁之末。而論簡捷虛誕之病者。一焉。萬而得一焉。云云。明人嘗有論貴境之文者。其意儼然以中夏文明自處。及三訂其所爲學。則尙釋雜老。刺意琢句。沾沾喜以才子相爲標榜。不復知古聖賢之大法要道。屬而在外矣。

て巨擘と爲すも可ならんか。所謂丘濬は、學を爲す詭異、論を立つる遷誕なり。岳飛を以て未だ必ずしも恢復せずと爲し、秦檜を稱して宋の忠臣と爲す。意見此の如し。其他知る可し。此れ辨せざるを得ざるなり、云々。明人云云の説、誠に一晒に滿たざるなり。我國嚴太師教を設けしより後、國俗一變し、士趨りて正に歸し、我聖朝開闢の後より、尤も大なるあり。文物彬彬洪猷を貴飾し、三尺の童子と雖も、皆王を貴びて霸を賤み、儒を崇めて佛を斥くるを知る。釋を尙び老を雜へ大道を知らずと云はるゝ者は、豈に乖戾の甚だしき者に非ずやと。觀瀾復書して曰く、來簡に云ふ、文清を巨擘と爲すも可ならんかと。此段前後語脈領會を得難し。其の薛氏を以て尙ふ可しと爲さんか、則ち正に鄙意と合せり。以て尙ふに足らずと爲さんか、則ち趣く所大に異なり。宜しく措いて論することなかるべきなり。丘文莊、岳飛を以て未だ必ずしも恢復せずと爲す。是れ時勢に於て各々見る所あり。始より以て道義心術の累

此謂華而變夷可也。而舉世優俚。唯名之狗。景仰慕效不置。父兄子弟亦皆以之。是皆而趨之。今而孔孟程朱再起。復將悔且怨其言之流弊至此。之不遑。宜乎能知其意。體其全者。絕無而僅有也。嚴復嘗曰。明興雖有程董。敬陳白沙。王陽明諸人。間有駁雜之病。亦

と爲さず。況や金兵の強なる、宋に比すれば十倍にして、勝敗の跡、未だ猝かに書生紙上の語を以て断じ易からざるをや。其秦檜を以て宋の忠臣と爲すこと、則ち此老高奇を好み衆論を矯むるの弊然るのみ。然るに夷夏を辨じ、内外を正すは、其終身精力を用ふる所、正に斯に在り。一部の世史、正綱昭然として見る可し。豈に裂冠毀冕金虜に臣と稱するを以て是と爲す者ならんや。特に其造詣の深義、識趣の高卑、固より文清に及ばざる有り。而れども由るところの正しきと信の厚きとは、蓋し亦朱明一代得易き所に非ず。且つ夫の學派を訂して以て先輩を論ずるは、自ら當に體有るべし。乃ち高德偉績王守仁の如きと雖も、苟も門路に於て乖馳する所有らば、則ち義當に之を棄てて顧みざるべし。文莊の學の正の若き、豈に卒然其小疵を摘み其大醇を遺るべけんや。而して衍義の補、學的の編、亦豈に以て詭異謬整と爲して論す可けんや、云云。前文に云ふ所の、明人貴國の文を論ずる者とは、王世貞を指す。語其集に

多偏保之失。而如文清之學。純實無偽。博洽多聞。肯以此爲巨璧。可乎。所謂丘清者。爲學詭異。立論謬。以二岳飛爲未二必恢復。稱二秦檜爲二宋忠臣。意見如此。其佗可知。此不得不辨也。云云。明人云云之說。誠不。滿一晒也。我國自殷太師殷紂之後。國俗一變。士趨

見の。云ふ所の釋を尙び老を糴ふとは、亦以て世貞の學を批す。來簡未だ鄙意を悉さざるに似たり。請ふ更に審かにせられよと。

● 元年 ● 詩を詠みてやりとりす ● 高麗文俗 ● 歐陽海 ● はこりたかぶるに足らず ● 商賈して定む ● とりつまって記す ● 思辨疎博、即ち考索深くして批判嚴正、博く涉りて悉さざるなきをいふ ● 其の精神と徳性の輝きが時代の人心を振ひおこす ● 愚見のすべれたる、推守のつとやかなる儒道の厚き、よりどころの正しき ● 俗學は經義をまこととせずして徒に文字を讀むのみなること、訓詁は字の注釋 ● 國風遂成にしてよりどころなき想像をたくましくしたる言を事とす ● 萬人中の一人 ● もごれる説 ● 傳説をたつとび老莊をまじへ説く ● 苦心して佳句を作る ● 輕薄にも自ら尊んで才子を以て任ず ● 古代の聖賢の大なる法則肝要なる道の他に屬するを知らず ● 狂つて道に迷ふさま ● 仰ぎ慕ひならひて止まず ● 弊害 ● 返書 ● 學問純粹ならぬ弊害あり又一方に偏する缺點あり ● 學問博くゆきわたる ● 明末の忠臣岳飛を以て宋室を恢復せし功績しとす ● 亦性にして他と異なる ● 譯はあやまり、融はもとる ● ねうちだになし ● 我朝の立ちしより以來 ● 制度典章變ねをなはり帝王の大業を粉飾す ● 一笑のる ● 前後の文のすぢみちわかり難し ● 時勢に對する見解の然ちしむるにて其の人の道義心や心のもちかたなどには關係無し ● 奇説を好み多くの人の論に従はずる癖 ● 野蠻人と中國人 ● 中國の冠を破りすてて金の臣と稱するを尤もとせず ● 學城の深きこと論見の高下 ● 由る所の正しきと、併ずる所のあつきと ● 學問の流弊を比較して先輩を評論するには證據をある可からず ● 王、明 ● 學問の路に反す

歸正。自我聖朝開創之後。

尤有大焉。文

物彬彬實飾。洪猷雖三尺童子。皆知貴王而賤霸。學儒而斥佛。尙釋維老不知大道。云者。

豈非乖戾之甚者乎。觀瀾復書曰。來簡云。文清爲巨擘。可乎。此段前後語脈。雖得領會。其

以薛氏爲可尙邪。則正與鄙意合。以爲不足尙邪。則所趣大異。宜讀勿論也。丘文莊以岳

飛爲未必恢復。是於時勢各有所見。始不以爲道義心術之累。況金兵之強。比宋十倍。勝

敗之跡。未詳易以書生紙上語而斷之也。其以秦檜爲宋忠臣。則此老奸高竊。衆論之弊

然耳。然辨夷夏。正內外。其終身精力所用。正在乎斯。一部世史。正綱昭然可見。豈以裂冠

毀冕。釋臣金虜。爲是者邪。特其造詣深。識趣高。卑。固有不及文清。而由之正與信之厚。

蓋亦朱明一代非所易得矣。且夫訂學派。以論先賢。自當有體。雖乃高總。偉績如王守仁。

苟於門路有所乖馳。則當棄之不顧。而若文莊之學之正。豈可卒然摘其小疵。遺其大

醇。而衍義之補。學的之編。亦豈可以爲籠異。謬整而論邪。云云。前文所云。明人論貴國文一

者。指王世貞語。見其集。而所云尙釋維老。亦以批世貞之學。來簡似未悉鄙意。請更被弄。

南聖重人。和

觀瀾所示觀

曰。觀水必觀

瀾。君應取於

● 小なき缺點をとりあげて大なる長所を弄つ、大體は完全なるところを隠蔽せるところ ● 大學衍義補と學

的、共に文莊の著書 ● 御書所未だ自分の言上所の意をつくまざる如し

南聖重人、觀瀾が示す所の顔に和して曰く、水を觀れば必ず瀾を觀る、君應

● 君は此の意を改りて觀とせざるをらん

是非徒汪注波。更歎洋洋美。

觀瀾年不得

書。有書書亦

不。多布于世。

是以到今名

寥寥少聞。然

其學術文章。

當世與有名

士。並稱。物徂

徠。與竹春菴

書。稱數震菴

文。曰。習宋人

之文。焉。觀其

所。結撰。不出

於東瀛。觀瀾

之下。又兩芳

洲。橋窠茶話

曰。觀瀾鳩巢

東涯徂徠何

觀瀾、年壽を得ず。著書有るも亦多く世に布がず。是を以て今に到つて名家と

して聞ゆる少なし。然れども其學術文章、當世有名之士と並稱せらる。物徂

徠が竹春菴に與ふる書に、數震菴の文を稱して曰く、宋人の文に習ふ。其の結撰

する所を觀るに、東涯、觀瀾の下に出でずと。又兩芳洲が橋窠茶話に曰く、觀

瀾、鳩巢、東涯、徂徠は何如。曰く、之の數人たるや、盛名雷轟、何ぞ曹丘生を待た

んやと。又蛻巖が文柄、桂彩巖に賜るに曰く、物徂徠老いたり。弩末稿に入る

こと能はず。天又驟煥圖を奪ふ。左右の手を失へるが如し。室鳩巢醇乎たる

古先生、澹泊自ら守つて關心なし。若觀瀾、橋窠を臺に豎て、堂堂正正の威、殆

ど牛門をして關を塞ぎ敢へて東に馬に飲はざらしむ。不幸星隕つ。嘆するに

勝ふべけんやと。

● 世にてもはやされず ● 竹田定廣、著書と讀み、益新判、觀瀾の傳 ● 結撰結撰する文 ● 兩芳洲

如。曰。之。數。人。也。盛。名。雷。轟。何。待。乎。曹。丘。生。也。又。嵯。巖。文。桐。贈。桂。彩。巖。曰。物。徂。徠。老。矣。每。末。不。能。入。錦。天。又。奪。陳。侯。國。如。失。左。右。手。室。鳩。巢。野。乎。古。先。生。澹。泊。自。守。無。二。心。也。宅。親。調。壑。三。楹。駿。臺。堂。堂。正。正。之。處。殆。使。牛。門。塞。關。不。敢。東。飲。馬。矣。不。幸。星。隕。可。勝。嘆。也。

● 高き評判願るやかまし ● 大町の矢の運動なるも其の末勢は第一致をも通じがたし ● 安東野の遺 ● 安福齋は自己を守つて争ふ心無し ● 三宅親調は一放翁を駿河にたて、文壇に雄視す ● 祖徠の門をいふ 江戸牛込に居住したればなり ● 屏して敢て侮らず

佐藤廣義。小字助平。號周軒。晚號塵也。江戸人。仕巖邸侯。

佐藤廣義

周軒家世以武顯。高祖佐藤信清。小字は新九郎。織田右府に仕へ戦功有り。周軒に至つて始て文を好み、後藤松軒の門に學ぶ。小少より其志節を堅うす。嘗て關侯京に遊ぶ。便道伏水に過り伯母を省す。伯母は田光氏の母たり。

佐藤廣義、小字は助平、周軒と號し、晩に塵也と號す。江戸の人。巖邸侯に仕ふ。

周軒の家世、武を以て顯る。高祖佐藤信清、小字は新九郎、織田右府に仕へ戦功有り。周軒に至つて始て文を好み、後藤松軒の門に學ぶ。小少より其志節を堅うす。嘗て關侯京に遊ぶ。便道伏水に過り伯母を省す。伯母は田光氏の母たり。

功。至。周。軒。始。野。文。學。於。後。藤。松。軒。之。門。小。少。歷。其。志。節。嘗。關。侯。遊。京。便。道。過。伏。水。省。伯。母。伯。母。爲。田。光。氏。母。家。頗。富。喜。周。軒。至。且。感。篤。志。乃。出。金。百。兩。贈。之。曰。若。以。此。爲。學。資。周。軒。辭。不。受。伯。母。曰。勿。我。子。放。蕩。將。傾。產。與。其。濫。費。以。供。燕。樂。寧。與。若。以。充。爲。善。之。用。周。軒。益。辭。曰。一。家。主。人。業。已。如。此。安。可。不。別。有。所。儲。以。備。不。虞。乎。余。一。介。書。生。無。實。因。分。耳。但。大。母。之。惠。其。拜。賜。也。多。矣。遂。不。受。一。金。去。

り。家頗る富む。周軒が至るを喜び、且つ篤志に感じ、乃ち金百兩を出し之に贈つて曰く、若此を以て學資と爲せと。周軒辭して受けず。伯母曰く、勿れ。我子放蕩、寔將に産を傾けんとす。其濫費以て燕樂に供せんより、寧ろ若に與へて以て善を爲すの用に充んと。周軒益々辭して曰く、一家の主人、業に已に此の如し。安んぞ別に儲くる所ありて以て不虞に備へざる可けんや。余は一介の書生なり、貧なきこと固より分なるのみ。但大母の惠、其の賜を辭するや多しと。遂に一金を受けずして去る。

● 史記蓋書若傳に用てたる字句、嗣は草の名、麻痺をまといし朝の義、只粗末を削を一本としてといふ程の意か
● ついでに伏見にまはりて泊舟を訪ふ ● 遊興 ● 不時の用に備ふ ● 財物無きこと身分相應

柳澤公新封侯。廣招名士。乃以秩三百石。聘周軒。周軒不應。蓋以其仕有不苟者也。亡何。因松軒薦。釋褐。小室侯。俸支二十口耳。小室即今嚴郡侯出封也。

周軒爲人嚴毅廉直。初以儒仕。後傳世子。世子動作舉止。悉規以正。世子嘗欲就齊南。鑿一窟。周軒不肯。曰。此易事耳。

柳澤公新に侯に封ぜられ、廣く名士を招く。乃ち秩三百石を以て周軒を聘す。周軒應ぜず。蓋し其仕苟もせざる者あるを以てなり。何も亡く松軒の薦に因て、褐を小室侯に釋く。俸二十口を支ふるのみ。小室は即ち今の嚴郡侯の舊封なり。

● 柳澤吉保 ● 小室侯に官仕す

周軒人と爲り嚴毅廉直なり。初め儒を以て仕へ、後世子に傳たり。世子動作舉止、悉く規するに正を以てす。世子嘗て齊南に就いて一窟を鑿たんと欲す。周軒肯かす曰く、此れ易事のみ。然れども世子たる者は、凡百當に父侯の與ふる所を慎み守るべくして、別に嗜好ある可からず。今世子年少し。安を問ひ膳を視るは則ち勿論、方に且つ學を講じ武を演じ、且夕の暇あらず、而るを乃

然而爲世子者。凡百當慎守父侯所與。而不可別有嗜好。今世子年少。則安親且講學演武。且夕之不暇。而乃肆心于無益。或遊啓土木園池之好。故事雖易。臣不敢奉命。世子悚然曰。卿言是也。請守之。

周軒以六幅輪一輪。世世子少時夜微。行邸內。遙望六幅輪提燈來。輒曰。合怕老來。合怕考來。盡避去。疾走入館。

ち心を無益に馳す。或は遂に土木園池の好を啓くなからんか。故に事易と雖も、臣敢へて命を奉ぜずと。世子悚然として曰く、卿の言是なり。請ふ之を守らんと。

- さびしくいさぎよし ● 若君の守役 ● 齊南の東方 ● 萬事 ● 父母の安否を伺ひ食事自ら視る
- 無益の事に心をかわひする ● 家を建て庭を築く物數寄のもととなる ● もとよりま

周軒六幅輪を以て標識と爲す。世子少時夜邸内を徧行す。遙に六幅輪提燈の來るを望み、輒ち曰く、合怕老來。合怕考來。蓋を避け去らざるやと、疾走して館に入る。

- 車輪の中の放敷状なる輪が六本ある如き形の故 ● こはいちぢいさん

世子立一年。左右少年。聚戲無度。周
 軒屢諫不聽。遂乞辭職。老
 臣白之。侯曰。吾過矣。我
 頑童。遠之者德。此彼所以
 辭也。吾將改過。爾等盍為
 我言之。既而
 侯懲艾脩德。勵精圖治。乃
 大用周軒。擢
 陞老職。增祿
 至三百餘石。
 是時嚴邨之
 政。嚴立紀綱。

世子立つて一年、左右少年を聚め、嬉戲度無し。周軒屢々諫むるも聽かず。遂に
 職を辭せんと乞ふ。老臣之を白す。侯瞿然として曰く、吾れ過てり。吾れ過
 てり。我れ頑童を昵み、耆徳を遠ざく。此れ彼が辭せんと欲する所以なり。
 吾れ將に過を改めんとす。卿等盍ぞ我が爲に之を言はざると。既にして
 侯懲艾徳を脩め、勵精治を圖る。乃ち大に周軒を用ひ、擢でて老職に陞し、
 祿を増して三百餘石に至る。是時嚴邨の政、嚴に紀綱を立て、惇く信義を守り、
 小大の事、必ず衆と之を議す。智者も獨斷にするを得ず、愚者も亦過を寡
 うするを得、是を以て更に姦慝なく、民に盜賊なく、風俗淳樸にして、上下和
 輯す。侯晉みて閣老に拜せられ、一時輿稱あり。實に周軒與つて力ありと云
 ふ。

● びつくり ● 驚かざる老臣 ● 善い改む ● 政治の本本 ● 周軒の功 ● 上下の和輯す ● 世の評判

惇守信義。小大之事。必與衆議之。智者不得獨斷。愚者亦不得寡過。是以吏亡姦慝。民亡盜賊。風俗淳樸。上下和輯。侯晉拜閣老。一時有輿稱。實周軒與有力云。

侯の妾、子を擧ぐ。妾を賀する者、皆其の侯家に母たるの重を以てす。獨り周軒
 内に入り、毅然として色を正して曰く、爾今よりの後、子有るを恃んで以て
 驕肆なるなかれ。侯家の禍福、茲に有り。爾の禍福も亦茲に有りと。坐に在る
 者、悚然として容を改む。

● ひとり、世子 ● わがまま、もごる ● 懼へ上つて

子以驕肆。侯家禍福在茲。爾禍福亦在茲。在坐者悚然改容。

周軒奉渡洛之學。篤信其師說。故頗與閭齊之徒異趣。嘗原本家禮。創本邦祭儀。侯家今尙遵用之云。

周軒渡洛の學を奉じ、篤く其師説を信ず。故に頗る閭齊の徒と趣を異にす。嘗て家禮に原本し、本邦祭儀を創む。侯家今尙ほ之を遵用すと云ふ。

● 周軒の學 ● 本邦祭儀に本づき師の儀式を創す

周軒學主實。用不盡虛文。是以入不知其爲儒。然其所著。有西書小學參考各若干卷。皆藏于家。周軒家至今數世。職祿相襲。曾孫坦。字大道。號一齋。別成一家。今以碩儒見推。蓋皆周軒積善之餘也。

周軒、學實用を主とし、虛文に驚せず。是を以て人其の儒たるを知らず。其著す所、四書、小學參考各若干卷有り。皆家に藏す。周軒の家今に至る數世、職祿相襲ふ。曾孫坦、字は大道、一齋と號す。別に一家を成す。今碩儒を以て推さる。蓋し皆周軒積善の餘なり。

● 佐藤一齋

周軒、學實用を主とし、虛文に驚せず。是を以て人其の儒たるを知らず。其著す所、四書、小學參考各若干卷有り。皆家に藏す。周軒の家今に至る數世、職祿相襲ふ。曾孫坦、字は大道、一齋と號す。別に一家を成す。今碩儒を以て推さる。蓋し皆周軒積善の餘なり。

周軒學主實。用不盡虛文。是以入不知其爲儒。然其所著。有西書小學參考各若干卷。皆藏于家。周軒家至今數世。職祿相襲。曾孫坦。字大道。號一齋。別成一家。今以碩儒見推。蓋皆周軒積善之餘也。

周軒、學實用を主とし、虛文に驚せず。是を以て人其の儒たるを知らず。其著す所、四書、小學參考各若干卷有り。皆家に藏す。周軒の家今に至る數世、職祿相襲ふ。曾孫坦、字は大道、一齋と號す。別に一家を成す。今碩儒を以て推さる。蓋し皆周軒積善の餘なり。

卷之六

物茂卿。名は雙松。避くる所ありて字を以て行はる。莪生氏、小字は穂右衛門。號二菴園。江戸人。仕柳澤侯。

卷之六

物茂卿、名は雙松、避くる所ありて字を以て行はる。莪生氏、小字は穂右衛門、號二菴園とも號す。江戸の人。柳澤侯に仕ふ。

祖徠父方菴。以醫仕於大府。延寶中。坐事竄上總。時徠年幼。從父共往焉。既而文筆隨題。曰。予十四流。落南總。二十

祖徠の父方菴、醫を以て大府に任ふ。延寶中、事に坐して上總に竄せらる。時に祖徠年幼なり。父に従て共に往く。譯文筆隨題言に曰く、予十四にして南總に流落し、二十五にして赦に値つて東都に還る。中間十有三年、日に田父野老と偶處す。尚ほ何ぞ師友の有無を問はん。獨り先大夫の篋中大學諺解一本を藏有するに頼る。實に先大夫仲山府君の手澤なり。予此を護て研究力を用ふる。こと久し。遂に講説を藉らずして遍く羣書に通ずることを得たりと。又都

五值、故遷東都。中間十有三年。日與田父野老偶處。尙何問有無。師友獨賴先大夫。旋中藏。有大學諺解一本。實先大夫仲山府君手澤。予獲此。研究用力之久。遂得不藉講說。一通中華書也。又與郡三近書曰。始自不佞茂。幼讀書海上。張戶。離丁之錯處。雖有疑義。其執從問決焉。迨乎得先生所爲。標註者。以讀之。曰。吁。是惠人哉。由此而觀。其居上總一也。既乏書籍。又無師友。唯其警敏不羣。自幼即有遠志。是以比其還江戶。業殆大成。終至海內仰爲此邦未曾有人。

三近に與ふる書に曰く、始め不佞茂、幼にして書を海上に讀みしより、張戸離丁之れ錯處す。疑義ありと雖も、其れ孰に從つて問決せん。先生の爲る所の諸標註といふを得、以て之を讀むに迫んで、適ち曰く、吁、是れ惠人かなと。此に由つて觀れば、其の上總に居るや、既に書籍に乏しく、又師友無し。唯其警敏不羣、幼より即ち遠志有り。是を以て其の江戶に還る。此業殆ど大成し、海内仰いで此邦未曾有の人と爲すに至る。

● 幕府 ● 流罪に處せらる ● 流離苦痛ナ ● 田舎ものに向ひ居る ● 亡父の書函の中 ● 先大夫は亡祖父、仲山は其舅、府君は亡父の尊稱をこれ此處には祖父に通用す ● 手垢のつきたる書物、即ち生前愛讀の書物 ● 人の購物を聞かずして買ひ取書に送す ● 宇都宮遊庵 ● 不佞、私 ● 上總を斥す ● 張戸はまきの處、離丁は浪夫 ● まじりなまよ ● 固ひ定む ● 才のさとことと被蒙

卷之六

徂徠之在胎也。母稱月夢。遇二歲首。以二松枝。插二門。竊而生。徂徠。故名。雙松。後有所。以。字。行。徂。以。取。之。詩。魯。頌。徂。之。一。說。其。少。時。好。雷。故。自。號。二。蘇。雷。而。上。總。有。二。往。來。里。者。因。改。書。爲。二。徂。徠。字。署。三。河。物。茂。稱。者。其。先。三。河。獲。生。人。物。部。守。屋。後。也。本。集。有。擬。二。家。大。連。

徂徠の胎に在るや、母月を稱へて、歳首に遇ひ松枝を以て門に挿むを夢む。竊めて徂徠を生む。故に雙松と名づく。後避る所有りて字を以て行はる。徂徠の號は、之を詩の魯頌徂徠の松に取る。一説に其少時雷を好むが故に自ら蘇雷と號すと。而るに上總に往來の里といふところ有り。因つて改め書して徂徠の字と爲すと。三河の物茂嶽と署するは、其先三河獲生の人、物部守屋の後なればなり。本集に、家の大連の嶽に擬する文及び守秀緯を送る序に、秀緯は余と同姓にして大連に系る。故に其字を以て氏とすとの言有り。(雙松の字未だ何の諱む所なるかを審にせず。或は曰く、總松君を避くと。或は曰く、徂徠の柳澤侯に仕ふるや、侯、酒井侯と姻たり。酒井侯の先、雅樂助正親は、雙松院と追號す。因て其名を避くと)

● 正月となる ● 新年 ● 詩經魯頌宮室に徂徠の語あり ● 徂徠の祖先 ● 敏達帝に仕へて大連たり、無數の私布に反對し我馬子と號たり、終に改殺せらる ● 守屋秀緯 ● 五代將軍顯吉の幼名 ● 柳澤吉保

徵一文。及送守秀緯一序。秀緯與余同姓系大連。故以其字二氏之言。雙松字未詳。何所自。或曰。祖徠之仕。柳澤侯也。助正親。送。雙松院。因運其名。

初卜居于芝街。時貧居如洗。舌耕殆不給衣食。增上寺前有腐家。徠徠貧而有志。日饋腐查。後至食。月贈米三斗。以報之。春。與兩郎書曰。徠徠先生之未仕也。嘗教授于芝浦。人所和也。後遇柳澤氏之勃。

初め芝街に卜居す。時に貧居洗ふが如く、舌耕殆ど衣食を給せず。増上寺前に腐家あり。徠徠が貧にして志あるを憐み、日に腐查を饋る。後徠を食むに至つて、月に米三斗を贈り以て之に報す。春臺、南郭に與ふる書に曰く、徠徠先生の未だ仕へざるや、嘗て芝浦に教授すること、人の知る所なり。後柳澤氏の勃興して侯に封せらるゝに遇ふや、先生を召して書記を掌らしむ。先生是に於てか始めて褐を侯門に釋く。然れども其祿尚ほ微なり。尋いで柳澤公累りに封を益し、先生も亦公の寵靈を以て、累りに其秩を益し、五百石に至る。命世の才を以て侯家に勤勞有りと雖も、柳澤公の知遇に非ざるよりは、先生の窮達未だ知る可からざるなり。

●芝に居るを定む ● 腐查は酸で生活すること ● 豆屋 ● 豆屋のかす ● 太田春雄、柳澤侯、とも

興封侯。召二先生。二書記。先生於乎始。釋二褐於侯門。然其祿尙微。尋柳澤公累益封。先生亦以二公之寵靈。累益其秩。至五百石。雖以二命世之才。而有力二勞于侯家。自非二柳澤公之知遇。先生之窮達未可知也。

に徠徠の門人 ● 羣人の譽を脱捨つることにて官仕するをいふ ● 曹叢 ● 書名 ● 才編 ● 人物を見ぬき一好くしてかす

初服二朱子説。及二中年。二者。苑隨筆。尙護。宋儒。後挺然。立二一家。見。痛。駁二性理。併政二仁齋。又傲二明。李于麟。修二古文辭。先儒所。作一切排之。爲二不。免。侏。僂。賦。舌。其。豪。邁。卓。識。雄。文。宏。

初め朱子の説に服し、中年に及び護苑隨筆を著し、尙ほ宋儒を護る。後挺然一家の見を立て、痛く性理を駁し、併せて仁齋を攻む。又明の李于麟に倣ひ、古文辭を修む。先儒の作る所は一切之を排して、侏僂賦舌を免れずと爲す。其豪邁卓識、雄文宏詞、一世を籠蓋す。梁田蛻巖の如き心亦徠徠の學博に服す。嘗て山脇東洋を稱する言に曰く、凡そ海内の司命、古を信するを知ると不ざると、皆靡然として目を注がざるはなし。蓋し亦方伎中の叢老なるかなと。

● ぬきんでて一家の見識をたつ ● 宋儒の生命運氣の學 ● 明の李于麟、字は子麟、號は汝泉、王世貞ととも

詞。龍蓋一世。如梁田岷。心亦服。祖。之學博。嘗得。山。臨東洋。言曰。凡海內司命。知信古與不。皆靡然莫不注目。蓋亦方伎中之。老哉。

古文辭を讀ふ ● 漢唐及び其れ以前の文藝 ● 外國人などの言語の聞きとり難き形容、文の雅馴ならざるを嘲りていふ ● 文章すぐる ● 一世をまはす ● 星の名、書を主るより國家の義にいふ ● 國家の中にての祖傳

少時精習兵學。故其就仕途一也。亦以兵學。不必以儒。晚復專談武。與熊本。鹿鹿。鹿初相見。時。祖。法行伍。此。不可不究也。子。西海人。必習。水軍。其以何爲策。

少時兵學を精習す。故に其仕途に就くや、亦兵學を以てし、必ずしも儒を以てせず。晚に復専ら武を談す。熊本の數震庵と初めて相見る。時に祖徠首に謂つて曰く、陣法行伍、此れ究めざる可からず。子は西海の人、必ずや水軍に習はん。水軍は其れ何を以て策の上と爲すやと、遂に數刻戰法を談じ、他事に及ばずと云ふ。松宮觀山の學論に曰く、近日儒士の武を談する、徠徠物子一人のみ。亦唯博覽の餘力、臆斷自負す。不世豪傑の資を以てすと雖も、然れども未だ明師に遇はず。半く法制を執つて軍略を問はず。孔子 謀を好むの言と乖戻す。其著す所の孫子解及び鉛錄は、涉獵殆ど盡せりと雖も、未だ

上邪。遂數刻。談。法。不。及。他。事。云。松。宮。觀。山。學。論。曰。近。日。儒。士。之。談。武。徠。徠。物。子。一。人。而。已。耳。亦。唯。博。覽。之。餘。力。臆。斷。自。負。焉。雖。以。不。世。豪。傑。之。資。然。未。遇。明。師。卒。執。法。制。不。問。軍。略。與。孔。子。好。謀。之。言。乖。戻。焉。其。所。著。孫。子。解。及。鉛。錄。雖。涉。獵。殆。盡。而。未。見。軍。術。磨。練。之。功。遂。以。七。書。爲。空。理。崇。後。世。成。南。塘。鄭。芝。龍。爲。備。也。拘。區。區。小。技。未。知。有。建。國。之。規。模。暨。戰。勢。之。地。形。所。謂。帷。中。決。千。里。之。勝。草。廬。定。三。分。之。謀。之。術。也。不。亦。惜。乎。

● 精しく研究す ● 博く物事を知るついでを以て獨りぢぢの說を立て自ら傳しとなす ● 軍法のみならずはれて實際の謀略を言はず ● そむきもとる ● 廣く軍書をよめる ● ことがちを鍛練した工夫 ● 孫子。 ● 孫子以下の所謂武經七書 ● 國家を鎮定する大計畫 ● 幕府の中記座して遠く戰線の勝を決す。張良を斥す ● 破屋に居て天下を三分する謀を定む。諸葛孔明を斥す

又創造一家象棋。以寓兵機。名廣象棋。

又一家の象棋を創造し、以て兵機を寓す。廣象棋と名づく。其子百八十局。は則ち棋局を用ひて、陣列軍伍、攻撃守備、一として備らざる無し。工極

其子百八十。局則用二棋局。而陣列軍伍。攻擊守備。無一不備焉。可謂工極一矣。嗟。超二軍備二建二大業。又有二何餘力。而及二此等之事也。片山兼山乃序二廣象棋譜二曰。命世之人。雖二執掌拮据之際。曾中別有悠悠。用日月而優爲之信哉。

大岡忠相。博識洽聞無所不知。余將試問以類其答。乃招問曰。世有鼠婚之說。何謂也。徂

まれりと謂ふ可し。嗟。羣儒に超えて大業を建つ。又何の餘力ありて此等の事に及ぶか。片山兼山乃ち廣象棋の譜に序して曰く、命世の人、執掌拮据の際と雖も、曾中別に悠悠たる閑日月ありて優かに之を爲すと。信なるかな。

● 軍陣の無敵を其内に書す ● 巧妙の圖 ● 世に名高き人 ● 職務にたづまはり勉めばむ ● あくせくせず願かなる餘裕時間

大岡忠相(越前守)曰く、聞く、徂徠、博識洽聞知らざる所無しと。余將に試みに問うて以て其答を覆かしめんとすと。乃ち招問して曰く、世に鼠婚の説有り。何の謂ぞやと。徂徠答へて曰く、事某年某人の著す所の一小説に出づと、乃ち其書載する所の鼠類の眷屬名姓、口に矢なつて續續注するが如し。忠相始めて其強記に服す。

徂答曰。事出於某年某人所著一小説也。乃其書所載鼠類之眷屬名姓。矢口續續如注。忠相始服其強記。

弟子會講。韓非子論。出。徂徠在座。籍口不言。春臺不悅。曰。說之不一。先生何不折中。將或不折中。將邪。徂徠屏氣曰。此書余嘗有說。待明日出示之。而其夜始下筆。全篇作之說。

徂徠看書向暮。則出就簾際。簾際亦不

● 博く知りあまねくきく ● 鼠の嫁入り ● 一族名 ● 書載する所の鼠類の眷屬名姓、口に矢なつて續續注するが如し ● 物事をよし

弟子韓非子を會講す。論議鋒出す。徂徠座に在り、口を籍んで言はず。春臺悦ばずして曰く、説の一ならざる、先生何ぞ折中せざる。將或は折中を得ざるかと。徂徠氣を屏げて曰く、此書余嘗て成説有り。將に明日を待つて出して之を示さんとすと。而して其夜始めて筆を下し、全篇之が説を作す。

● 神蹟 ● 願所假く出る ● 素論を折きて定論を下す ● 徂徠も亦鼠類を擬せず ● 物故か比いふ ● まとまりたる説

徂徠書を見て暮に向へば、則ち出でて簾際に就く。簾際亦字を辨す可からざれば、則ち入つて齋中の燈火に對す。故に且より深夜に及び、手、卷を釋くの時

可辨字。則入對。對中燈火。故自且及深夜。手無釋卷之時。其平生惜三分陰者。率此類也。

無し。其平生分陰を惜むこと、率ね此類なり。

●一せんば五 ●一備かの時間

南郭某歲元日訪祖徠。徠孫子。面垢不洗。髮亂不梳。若不知新年者。乃慶聲談。兵不。南郭竟不得視新禧。

南郭某歲元日祖徠を訪ふ。祖徠方に几に隠つて孫子を閲す。面垢洗はず、髮亂れて梳らず。新年を知らざる者の若し。乃ち慶聲兵を談じて置かず。南郭意に新禧を祝するを得ず。

●一勤めて徳をたまふ ●一新年 祝をのぶることを得ず

嘗過東壁時。東壁方携妓來。徠會。徠入。倉皇不知所爲。遂驚

嘗て東壁に過る。時に東壁方に妓を携へ來りて。徠押す。徠の入るに會ふ。倉皇として爲す所を知らず。遂に詭つて曰く、家妹幼にして某侯に宦す。近ごろ暇を賜ひ歸つて家に居ると。徠既に之を覺る。明日使を遣して鮮魚

を致し、以て才子佳人に配するを賀す。

●一安福侯、字は東壁、號は東野、下野の人 ●一なれよぢける ●一あむつる

曰。家妹幼某侯。近臨暇歸。居家。徠既覺之。明日遣使致鮮魚。以賀才子佳人。

元啓能く字を寫すを以て、之を塾中に置き書を寫さしむ。嘗て徠の侍婢と私す。徠之を覺るも、問はず。元啓其覺られしを知るや、遂に出亡す。久しうして徠市を過ぎ、元啓の印肉を行賣するを見る。即ち從者をして將る來らしむ。元啓奔つて店後に匿る。追つて之を索め、復塾中に置き、之を待つこと故の如し。

●一伊藤兩島

寶印肉。即使從者將來。元啓奔匿店後。追索之。復匿塾中。待之如故。

書商小林新兵衛。徠に請うて曰く、小子家號無し。願くは先生命ぜよと。徠笑つて曰く、書賣吾門に出入する者五人あり。而も爾が買ぐ所價最も高

書商小林新兵衛、徠に請うて曰く、小子家號無し。願くは先生命ぜよと。徠笑つて曰く、書賣吾門に出入する者五人あり。而も爾が買ぐ所價最も高

號。顧先生命焉。徂徠笑曰。書買出入吾門者五人。而爾所買價最高。猶嵩山於五嶽。宜名嵩山房。

く、猶ほ嵩山の五嶽に於けるがごとし。宜しく嵩山房と名づくべしと。
● 嵩山・華山・衡山・恒山・嵩山を五嶽とし、嵩山中央に位して最も高し

僧鳳潭通調曰。有二欲質者。請一見。徂徠即延接。鳳潭曰。稱嘗見伊藤仁齋。仁齋言。佛之爲道。空而已。吾釋之教深遠。非三空一字所得。豈不甚乎。先生以爲如何。徂徠擊節

僧鳳潭調を通じて曰く、質さんと欲すること有り。請ふ一見せんと。徂徠即ち延接す。鳳潭曰く、稱嘗て伊藤仁齋に見ゆ。仁齋言ふ、佛の道たる空のみと。吾が釋の教深遠にして、空の一字の得て盡す所に非ず。仁齋の妄誕豈に甚だしからずや。先生以て如何と爲すと。徂徠節を撃て曰く、凡そ仁齋の言、一妄ならずる者無し。然れども獨り其の佛教を指して空と爲すは、妄ならずと謂ふ可しと。鳳潭憮然として曰く、緣なき衆生は渡し難しと、即ち袂を揮つて出づ。此説原田温夫が東岳筆晴に出づ。而るに濶井子章が讀書會意に載する所は是に異なり。知らず其相見ること日を異にして然るか。乃ち又録して以

曰。凡仁齋之言。一一無不妄者。然獨其指佛教爲空。可謂不妄矣。鳳潭憮然曰。無緣衆生難渡。即揮袂而出。此說出原田温夫東岳筆晴。而濶井子章讀書會意所載異於是不。不知其相見異日而然歟。乃又錄以資雅噱。鳳潭造徂徠。諸弟子以爲有魂魄魄悖者。立屏後一窺焉。徂徠設茶酒相歡。終日無作。將出。言曰。今人不知名物。致文字有批纏。是不用三意目前也。徂徠然之。廣斥當時文字。且笑且語。其竟同立南軒之下。舉手指一樹。徂徠未答。鳳潭微笑去。徂徠顧屏後人曰。彼胡魅人。

て雅噱に資す。鳳潭、徂徠に造る。諸弟子以爲へらく魂魄はれ魄悖るゝことあらんと、屏後に立ちて窺ふ。徂徠茶酒を設け相歡び、終日作ふ無し。將に出でんとす。言ひて曰く、今人名物を知らず。文字批纏あるを致す。是れ意を目前に用ひざればなりと。徂徠之を然りとし、廣く當時の文字を斥し、且つ笑ひ且つ語る。其竟に同じく南軒の下に立ち、手を舉げて一樹を指す。徂徠未だ答へず。鳳潭微笑して去る。徂徠屏後の人を顧みて曰く、彼の胡、人を魅すと。

- 塵に遊す ● 稱の自稱 ● てたぢめ ● 腰を打つ ● なげきのたぢ ● も笑ひ草にそなへる ● 物の名稱 ● あやまり ● 彼の遊め人をばかす

徂徠毎自言。熊澤之知。伊藤之行。加之。以我之學。則東海始出一聖人。

徂徠毎に自ら言ふ、熊澤の知、伊藤の行、之に加ふるに我の學を以てすれば、則ち東海始めて一聖人を出す。

或問徂徠曰。先生講學外何好。曰。余無他嗜好。惟嗜啗炒豆而詆毀宇宙間人物而已。

或ひと徂徠に問うて曰く、先生講學の外何をか好むと。曰く、余他の嗜好無し。惟炒豆を嗜んで宇宙間の人物を詆毀するのみと。

徂徠所著之書。字傍不施訓譯。信大典。評過錄載。朝鮮威龍淵曰。貴邦書冊。行

徂徠の著す所の書、字傍に訓譯を施さず。僧大典が萍遇錄に載す、朝鮮の成龍淵曰く、貴邦の書冊、行傍皆譯音有り。此は只一國に行ふ可し、萬國通行の法に非ず。惟物茂卿文集は譯音なし。即ち此一事、茂卿の豪傑の士たるを知る可きなりと。

傍皆有譯音。此只可行於一國。非萬國通行之法也。惟物茂卿文集無譯音。即此一事。可知茂卿之爲豪傑士也。

● 字の傍にのみ假名をつけず

近世鴻匠無如徂徠。後之學者激昂奮勵。竟不能及也。然其瑕瑕得矣。則猶未免焉。是以宇士新論語考。石川麟洲辨道解蔽。五井蘭洲非物。中井竹山非微。服蘇門燃犀。錄等。殆中徂徠膏肓。吾祖

近世の鴻匠徂徠に如くは無し。後の學者激昂奮勵するも、竟に及ぶこと能はず。然れども其瑕瑕得失、則ち猶は未だ免れず。是を以て宇士新論語考、石川麟洲の辨道解蔽、五井蘭洲の非物、中井竹山の非微、服蘇門の燃犀錄等、殆ど徂徠の膏肓に中る。吾が祖の詰物、亦其道を説くこと甚だ誤れるを辨す。此數人は徂徠の益友と謂ふも可なり。佗の作書たる、巧詆以て勝を求むる者、勝けて數ふ可からず。要は徒らに口業を滋くするのみ。徂徠を病へしむるに足らず。

● 大學者 ● 談話及び一得一失 ● 宇野士新 ● 書は脚の下部、青は其上部、共に編に習さるれば治し難き部分なり、轉じて他所、談話、改め難き談話の意に用ふ ● 本書の作者服蘇の祖父 ● うまく非難して勝たんと欲す ● わだ口をたたくのみ

詰物。亦辨其說。道甚誤。此數人謂徂徠之益友可也。佗作書。巧詆以求勝者。不可勝數。要徒滋口業。不足病徂徠。

徂徠病中囁

然歎曰。吾下世後。遺文必將行。然海內無實知我。知我者惟有東涯耳。

徂徠沒爲享

保戊申正月十九日。是日天大雪。臨終謂人曰。海內第一流人物。茂卿將隕命。天爲使此世界銀。

徂徠沒爲享

保戊申正月十九日。是日天大雪。臨終謂人曰。海內第一流人物。茂卿將隕命。天爲使此世界銀。

徂徠沒爲享

保戊申正月十九日。是日天大雪。臨終謂人曰。海內第一流人物。茂卿將隕命。天爲使此世界銀。

徂徠沒爲享

保戊申正月十九日。是日天大雪。臨終謂人曰。海內第一流人物。茂卿將隕命。天爲使此世界銀。

徂徠沒爲享

保戊申正月十九日。是日天大雪。臨終謂人曰。海內第一流人物。茂卿將隕命。天爲使此世界銀。

徂徠沒爲享

保戊申正月十九日。是日天大雪。臨終謂人曰。海內第一流人物。茂卿將隕命。天爲使此世界銀。

徂徠病中浮腫。而終紫芝園漫筆曰。徂徠先生甚重生。自飲食居處。以至出入動止。賓客應接之事。苟可。以傷生者。斷弗爲也。然其所。以病死者。乃以思慮過度也。蓋先生有志于功名。自少以著述爲事。年過六十。猶不能清心靜養。遂致篤疾而死。謝在

徂徠浮腫を病んで終る。紫芝園漫筆に曰く、徂徠先生甚だ生を重んず。飲食居處より、以て出入動止賓客應接の事に至るまで、苟も以て生を傷る可きものは、斷じて爲さず。然れども其の病死せる所以は、乃ち思慮度に過ぎしを以てなり。蓋し先生功名に志有り。少より著述を以て事と爲す。年六十を過ぎ、舊疾數々發して、猶ほ清心靜養すること能はず。遂に篤疾を致して死す。謝在杭云ふ、思慮の人を害する、酒色より甚だしと。誠なりと。竹山の非微に曰く、余嘗て之を聞く、徂徠の疾むや、日日侍者に宣言して曰く、宇宙俊人の死には、必ず癡怪有り。今當に紫雲の舎を覆ふ有るべし。若等出でて之を觀よと。病革るに及び輾轉呼號して、紫雲口を絶たず。家人及び高足の弟子輩深く之を恥ぢ、絶えて外人を通ぜず。故に一時或は繆傳以て良死に非ずと爲すと云ふと。此れ竹山妄語を傳聞するなり。徂徠關東に起つて海内を風靡す西人動れば爲に莠言を造り、以て之を非駁す。要は皆媚妬の心に出づ。

杭云。思慮之害人。甚於酒色。誠矣。竹山非微曰。余嘗聞之。徂徠之疾也。日日宣言侍者曰。宇宙後人之死。必有二靈怪。今當有紫雲覆舍。若等出視之。及病革。輒呼號。紫雲不絕口。家人及弟子輩深聽之。絕不通外人。故一時或纏傳以爲非。其死云。此竹山傳。開妄語也。徂徠起于關東。而風靡海內。西人動造爲秀言。以非駁之。要皆出於媚妬之心。

- ちくみ ● たちふるまひ又客との應對 ● 靈怪を訴ふることはなまざ ● 何もかもけずして御後す
- 中井竹山 ● 紫の雲が案をまはふ ● ふしまるび、よびまじりふ ● あままり傳ふ ● くだらぬ説を傳へきく ● 西國の人 ● 有言官の、腹口 ● 忌み、たむ

芝三田長松寺。徂徠墓在焉。猗蘭侯撰其碑文。葛鳥石書之。工始竣。遠近爭傳。來摸搦之者。日甚衆矣。近時東藍田。併春臺撰誌。更刊木爲一冊。子以覽之。長松寺號壽命山。自葬徂徠後。一號徂徠山。

芝三田長松寺に、徂徠の墓在り。猗蘭侯其碑文を撰し、葛鳥石之を書す。工始めて竣るや、遠近争ひ傳へ、來つて之を摸搦する者、日に甚だ衆し。近時東藍田、春臺の撰する誌を併せ、更に刊木して一冊子と爲し以て之を贈ぐ。長松寺は壽命山と號す。徂徠を葬りしより後、一に徂徠山と號す。

- 葛西内長、名は質 ● 石アリにする ● 伊東藍田、江戸の儒者、名は龜年

雨森東

雨森東。字伯陽。小字東五郎。號芳州。平安人。或曰。伊勢人。仕對馬侯。

雨森東、字は伯陽、小字は東五郎、芳州と號す。平安の人。或は曰く、伊勢の人と。對馬侯に仕ふ。

芳洲年十七。八。來江戶。從學木順菴。才藻卓絕。順菴稱爲後進領袖。遂因其薦。仕對馬。掌文教。恆接對韓人。名聲馳海內外。

芳洲年十七、八、江戸に來りて木順菴に從ひ學ぶ。才藻卓絶、順菴稱して後進の領袖と爲す。遂に其薦に因つて對馬に仕す。文教を掌り、恆に韓人に接對し、名聲海の内外に馳す。

- 木下順庵 ● 文才ナぐる ● 頭首、主腦 ● トして仕ふる、別に仕官するをさふ

芳洲通。其每與韓人相說話。不假譯者。韓

芳洲象胥の言に通ず。其の毎に韓人と相說話するに、譯者を假らず。韓人嘗て戲に謂つて曰く、君善く諸邦の音を操る。殊に日本に熟すと。

- 通譯、通辯

人嘗戲謂曰。君善操諸邦音。而殊熟日本。

年八十一。始將學倭歌。由意謂詩則有時作之。雖無可稱者。得不謬平仄。至國風。一不解其法。先莫如熟讀古歌。自今讀古今集者。一千遍。而後自賦者一萬首。其或有所少。通焉。乃經三二年。二千遍畢。又三年而萬首就。

年八十一、始めて將に倭歌を學ばんとす。意謂へらく詩は則ち時有りて之を作る。稱す可き者無しと雖も、平仄を謬らざるを得。國風に至つては、一も其法を解せず。先づ古歌を熟讀するに如くは莫し。今より古今集を讀むこと一千遍、而して後自ら賦すること一萬首なれば、其れ或は少しく通する所有らんと。乃ち二年を経て千遍畢る。又三年にして萬首就る。

● 和歌 ● 醍醐天皇の勅によりて紀實之等撰す

梁說巖杜三楊諧文集序曰。物茂卿讀和歌云。三十一字侏離之

梁說巖が杜三楊諧文集の序に曰く、物茂卿和歌を讀つて云ふ、三十一字は侏離の言道ふに足らずと。蓋し東人にして其腹を華にする者、固より一家言のみ。雨伯陽嘗て予に語つて曰く、玉露凋傷す楓樹の林、美は則ち美なれど、我が猿

言不足道。蓋東人而華其腹者。固一家言耳。雨伯陽嘗語予曰。玉露凋傷楓樹林。美則美矣。不如我猿大。夫紅葉鹿鳴。使二人易之感。爲也。伯陽善華音。綜博有藻材。其品不出茂卿下。而其言也如此。可謂知言者一哉。

大夫の紅葉鹿鳴が、人をして感じ易からしむるの愈れりと爲すには如かずと。伯陽華音に善し。綜博にして藻材あり。其品、茂卿の下に出でず。而も其言や此の如し。知言者と謂ふ可きかな。

- 梁田說巖 ● 外國語の聲音の解し難きを嘲りていふ。此處は無意味にして取るに足らざるものと云ふ
- 祖孫は日本人にして魂は支那に化す ● 雨森芳洲 ● 美しき麗にあひて眞の美しむといふ詩句の題 ● 猿丸大夫の奥山に紅葉よみわけ鳴く鹿の聲さく時ぞ秋はかなしきといふ歌 ● 支那語 ● 學問廣くして文才あり
- 人物 ● 道理ある言を吐く人

世之儒者以今之職名爲僮俗。及文記之。則換易名號。濫釋亂實。非所以垂後世也。至於近時有識之士。

世の儒者今の職名を以て僮俗と爲す。文之を記すに及び、則ち名號を換易す。濫稱實を亂る。後世に垂るゝ所以に非ず。近時有識の士に至つて、直に今の官職を書すること、百年前芳洲已に鞭を著く。橘憲茶話、對馬州文學原任用人雨森東と自署するに、見る可し。

● てたらめの名刺 ● 前用人役をつとむ

直書今之官職。而百年前芳洲已著。觀焉。橋憲茶話。自署對馬州文學原任用人雨森東。可見。

芳洲。白石。者三十年。而交分不協。嘗謂白石爲其心術不可測。嘗面折一事。白石曰。以如子之君子。疑余所謂白頭翁新也。又其橋憲茶話。自怪窩羅山。至其師順菴及社友凡名。一時者。盡舉之以品藻其才行。而獨不及白石。

木門俊逸不。乏其人。歎雨海才氣最蓋。諸友其所敬畏。莫如伯陽氏。

芳洲、白石を識ること三十年。而も交分協はず。常に白石を謂つて其心術測るべからずと爲す。嘗て一事を面折す。白石曰く、子の言の如きを以て、子余を疑ふ、所謂白頭翁は新なりと。又其橋憲茶話、怪窩羅山より、其師順菴及び社友凡そ一時に名ある者に至るまで、盡く之を擧げて以て其才行を品藻すれども、而も獨り白石に及ばず。

● 交分不協は、面折に非ざる。● 白髮の老人となるまで交るも意氣合はずれば、斯く交り始めたる人の如くなり。● 批評

木門俊逸其人に乏しからず。祇南海才氣最も當世を蓋ふ。而も鍾秀集に記して曰く、予諸友に於て其敬畏する所、伯陽氏に如くは莫しと。

● 木門俊逸の門下 ● 橋憲茶話

當世。而記鍾秀集。曰。予於諸友。其所敬畏。莫如伯陽氏。

芳洲。學術文章。與徂徠殊。其途軌。而交朋意厚。每書詩相通。橋憲茶話曰。物茂。博覽文章。域內無比。第於大綱上。有差。心實。徂徠亦屢稱芳洲。果。劇談三日。傳木夫矣。

芳洲、學術文章、徂徠と其途軌を殊にす。而も交朋意厚く、毎に書詩相通す。橋憲茶話に曰く、物茂卿は余が故人なり。博覽文章域内比無し。第大綱上に於て差あり。心實に憐焉たりと。徂徠亦屢々芳洲を稱す。江若水に與ふる書に曰く、雨芳洲果して來る。劇談三日。偉丈夫なり。其子顯允、予を拜して師と爲し、門下に留ること三月、行々將に西に歸らんとす。亦偉丈夫の子なり。必ず家聲を墜さざる者。余皆序を作つて之を送る。芳洲更に丈夫子二人あり。皆幼にして詩を善くす。渠嘗に偉丈夫たるのみにあらず、亦福人と謂ふ可しと。又風景山に答ふる書に曰く、洛に伊原藏あり。海西に雨伯陽あり。關以東には則ち室師禮ありと。

其子顯允。拜予爲師。留門下者三月。行將西歸。亦律丈夫子矣。必不墜家聲者。余皆作序送之。芳洲更有丈夫子二人。皆幼善詩。渠不啻偉丈夫矣。亦可謂福人也。又答風景山書曰。洛有伊原藏。海西有兩伯陽。關以東則有三室師禮。

● ちちずをちがへる ● 學に志す方針に差別あり ● ちきたちざるさま ● 江村若水、名は宗渡、字相島侯の文學 ● 蒙の評判をわろくせず ● 男兒 ● 眞正超、安樂侯の儒臣 ● 京都に伊藤東涯あり ● 室鳩巢

嘗使子顯允師徂徠。居其塾。未幾使出塾而歸。曰。徂徠實一代豪傑。不可不以常儒視之也。雖然其教人。不先德行。是以家塾失序。非可三以託少年一者也。

嘗て子顯允をして徂徠を師として其塾に居らしむ。未だ幾ならず塾を出て歸らしめて曰く、徂徠は實に一代の豪傑、常儒を以て之を視る可からず。然りと雖も其人を教ふるや、德行を先にせず。是を以て家塾序を失ふ。以て少年を託すべき者に非ずと。

● 徂徠の塾は秩序無し

三輪希賢

三輪希賢。字善藏。號執齋。又號躬耕廬。平安人。執齋之先。舊保大和三輪神社司祝。父曰澤村自三。業醫。住京師。執齋六歲失怙。買人大村某者。以下同出自三。親與自三三相親善。故乃育執齋。比漸長。出冒風野氏。年十九及佐藤直方之門。始曉下承

三輪希賢、字は善藏、執齋と號す。又躬耕廬と號す。平安の人。

執齋の先は、舊大和三輪神社の司祝に係る。父を澤村自三といふ。醫を業とし、京師に住す。執齋六歳にして怙を失ふ。買人大村某なる者、同じく司祝より出で、自三と相親善せるを以ての故に、乃ち執齋を育す。漸く長ずる比、出でて眞野氏を冒す。年十九にして佐藤直方の門に及び、始めて他姓を承くるは古に非ざるを曉り、即ち本姓三輪に復し、以て其祖を祭る。是に於て深く直方を徳とす。直方の病革るを聞くや、疾に往いて之を訪ふ。命既に絶えて及ばず。乃ち倭歌八首を賦して之を哭す。其の三輪に復するを得たるを陳謝して云ふ、忘れずよ、三輪のしるしの、過ぎし世を、慕ふも君が、教ならずや。又直方をして終に王氏の學に歸せざらしむるを以て恨と爲し云ふ、さりとも

他姓非古。即復本姓三輪。以祭其祖。於是深德直方。聞直方之病革也。疾往訪之。命既絕而不及。乃賦後歌八首。哭之。陳謝其得。復三輪云。獲新列調都。密獲酌失兒失酌。斯及失都屋。失但庸木吉密渴。屋失獨捺刺同。鳴。又以使直方終不歸。王氏學爲恨云。豐栗爲木篤。穀穀綠眩骨茂失。盼咄斯石屋。乙頓。垣穢葛列失。捺趨粟葛捺失木。

後有悟於餘姚致良知之學。講說士大夫。聞嘗因直方。遂致仕而去。以初以朱學。今不用。其說與侯所求異也。或云侯信僧祐天。

と、心にこめし、一すぢを、言はで別れし、名残悲しも。

● 神主 ● 三輪のしるしは杉なり。遺言しにかりていふ ● 玉陽明の墓

後餘姚致良知の學に悟るありて、士大夫の間に講説す。嘗て直方の薦に因て、侯に宣せしが、遂に仕を致して去る。初め朱學を以て進み、今其説を用ひず、侯の求むる所と異なるを以てなり。或は云ふ、侯、僧祐天を信ず、故に去ると。是に於て京に歸り、尋で大阪に之き、又江戸に來る。數年の間居止。恆にせず。梁殿殿が井覺菴に復する書に曰く、示及の寛量小濱公に告ぐる文一首、讀玩再三、以て徳業の實を觀るに足る。大抵執袴の子弟、膏粱に飽き、肉に耽り、未だ嘗て學問せず。其の吏を馭し民に臨むに及び、膏として務を知ら

後餘姚致良知の學に悟るありて、士大夫の間に講説す。嘗て直方の薦に因て、侯に宣せしが、遂に仕を致して去る。初め朱學を以て進み、今其説を用ひず、侯の求むる所と異なるを以てなり。或は云ふ、侯、僧祐天を信ず、故に去ると。是に於て京に歸り、尋で大阪に之き、又江戸に來る。數年の間居止。恆にせず。梁殿殿が井覺菴に復する書に曰く、示及の寛量小濱公に告ぐる文一首、讀玩再三、以て徳業の實を觀るに足る。大抵執袴の子弟、膏粱に飽き、肉に耽り、未だ嘗て學問せず。其の吏を馭し民に臨むに及び、膏として務を知ら

故去。於是歸京。尋之大坂。又來江戸。數年之間居止。不恆。梁殿殿復并覺菴書曰。示及告寛量小濱公文一首。讀玩再三。足以觀徳業之實矣。大抵執袴子弟。飽膏粱耽絲肉。未嘗學問。及其取吏。民。膏不知務。其者豈人哉。國。如公可。謂火中蓮乎。雖。然。徵。輪。氏。

す。甚だしきは人を毒し國を毒す。公の如き火中の蓮と謂はざる可けんや。然りと雖も輪氏微りせば道を聞くことを得ず。姚江の學、其の陶鑄する所果して誣ひず。方今江左の儒人、詞藻を以て名ある、南郭金華諸才子の如きは姑く是を置き、振鐸四方、大に聖學を倡ふるもの、斯の人を舍いて其れ誰ぞや。昔文中子道を河汾に講じ、王、魏、房、杜の曹、材を達し徳を成す。安ぞ他日東都の賢士大夫にして、體を明かにし用に適し、寛量公と相弟昆する者の、輪門に出でざるを知らんや。吾儕當に目を拭つて俟つべし云云と。

- 餘姚は王陽明講學の地、致良知は其學の根本の一なり、故に陽明學を指す ● 梁殿 ● 扇る所定まらず
- 梁田殿 ● 中井覺菴 ● 御示しにされる ● しるぎぬのはかま、貴族の子孫の ● 肥田強穀 ● 音樂、鐘不如竹、竹不如肉の語に取る ● 眼がくらむ、ぼんやりして ● 人を傷け國をまよぼす ● 小濱
- 公 ● 執齋 ● 陽明學、姚江は陽明の居たる地名 ● 土をうねて陶鑄を作り、金を鑄て金鑄を造る如く人物を作り上げ ● 陶東 ● 顧都顧郭、井上金言 ● 碑を築ふ意、數を廣むるなり ● 河は黃河、汾は汾水、共に河の名 ● 王風範、魏徵、房玄齡、杜如晦 ● 弟昆に弟兄、相匹敵する意 ● 執齋の門

不得聞道。姚江之學。其所陶鑄。果不誣矣。方今江左儒人。以詞藻一名。如南郭金華諸才子。姑置是。振鐸四方。大倡聖學。舍斯人其誰也。昔文中子講道河汾。王魏房杜之曹。雖材成。德安知。他日東都賢士大夫。明體適用。與寬量公相弟昆者。不出輪門乎。吾儕當拭目而俟云云。

嘗爲一浮屠。講中庸。而以三。彼終不改。釋。歸。乃寄書。却其所贈者。此可三以觀其篤修且豪矣。其文曰。釋徒。釋師。請予。講中庸。予知其有。意於。正道。而爲。折之。務斥佛氏之悖性命之理。而窺口。

嘗得一浮屠の爲に中庸を講ず。而も彼終に釋を改め儒に歸せざるを以て、乃ち書を寄せて其の贈る所の者を却く。此れ以て其の篤修且つ豪なるを觀る可し。其文に曰く、釋徒釋師、予に中庸を講ずるを請ふ。予其の正道に觸ふに意有るを知りて、爲に之を剖析し、務めて佛氏の性命の理に悖つて、日用の常を棄つるを斥く。其の舊習の非を悟つて、吾が道の正に歸する有るを庶幾ふのみ。講學つて、我に惠むに筆墨及び時一絶を以てす。情意甚だ厚し。予謂ふ子思子の中庸を作るや、正に異端の道學を害せんことを憂ふる是れのみ。則ち凡そ吾が學を爲むる者、固より宜しく浮屠の爲に講説すべき所に非ずと雖も、然れども或は其非を知つて儒に歸する、亦美事ならずや。是れ予の其請に應ずる所以なり。師終

用之常矣。庶幾乎其有悟。舊習之非。而歸吾道之正焉耳。講畢。惠我以筆墨及

に陷溺の窟を免出する能はず。則ち惠む所の筆墨之を受くること尤も説無し。故を以て直に之を却けて、懷ふ所を述べ。呀するなかれと。

詩一絶。情意甚厚。予謂子思子之作中庸也。正憂異端之害道學。是已。則凡爲吾學者。固難非所宜爲。浮屠講說。然或知其非。而歸於儒焉。不亦美事乎。是予所以應其請也。而師終不能免。出陷溺之窟。則所惠筆墨受之。尤無說矣。以故直卻之。而述所懷焉。勿呀。

執齋詩文固非所長。然其文達意。不事彫繪。詩則集中亦僅僅耳。世多未見之。因今舉三首。懷鄉云。故園萬里東。茫茫

執齋、詩文は固より長とする所に非ず。然れども其文達意にして彫繪を事とせず。詩は則ち集中亦僅僅のみ。世多く未だ之を見ず。因て今三首を擧ぐ。懷郷に云ふ、故園萬里の東、茫茫として望み窮無し、紅は添ふ梅花の雨、白は知る柳絮の風、陽炎草野に盈ち、落日山中に入る、瘦馬春色を追ひ、黃昏歸路空しと。三嗜吟に云ふ、祿を辭して偶々成る詩一章、閑を偷み適を取り

望無窮。紅添
梅花雨。白知
柳絮風。陽炎
盈草野。落日
入山中。瘦馬
追春色。黃昏
歸路空。三嗜
吟云。辭。綠。偶
成詩一章。偷
雨取。適。閱。風
光。潤。明。徑。裏
孤松老。茂叔
窓前萬。神。長。

使聽者心醉。
管抵近江小
川村。集士民
講學。四坐皆感泣服之。翁然相謂爲藤樹先生再生。

風光を閑す、潤明徑裏孤松老い、茂叔窓前萬神長す、市に非らず山に非らず人
寂莫、晴れんと欲し雨らんと欲し客彷徨、家を移して自ら愛す三嗜の内、鄭
紅を含んで夕陽に向ふと。水仙に題して云ふ、夜寂たり藥珠宮殿の内、黃
冠綠袖獨り蕭然、金盤高く捧けて朝露を承く、自らはれ地行花裏の仙と。
● 飾リをツトめず ● 放冠 ● 柳の花 ● 夕日 ● 存景色 ● 夕暮、たそがれ ● ひまをこしらへ
氣ま、比ふるまひ景色を見て樂しむ ● 潤明の歸去處の辭に「三徑荒に草は存す」の句あり、鄭も隱宅
の近傍に老松あり、吟ず ● 潤明が、雜草も自家生々の草と一般なりとて、窓前の草を刈らざりし故事より、此
は萬草の長ずるを述ぶ ● 三飲の田 ● フツレ ● 花の裏を宮殿に留へ更に花辨を黃冠に懸を綠袖に懸
ふ ● 仙人は空を行くものなれば人を説いて地行仙といふ、此處は水仙を願していふ

執齋尤も事體に請達し、其言優游として餘味有り。能く聽者をして心醉せしむ。
管て近江の小川村に抵り、士民を集めて學を講ず。四坐皆感泣して之に服し、

三宅尙齋歎
載錄曰。三輪
希賢。往年自
悔親死時幼
弱不知不。服
喪。三十餘年
後。先。忌。日。百
日計爲服喪。
余當時爲說
其不可。渠終
不用。儀禮喪服傳。嫁女小詳後被出歸于家。服既除。故不與三兄弟更著。三年服。蓋可三以見。
事之既過者。不復必追一矣。

翁然として相謂つて藤樹先生の再生となす。
● 世上の事が、比そらんと述す ● のびやかにして味あり ● 心を奪はる ● 一體に向ふ説

三宅尙齋の歎載錄に曰く、三輪希賢、往年自ら親の死せし時幼弱不知にして喪
に服せざりしを悔い、三十餘年の後、忌日に先だつ百日計服喪を爲す。余當時
爲に其不可を説く。渠終に用ひず。儀禮喪服傳にいふ、嫁女小詳後出されて家
に歸れば、服既に除く。故に兄弟と更に三年の服に著かすと。蓋し以て見る可
し。事の既に過ぐる者は、復必ずしも追はずと。

執齋有六男

執齋に六男子あり。曰く孝、曰く友、曰く睦、曰く嫻、曰く任、曰く恤。而して

